

565-323

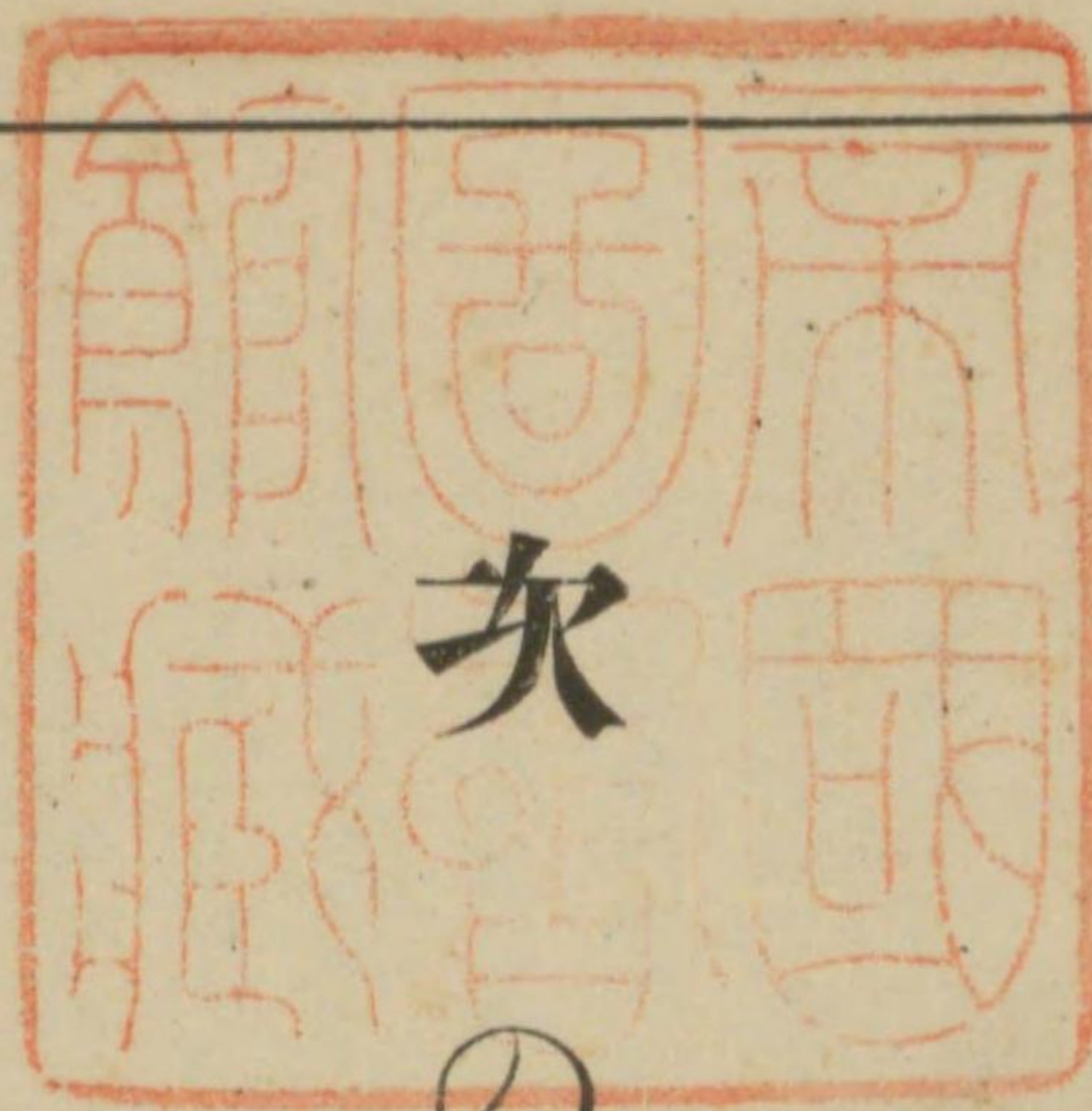


1200501514505



026

海野幸徳著



次の

社會

東京
赤
爐
閣



5-65-323

卷頭に

雜

次の社會は今の社會である。社會の進化が漸次的で、飛躍せざる限り、次の社會と言つても、今の社會にないようなものが突然舞臺に現はれ出づるのではない。現代文明諸國家の形體は一も次の社會の要素と面影とを具備しないようなものはない。敢て、次の社會と言つて珍重するには及ばない。現にあるものが次に開發するまで、無よりは有は生じない。それに、如何なる社會と雖も變動し推移しないやうな社會は絶えて存しない。如何なる時代の社會にも次の社會のないやうなものは一もない。何人も社會を以て確定不動であるとは考へないであらう。社會は常に變化しつゝあり、前進しつゝある。これが社會進化の實相であるが、社會が進化しないやうになれば、やがて社會亡滅の秋である。健全なる社會は絶えず變化し進動する。次の社會のないやうな社會は早晚衰亡する社會なのである。よつて、次の社會を設定し、これを研究するのは尋常茶番なことで、社會進化の科學的研究上欠くことができぬ。たゞ、社會諸

卷頭に

一

科學の進歩が自然科學に及ばないため、果して、精確な資料に基き正確なる豫測をなし得るか
 どうか分らぬだけである。これ現代人の社會諸科學に對する研究の不熱心の結果で、如何と
 もすることができない。自然科學の研究によつて十九世紀は「驚くべき世紀」となり、一世紀
 間に、その前、千八百年間に於ける文化の總和よりも、大なる文化を産出することができた。
 この次には社會諸科學の研究に及び、十八世紀の自然征服に對して、今度は、人間、社會を征
 服しなければならぬ。こゝに人類に約束されたる想像すべからざる著大なる福祉を産出しうる
 契機が包藏される。

この書は、人類、人間の福祉を増進することを念とする著者の人類社會への微小なる一の寄
 與である。科學者としての著者の目標は流れ來り流れ去る社會進化の科學的研究である外他意
 はない。本書は嚴密なる意味に於ての科學的研究である。その外、社會改良家としての著者は
 これによつて夢寐にも忘れかぬる同類への福祉が餘瀝として一インチでも改善の緒に就くを希
 望する。自由放任の偶々変種(カウチ)如ク多クハ偶々変化モアルヲ
 著者は進化論者であるが故に、飛躍的な變革による社會の推移を危険なりとする(拙著「階

包藏嚴密想像 社會契機 寐寐

級闘争の研究」第七章「革命と進化」に社會變化は革命によるべきにあらず進化によるべき
 義を明かにす) 社會は徐々微細なる變化を加重して安全に進轉すべく、殊に、外形的な政治
 的變化よりも、主觀的な心理的變化を重要なりとする。心理的變化をなさず、現に見るが如き
 狼の如き侵略的で利己的な人類を以てして、狐の如く、狡猾にして獨善的な人間を以てして何
 事をなし能ふか惑ひなき能はず。如何なる理想的な生活様式を以てするも、先づその中に住ふ
 人間を善人となし愛他主義者となさなければならぬ。社會運動家は一定の目的措定をなし、是

が非でもこれに到達せんとする熱狂家であるが、科學的研究は冷靜に客觀的に事理を分析闡明
 すれば足る。人間社會の改良の方針は科學の指示するが如く漸進的であり、心理的變化を加重
 して徐々目的に達するにある。科學的な根據のないような提説はその何たるを問はず排去すべ
 きで、現今流行の深き根據なき通説は漸次その正體を曝露しなければならず、單に時流に投じ
 て穉氣滿々たる如き狂態は排去しなければならぬ。これに對して、著者は綜合的見地から、漸
 次、社會的な破邪顯正に移るであらうし、社會諸科學の範圍に綜合的研究の學風をいれたいと
 考へてゐる。現今、偏僻なる通説が繁昌するのは、わづかに一科學に偏し、分析的研究に終始

し、総合的研究をなすことの能きない窮状にある結果でもあらうと思ふ。

如何なる社會でも變化しないような社會はなく、従つて、如何なる社會にも前の社會もあり、次の社會もある。然らば、次の社會への維移を如何ようにするのが最も安全であらう。人間は意識的に自然を指導し、これを利用したが、再び人間は意識的に社會を指導し、これを利用して、人類の福祉を企圖實現しなければならぬ。これ、次の社會の研究を必要とする所以で、著者が本書に於て企てる課題は即ちそれである。

次の社會は如何なる社會にも附隨するとすれば、今の社會から次の社會への進化を研究する必要が起るが、我國には未だこの種の文献がないやうである、今の社會は種々の要素と方針とが混合し合つて居り、純一ではない。但し、その中に一貫した進動の方向がある。この方向は前代の個人を本位とすることから、社會を本位とすることに向つて居る。現代の文明諸國は、すづれも福利國家 (Wohlfahrtsstaat) であり、社會、民衆に對し、全體として福利を増進することに^{つとめつゝ}あり、社會政策が何づれの國にも行はれて居る。すなはち、現代諸國家は社會本位に向ひつゝある。資本主義にあつても、個人的資本主義は社會化して社會的資本主義

御言ひ刻ニアテハマソ他ニハアテハマラス

に變化しつゝある(七章、三節)これによつて資本主義も亦社會本位に向ひつゝあることが分る。現代に於ては如何なる主義、方針と雖も社會本位に向ふ。これに對し、著者は「社會的原理」(Sozialprinzip)なる抽象的原理を設定して「今の社會」と「次の社會」との漸次的變化の面影を分析闡明する方針となし、尺度となした。

社會の進化は終始理想文化の方向を指して進みつゝあり、如何に社會階級が互に争ひ合つて居ても、いつでも、その目標は理想文化であり、徐々として人間と社會との福祉を招徠實現せんとするが如し。今の社會は個人本位より社會本位に向ひ、個人的原理より社會的原理に轉じ、個人の福祉より社會全體の福祉を目標とする方針に轉じつゝある。社會諸階級は階級的立場をとつて鬭争するが、其目指す到達地は人類的立場であり、階級意識は人間意識、人類意識、人道意識に改められつゝある。たとへば、労働者運動は階級的立場から労働階級意識によつて行はれて居るが、労働概念のうちには筋肉労働者の外に精神労働者をも含め(英國労働黨の如く)ついに全人類を抱擁する傾向がある。こゝに階級的立場は人類的立場に轉ずる契機が包藏される。従つて、労働概念は労働者限りのものでなく、全人類のものとなり、労働階級意識

は不知不識人間意識、人類意識、人道意識に進轉しつゝある。これ、著者が固く人類的立場をとり、階級的立場を打破せんとする所以である。階級的立場に終始すれば、人類はついに滅亡の一途を辿る外はない。階級といふが如き區劃はいつまで行つても存在するから、闘争は永久となつて底止するところを知らず、敵も味方も共倒れとなる外はない。歐洲大戰は階級的立場によつて破綻を呈露する一例であるが、第二次、第三次世界大戰が國家別といふ階級的立場によつて勃發する場合を想像すれば、それは文明諸國家の共倒れあるのみ。こゝに階級的立場は人類的立場に轉向しなければならぬ理由がある。

著者の本書に於ける研究は科學的分析の外には出でないが、これによつて、人類を全體として、その福祉と進化とを念とする誠意の發露あらんことを望む。著者の目的は飽くまで平和と協調と愛好とであつて、人類的立場によつて、この目的に接近せんことを欲し、階級的立場を打破して、全人類の平和と福祉とを増進せんことを期す。

本書の研究が人類社會に對し、人間意識、人類意識、人道意識を深め且つ高める一助となり、社會の平和と福祉とを増進するたよりのとなれば、著者の欣幸これに過ぐるものはない。

君の後の論は、近き具体的論ヲハケ、ソレヲハ、實際

結言ニ後ニ多クナリ

著者ハ人類の目的ヲ (ソレモ其ロニカ)

昭和六年八月盛夏

海野社會事業研究所

海野幸徳

新社会の発展を期す

次の社會

目次

第一章 次の社會

一次の社會……………	一
二今の社會と次の社會との關係……………	三
三今の社會の形相……………	六
四次の社會の形貌……………	七
参考文献籍……………	八

目次

第二章 個人的原理と社會的原理

一 社會主義と目的及手段……………一〇

二 形式的法的平等……………一四

三 經濟的平等……………一六

四 平等なる分配……………一九

五 社會的原理……………二三

六 次の社會と社會的原理……………二七

参考文献籍……………三五

第三章 個人と社會

一 自由と平等……………三七

第四章 個人本位の社會と社會本位の社會

二 個人と社會との持分……………四五

三 個人的自由と社會的規範……………五〇

四 個人・自助團體・國家……………五五

参考文献籍……………六三

一 自由……………六五

二 經濟的自由……………六九

三 個人主義社會と財産所有の自由……………七三

四 經濟主義……………七四

五 經濟的協力……………七七

六 個人本位主義と社會本位主義の價值……………七九

参考文献籍……………九〇

第五章 資本主義

一 資本主義と個人主義……………一〇〇

二 合理的經營精神……………一三三

三 世間的 精神……………一三〇

四 社會的經濟的要因……………一三三

五 資本主義と文化……………一三五

六 資本主義の本質……………一九一

參 考 文 籍……………一四五

第六章 次の社會と社會主義

一 社會主義と資本主義との相反……………一四〇

第七章 社會的原理の開展

二 個人主義と資本主義……………一六一

三 社會主義と集産主義……………一六九

四 社會主義と社會的原理の具現……………一七三

參 考 文 籍……………一八二

第八章 今の社會と次の社會

一 社會的原理の具現……………一八四

二 國家の社會化……………一九二

三 資本主義の社會化……………一九四

四 社會的社會への轉向……………二〇六

參 考 文 籍……………二〇九

一 社會主義社會と國家……………三〇

二 過渡的經濟秩序……………三九

三 國家社會主義の折衷主義……………三一

四 聯帶主義……………三六

五 個人主義と集産主義との折衷……………四二

六 個人主義と平等主義との折衷……………四八

七 今の社會・次の社會……………五三

參 考 文 籍……………五五

第九章 福利國家……………

五七

參 考 文 籍……………五八

第十章 露西亞の社會政策……………

一 露西亞社會政策の特質……………六〇

二 私的社會事業……………六六

三 年 金 制……………六七

四 社會保險……………七〇

五 不能者保護……………八一

六 聾啞者保護……………八三

七 農民保護……………八四

八 保健保護……………八五

參 考 文 籍……………九〇

第十一章 波蘭の社會政策……………

一 波蘭の社會事業教育……………一〇七

二 社會事業教育機關……………一一〇

三 社會事業教育の方法……………三三二

四 農村社會政策……………三七七

参考文献籍……………三八

第十二章 白耳義の社會政策

一 白耳義の社會事業學校……………三三九

二 白耳義の社會的學制……………三三一

三 官立社會事業學校……………三三六

参考文献籍……………三三六

第十三章 丁抹の社會政策

一 貧民と老齡者……………三三七

二 失業保護……………三四〇

三 災害保險……………三四一

四 疾病保險……………三四四

五 疾病保護……………三四六

六 兒童保護……………三五四

七 勞働者保護……………三六三

八 私的福利事業……………三六七

参考文献籍……………三六八

第十四章 西班牙の社會政策

一 西班牙社會政策の現勢……………三七〇

二 社會福利組織……………三七三

三公的保健保護……………三七五

四 兒童保護……………三六八
 五 不具者保護……………三八一
 六 盲人保護……………三八三
 參 考 文 籍……………三八四

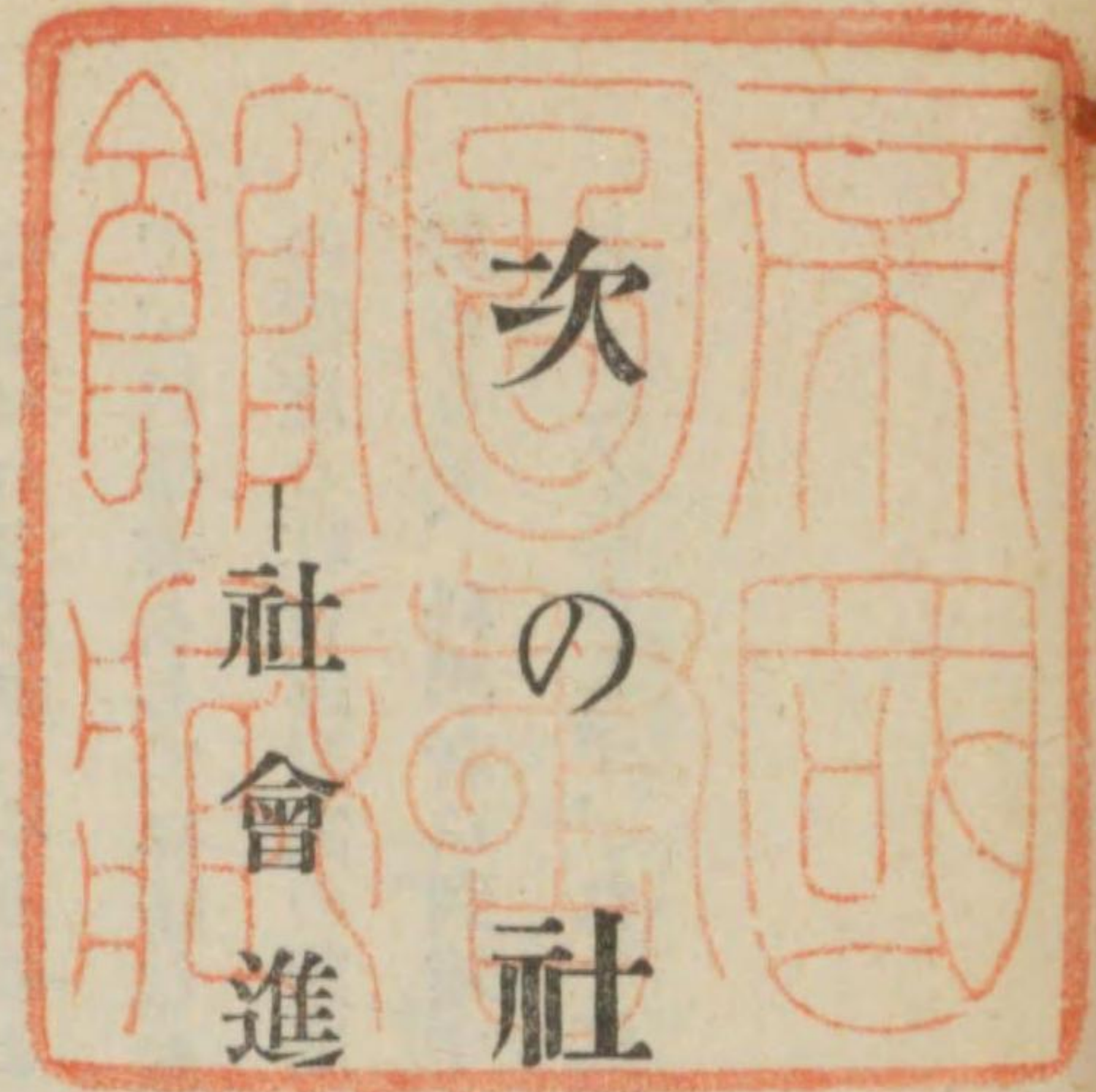
第十五章 次の社會の展望

一 次の社會の豫測……………三六六
 二 集中的經濟制度の發展……………三六九
 三 個人的社會と社會的社會との結合……………三九八
 四 個人主義的經濟と社會本位主義的經濟との統合……………四〇六
 五 資本主義經濟の運命……………四一
 六 次の社會の展望……………四二三

參 考 文 籍……………四三五

第十六章 理想社會……………四三七

參 考 文 籍……………四四四



次の社会

社会進化の研究

海野幸徳

第一章 次の社会

一次の社会

次の社会は現にある社会である。社会は突然現はれるものではなく、漸次的變化を加重してその形貌を明かにする。前になかつたものが突然今の社会にいたり開展するのでもなければ、今の社会にないものが次の社会にいたり突然姿を現はすのでもない。如何なる社会でも可變的である限り、社会は常に變化しつゝあり、進動しつゝあり。現に見る社会はやがて次の社会の

形貌に轉成する。

如何なる社會と雖も次の社會のないようなものはない。社會は常に變化しつゝあり進動しつゝあるとする命題は動かすことのできないものであるからには、如何なる社會にも必ず次の社會があるといふ命題は又動かすことができぬ。次の社會など、言つて珍らしがるには及ばぬ。往古今來、社會はたえず變動し進化し來りたるを以て、次ぎ／＼に新たなる社會が現はれつゝあつた。

次の社會とは何か。著者は科學者の態度をもつて何の好惡をも加へず、價值判斷をいれず、事實ありのまゝに分析闡明しよう。著者には次の社會が望ましいものでないとしても、それが次に現はれる限り、有りのまゝ認識し叙説しなければならぬ。これ、科學者としての當然の態度で、科學者としては好むも好まぬも、先づ事實を有りのまゝ認識し記述する外はない。科學者の態度と社會運動家の態度とは異ふ。社會運動家は一定の目的措定をなし、それに到達せんと努めるが、科學者は到達すべき目標の如き一切設定せず、如何なる着陸點を見出さうとも關するところにあらず、たゞ眞理の指示するところに向はんとするのみ。科學者の態度は客觀的に

事理を分析闡明すれば足りる。

二 今の社會と次の社會との關係

次の社會は今の社會の繼續であり、轉成である。現に見る社會的現象とその變化とが次に明かにその姿を現はすのである。社會は徐々に變化する。急激なる變化は社會の生命を危くし、その健全なる發達を阻害する。社會の進動は急激なる變化としての革命によるべきでなく、漸進的變化としての進化に依るべきである（拙著「階級闘争の研究」第七章「革命と進化」參照）

社會が漸次變化をなしつゝありとすれば、次の社會の形貌は今の社會の形貌を見れば一應了解しうる。今の社會の變化する方向は限定的には分らぬが、その原則だけは明かに指示し得られる。次の社會を以て社會主義社會であると言ふように説くものがあるが、そのような限定的な形體に於ては何も分らぬ。社會科學の診斷や豫測は自然科學のそれよりも粗末であるのは分り切つてゐる。自然科學の豫測と雖も精確と云ふことはできぬ。今のところ、社會科學の診斷

や豫測は概して限定的になしうるものではないが、慎重なる科學者としては一層限定的判断を下すべきではない。現時、社會諸科學の領域に於て、その進度の慙むべきことに照應して、到底何も限定的な判断を下すことはできない。よつて、注意深き研究家としては、多くの場合、一般的原则を確定することだけで満足しなければならぬであらう。

従つて、次の社會をもつて社會主義社會など、限定的判断を下すことはできぬ。また、その他、一切の限定的判断も不可能であらう。本書を通じて明かなるが如く、社會主義社會は不由社會であり、個人とその生活とを絶対に強壓控制するので、眞の人間生活をその中で營むことはできないが、社會主義社會は時世の潮流に乗つて勢よく走りつゝあるは明かである。社會主義社會といふが如き特定の社會が次の社會であるかどうか分らぬけれども、今の社會はその形體の如何にもあれ、すべて「個人」より「社會」へ向ひつゝある。蓋し、今に於ても、一般的原则だけは略明かに看取せられるであらう。今の社會はその如何なる形ちのものとも雖も一樣に社會化しつゝあり、個人本位より社會本位に轉成しつゝある。如何なる國家と雖も福利國家 (Wohlfahrtsstaat) ならざるはなく、民衆の福利を先き也となし、荐りに、社會政策を行ひ

つゝある。資本主義そのものも亦社會化しつゝある。資本主義には本來の個人的資本主義の外に社會化したる資本主義即ち社會的資本主義 (Sozialkapitalismus) なる一形體が現はれつゝある。社會主義は素より社會本位である。

これによつて、今の社會は一樣に社會化しつゝあることを知る。今の社會が社會化して居るといふことは現實の事實で、好むも好まざるも正視し認誠する外はない。今の社會が「個人」から「社會」に向つたことについては目前の事實で何の疑義もない。個人主義自由主義の社會は現に見るが如く弊害の著大なるものありとして社會化しつゝある。個人本位のみでは到底民衆の福利を實現する所ならずとして、一齊に社會本位に眼を轉向したといふのが今の社會である。これに應じ、今の社會では不可抗なものとして社會本位の旗幟を押し立て、居る。これ如何なる國家、如何なる形體のものと雖も社會化しつゝある所以である。現代諸國家の社會本位主義は著明であり、眼前の事實である。よつて、限定されたる形體に向つて、今の社會がどう動きつゝあるか分らぬけれども、前代の個人本位から社會本位に向ひつゝあることだけは明白で、疑ふ餘地がない。そこで、本書では次の社會として特定の社會を指摘しないが、たゞ抽

象的原則の確立を明かにし、個人的原理は社會的原理に向ひつゝあり、「個人」は「社會」へ向ひつゝあり、一齊に社會を本位とする社會に轉成しつゝある所以を分析闡明するであらう。

三 今の社會の形相

通常、資本主義は滅亡しつゝあるが如く言はれるけれども、そんなことはない。資本主義の生命は未だつきぬ。今後と雖も資本主義はその固有の活動能力を持續し、尙ほも、人生に對し經濟的福祉を齎らすであらう。勿論、資本主義には悪いところがあるけれども、また、良いところもあり、これが爲め、近代にいたつては人生の福祉が遽かに激増したことも見免してはならない。事理を客觀的に見る主義をとれば、資本主義の本質とその人生との交渉關係は又ありのまゝに見なければならぬ。資本主義が今遽かに滅亡すると考へる程誤つたことはない。但しこれまでの如く資本主義のみが跋扈することはできぬ。すでに社會本位の制度は普く確立し、個人主義たる資本主義經濟に對して、現代諸國家では一樣に個人主義を制限して、社會主義（社會主義にあらず）を採つて居る。

然らば、今の社會は混合であり、折衷であつて、諸々の主義、方針、要素が交錯し交流してゐる。個人本位のものゝ社會本位のものゝは兩々存在して居り、又、この兩者は諸々の程度に於て混合し折衷されて居る。それ故、一の特定なる状態より他の特定な状態へ急轉直下移動するようなことはない。この形勢に照應し、次の社會について特定な限定せられたる社會を設定することはできない。たかゞ、一般的原理を措定するより外はない。

四 次の社會の形貌

今の社會の形勢より判断すれば、次の社會は個人本位から社會本位に轉するのではなからうか。原則的には「個人」より「社會」に向ふけれども、もとゞ今この社會は個人を本位として存續する社會ではある。如何なる社會と雖も、根本的には個人本位ならぬはない。個人が個人として生存することができぬ爲め、社會に入つて仲間生活を始めたのであるから、如何なる社會に於ても個人の生存はあくまで基本であらう。併し、個人は個人として生活するには餘りに無力な無能なもので、その生存を保全することができないから、仲間生活に入つたので

ある。

こゝに、「目的としての個人」と「手段としての社会」とが統合される。個人だけでは生存することができないし、社会だけでは無意義であるから、個人と社会とは両々併せ存しなければならず、よつて、個人と社会とは竟に統合しなければならぬであらう。次の社会は單純に個人より社会に向ふかどうか、個人本位より社会本位に轉ずるかどうか。大體、現に個人本位より社会本位に轉じつゝあるけれども、個人と社会とは相依り相まつて人間生活を一層完成せんとする思想となつて現はれることは避けることができぬであらう。

茲に、個人と社会とは統合されるとする統合的方案が現はれ、個人的原理、社会的原理と共に、統合的原理が分立する。

参考文献

- 1 海野幸徳「社会政策概論」(赤廬閣)
- 2 海野幸徳「階級闘争の研究」(赤廬閣)

- 3 海野幸徳「社会事業学原理」(京都内外出版株式会社)

第一章 個人的原理と社會的原理

一 社會主義と目的及手段

社會主義の限定のうちには手段と目的とが明かに取り入れられなければならぬ。社會主義の目的は「主たる生産手段の社會的統制を行ふ集中的強制的經濟秩序で、平等なる權利と平等なる義務とにより、社會的勞働に參與し、勞働の成果を享有し、社會成員間の部分的搾取が不可能となる」にあるのではない。これは寧ろ社會主義がその目指す目的に達せんとするが爲めの手段に外ならない。それ故、生産手段の社會的統制も、集中的強制經濟秩序も、單なる手段であつて目的ではない。社會主義の目的はこれ等の手段を用ゐて、貧困と罪惡と階級的對立との撤廢せらるゝ、經濟的秩序の實現にある。社會主義は貧困と罪惡と階級的對立とを排除する目的を以て生産手段を社會化するものであり、その間、強制經濟秩序を造り出すのである。

集産主義が社會主義の目的ではなく、それによつて達しえられるものが社會主義の目的である。社會主義にあつては絶対組織化する社會がその目的であるのではなく、それによつて實現せられるものが寧ろその目的である。集産主義は貧困、罪惡、階級的對立を除去する途であり、貧困、罪惡、階級的對立の除去がその目的でなければならぬ。然るに、社會主義者は貧困と罪惡と階級的對立とは不平等より來ると考へるから、社會主義は平等を目的として進むものと考へることができる。集産的經濟的秩序や、集産的社會組織よりも、貧困、罪惡、階級的對立を生ずる不平等なる制度を取り除くことが社會主義の目指す目標であらねばならぬ。

集産的經濟秩序が組織されるれば、そこに如何なる効果があるか、それが何の役に立つか。單なる集産的經濟秩序はそれ自づからでは無意味である。集中的強制經濟秩序なるものが、却つて、不平等社會を造り出したならば、それでも、社會主義者はその目的は單に集中的強制經濟秩序にあると言つて、平然たるをうるであらうか。集中的強制秩序と言つても、必ずしも平等を民衆の間に高め、これによつて平等なる分配をなすことのできるものではない。集中的強制經濟秩序が却つて不平等なる社會を造り出すことありとも考へられる。然らば、社會主義にあつて大切なことは、生産の社會的統制でも、集産主義でも、集中的強制秩序でもないことが分

る。社會主義者はこれ等の制度が社會主義の目的に達する手段たり道具たると考へるが故に、かくの如き制度を採用するまである。社會主義の社會主義たるところは有形なものであるよりも、無形なものであり、それは精神に關し主義に關するものでなければならぬ。

社會主義の目的は集産主義によらずして、寧ろ社會的原理に依據する。すなはち、社會主義の目的は社會的原理の具現にあり、詳しく言へば、個人的原理を社會的原理に取り代へ、個人主義的社會を社會的原理による社會に轉換せんこと之れである。社會主義は上層と下層との對立を除かんとす。社會主義は支配するものと支配せられるものとの間隙距離を除かんとす。社會主義は富めるものと貧しきものとの距離を撤去せんとす。社會主義に於て無階級なる一定の社會を目標とするのは、平均化を實現せんがためである。社會主義に於ては、平等が集産よりも目的であるが故に、政治的對立なく經濟的對立のない四海兄弟の社會をつくり、世界大の人類相愛社會を造り出さんとするのである。カウツキイ氏はこの意を最もよく表示して、「社會主義は、實は我々の目的ではない。その目的たるや、各種の掠奪と抑壓とを取り除くにあり、それは階級、黨派、性、人種のうち、その一の支配と壓制とを取り除くにある。それが闘争に

よつて社會主義的生産方法を目的とするのは、それが今日與へられたる技術的乃至經濟的要件が我々の目的を達する唯一の手段だと思ふからである」

(Genau genommen ist nicht der Sozialismus unser Endziel sondern dieses be-
steht in der Aufhebung jeder Art der Ausbeutung und Unterdrückung, richtet
sie sich gegen eine Klasse, eine Partei, ein Geschlecht, eine Rasse Die
sozialistische Produktionsweise setzen wir uns in diesem Kampf deshalb als
Ziel, weil sie bei den heute gegebenen technischen und ökonomischen Beding-
ungen als das einzige Mittel erscheint, unser Ziel zu erreichen) と言つてゐる。

社會主義が階級的立場をとる限り、一如の人類社會をつくり出すことはできないから、社會主義者の夢想する平等社會と無階級の社會とは單なるユトピヤに過ぎないであらう。社會主義は階級的立場にあり、一の階級が他の階級に對立し、闘争によつて打破するところに平均が來り、平均化が行はれるのである。それは絶えざる集團的闘争によつて人類を禍ひする。集團は内にあつては愛好と平和とがあるが、外にあつては嫌忌であり、排斥であり、闘争であ

るが故に、社會主義者の無産階級解放の方法がその階級の立場から資本家階級を打破し絶滅する立場をとる限り、戦ひは久遠に繰り掛けられ繰り返へさるゝ性質のものである。

階級間の對立なきところには愛好があり、平和があるけれども、社會主義社會に於ても階級や集團は分立するが故に、その目指す平等社會なるもの現るゝことなく、一の階級が他の階級を相も變らず抑壓する別の社會組織が現はれるだけである。平和と愛好との世界は階級的立場から人類的立場に移轉しなければ斷じて現はれぬであらう。社會主義にして、眞にその目指す目的に達せんとすれば、先づ、階級的立場より人類的立場に轉じなければならぬ（拙著「階級闘争の研究」全篇を通讀せられたし）

二 形式的法的平等

社會主義は集産主義を手段として、平等なる目標に達せんとす。社會主義はすべての不平等を取り除き、平等社會を建設せんとす。これに努力が向けられるからには社會主義は有形な具象な經濟的秩序を目的としながら無形な抽象的な社會的原理を目標となし、社會のうちに平等

を確立せんとするものであるに外ならない。社會主義はすべて平等へと向ふ。

平等は遽かに社會主義によつて導入せられたのではない。但し、平等と言つても、個人主義による平等もあり、社會的主義（社會主義にあらず）による平等もある。個人主義體内に於ては個人の自由を容認するが、個人の自由競争によつて紛生する弊害を認め、これを法によつて取り除かんとする。かくて、そこに、形式的な法的な平等が生ずるであらう。すなはち、法の前には萬人平等だと見、法によつて萬人を平等に取扱ふであらう。

佛蘭西革命によつて提起されたる自由、平等、博愛は形式的法的なものであつた。ルソーや佛蘭西革命によつて人間思想が開展し、四海兄弟の思想や、平等思想や、博愛が導入せられたけれども、これは *egalite de droit* としての法的形式的平等であつて、社會主義若くは社會的原理に基く *egalite de fait* とは縁遠きものであつた。法的形式的平等は萬人法の前に平等であるだけであり、それは未だ社會的原理の具現されたといふ意味に於て平等なのではない。それ故、法的平等は個人主義社會に流用することができ、個人主義の衣をつけて横行闊歩することができる。

法的平等が社會主義にいふ平等に轉化せんには、個人的自由の見地より社會的自由の見地に轉じなければならぬ。個人的自由は個人主義のものであるが、社會的自由は社會主義のものである。社會主義は眞の自由は個人的なものでなく、社會的なものだと考へ、社會的自由を押し立てるのである。

三 經濟的平等

社會主義にいふ平等とはルーソウや佛蘭西革命にいふ法的平等でなく、實質的な平等であり、經濟的な平等である。經濟的な平等は無論社會的原理の具現である。經濟的平等は資本に於ての平等であり、收得に於ての平等であり、勞働に於ての平等であり、教養に於ての平等であり、文化に於ての平等である。かくの如き實質的な經濟的な平等が導入せられさへすれば、經濟的對立はなくなり、人類世界に愛好と平和とが輝くと考へるのである。こゝに、社會主義にいふ平等の特質がある。

尤も、さきに指摘せしが如く、社會主義の目的は經濟的な平等にあるのではない。經濟的平

等は單なる手段たるまで、あつて、これによつて、社會主義は貧困と罪惡と階級的對立のない社會が造られることを目的とするのである。社會主義の目的はあくまでも奴隸の撤廢であり、貧困の絶滅であり、罪惡の消滅であるが、この目的を達するために、經濟的平等を手段として用ゐるのである。だから、社會主義にあつては、經濟が非經濟を克服し、その眞の精神を現はすところにその眞髓が現はれると見るべきである。社會主義は人類の幸福を目標として居り、その特質は人生の幸福を増進する努力であるとする方が、經濟的平等であるとするよりも、一層社會主義の特質を表明することができると考へられる。

社會主義にいふ平等は如何なる根據をもつか。一七九三年佛蘭西革命當時言はれし *Tous*

les hommes sont egaux par la nature としての人間の自然に於ける平等なるものは事實

ありえない。人間は自然に於ては不平等に出來上つて居る。人間に於て平等と見られるものは、自然に於て千差萬別なる邊に於てせられず、人間の特質とその固有性の邊より見られたるものに限る。この見地からは如何なるものと雖も、人間として見られ、人間として待遇せられることに於ては平等だと見る。人間たることに於ては萬人平等であり、人間として待遇せられ

ることには万人平等であり、目的として取扱はるべきとすることに於ては万人平等であるとする。人間は本来不平等なるものにてありながら、人格に於て平等であり、生活及幸福を要求することに於て平等である。人間はすべて mehr Menschenglück といふことを目標として生きて居るが、社会主義は人間の要求をそのまま體現して、その機構の精神としてこれを採用してゐる。「ヨリ多くの人間の幸福」なる觀念は手段としての集産主義や、経済的平等、生産手段の社会化や、集中的経済組織の到達せんとする目的である。これを社会主義が主たる要素として、その機構をつくる限り、それは経済的要素よりも、非経済的要素の方が主要な役割りをなし、寧ろ「ヨリ多くの人間の幸福」といふやうなものを求むることが社会主義そのものとして解する方が正しいであらう。社会主義にあつては、生産手段の社会化だの、集中的強制経済だなどいふよりも、社会主義は貧困哲學 (Elendphilosophie) であらう、Das Streben nach der Sonnenseite des Lebens であり (シユモアラ教授の如く) 人間がすべての災害より解放されて幸福なる生活をなす途 (Notzueg) の如く) であると解する方が正鵠を穿つであらう。人間は本来不平等であるが、何人に於ても、生活上の幸福を欲求することに於ては同等であ

らう。社会主義は事實としての平等觀に於て破れても、要求としての平等觀を更らに提出することができる。人間としての平等、人格價值としての平等は「ヨリ多くの人間の幸福」を求むることの平等となる。万人の平等觀は「彼も人なり、我も人なり」の人權思想に淵源する。人權思想の洗禮をうけし現代人の生活には、自由と平等と博愛とがなくてはならぬものとなり、現代人は如何に卑小なるものと雖も、自由を追ひ、平等を求め、現代のこの特質が社会主義にも復現され、社会主義の平等觀となつて現はれたまである。

四 平等なる分配

平等に立脚する社会主義が財の分配を平等ならしめんとする思想に到達するは毫も怪むに足らぬ。社会主義に於ける基本的な分配方法は平等の原則による。社会主義は一と先づ性に關はらず、年齢に關はらず、高下尊卑に關はらず、分配を平等ならしむべしと主張する。總收得が社会成員の間に平等に分配されるのが社会主義の本領である。従つて、社会主義では、一度び貴族と勞働者との分前とを同じになし、大人と子供とを同じになし、聖者と罪人とを同じにな

し、飲酒家と禁酒家とを同じになし、すべてのものに對し同等に分配する方針がたてられた。かやうな平等による分配を極度に押し進むれば、性格、年齢、性、才能の如何に關はず、收得を同じものとして分配することゝなる。但し、性と才能と年齢とを無視する如き分配方法は決して平等なものにあらず、そのまゝ鵜呑みにすることができないので、各人はその需要に従つて分配する案に移つて行つた。この分配の原則によつては、マルクスは「Jeder nach seinen Fähigkeiten, jeden nach seinen Bedürfnissen」といふ法則をたて、サンシモンは「a chacun selon ses besoins」といふ規定をつくつた。かくの如き分配に於ける平等はその後補綴せられたけれども、全く放棄されたのでなく、この原則を固守して、分配の基準を労働となさず、需要となし、生産となさず、消費として維持した。

個人主義は労働によつて分配するが、社會主義は需要によつて分配するのだといふ。需要によつて分配するといふのは、労働によつて分配するよりも、平等を期し平等に矛盾しないと考へられるからである。但し、需要によつて分配する原則は到るところ破綻を現はすので、如何なる社會主義者も分配の原則を個人主義的分配方法に近づけ、労働によつて分配する原則に還

り行く外はなかつた。サン・シモンは「a chacun selon sa capacité, a chaque capacité selon ses oeuvres」で、労働によつて分配する主義をとつて居る。マルクスも亦労働によつて分配する主義をとるを餘儀なくせられ、同等な権利とは不平等なる労働に向つて不平等なる権利を設定することであるとしてゐる。マルクスは個人の才能によつて分配に差等あるを免れずとなし「Es ist daher Leistungsfähigkeit als natürlicher Privilegien an」と言つてゐる。アントン・メンガー氏の經濟的基本権利としての労働全收權（Das Recht auf den vollen Arbeitsertrag）は労働に依つて居る限り、その分配の根據が労働であるかぎり、經濟的個人主義の分配方法に依據するものと言はなければならぬ。社會主義者は如何なる遁辭を以てするも、平等の原則に基く分配方法を維持することができず、ついに「Arbeitsprinzip」を唯一の分配方法として設定するの餘儀なき窮地に陥つてゐる。労働原則によるときは「各人その労働に従つて」(Jeden nach seiner Arbeit)といふことになり、平等の原則をその儘表現することはできない。各人がその労働に従つて分配さるゝならば、それは個人主義的經濟と同一なる分配方法をとるもので、社會主義は分配方法に於て個人主義に降参したことになる。不勞所

得なるものを排除することが、人間社會を全く社會化するものだと言つても、これによつて、平等を目指して進む社會主義が平等を原則とする分配方法を維持することができず、ついに個人主義的經濟に降参するにいたつた。

これによつて、平等を基準として出發せし社會主義の分配方法は他の分配方法をそれに歸一せしむることができず、個人主義經濟による勞働による分配方法と社會主義による需要を基準とする分配方法が併立するにいたつた。ただ、平等を原則とする社會主義の分配方法は維持すべからず、それは經濟的個人主義の分配方法に接近して行き、Arbeitsprinzip を基準とする外なき窮境に陥つてゐる。

五 社會的 原理

デイチエル氏は經濟的秩序を二の對立する範類、即ち、「個人的原理」によるものと「社會的原理」によるものとに分ち、この外に區別せられる何もないと言つた。個人的原理にあつては個人が最上の目的であり、一切の集團は目的たる個人に奉仕する手段であるとする。これに對

し、社會的原理は衆個人の抽象的全體たる全體社會 (soziale Ganze) を最高の目的となし、個人を以て社會に奉仕する機關と見做す。

個人的原理と社會的原理による社會は一は個人的組織 (individualistische System) となり、二は有機的組織 (organische System) となつて現はれる。デイチエルの個人的原理と社會的原理との區分は理念的なもので現實的區分 (realistische Unterteilung) でないと言つて非難せられ、烈しき論難が加へられた。デ氏に對する論難はデイル氏、フォン・ウキーゼ氏、ブリス氏等などによつて加へられて居るが、それは理念的であつても現實的區分として使用することができないはづもないし、それを用ゐて現實的な經濟的關係を分析する方法として用ゐられないこともない。よつて、私は本書に於ては、デイチエル氏の個人的原理と社會的原理とを用ゐ、現實社會が如何に轉成變化するやを觀測する尺度たらしめんとする。デイチエル氏の個人的原理と社會的原理とに對する非難をクンブマン氏は左の三に分類してゐる。

デイチエル氏の理念的區分は現實的區分の見地から、かくの如く非難せられてゐる。

第一、デ氏の區分原理は心理的な基本動機から出發して居るので、多くの場合、これを認識

し捕捉することができない。倫理といふが如きものは捕捉することのできないものである。倫理といふが如き捕捉することができないものは如何ともすることができないが政治と言ひ、經濟と云ひ、社會意思といふが如きものは方案として掲げ出すこともでき、又組織原理 (Organisationsprinzip) として用ゐることができ、それによつて學派を開き黨派をつくることができる。かくの如き現實生活の區分なるものを社會的經濟的分類學者は採用しなければならぬ。

第二、デ氏の區分原理は人間精神の多岐で、錯綜することを見免すものである。個人的原理と社會的原理とは對立する方法ではなく、その間に無数の中間階段をいれるものである。たとへば、ブリース氏の絶對個人主義 (Individualabsolutismus) と絶對社會主義 (Sozialabsolutismus) との間には無数の混合と過渡的狀態とがある。かくて二に區分される代りに、二百萬にも區分されなければならぬ。倫理は變化するもので、たとへば同一の方案の下に、同一の人によつて、倫理的目的指定が屢々變化して居るを見出すのである。たゞ、界限的な場合に限り、かゝる方法が使用しえられるだけである。

第三、デ氏の區分原理は個人主義と社會主義とを對立したものととして區分するが、實際は個人主義も社會主義もそのやうに劃然區分されうるものではなく、現實の政治生活に於ても兩者はつねに混合し結合してゐる。たゞ、時に兩者が對立するあるのみ。個人主義的な自由競争主義に於ても、社會的原理に支配されるやうなことはある。社會主義も亦廣狹様々に用ゐられる。

これ等の人々はデ氏の區分を理念的であるとして排斥し、現實的區分をこれに置き換へるべく主張するのであるが、現實なる政治、經濟生活の探究にあたり、デ氏の區分を用ゐて大いに事理を明かなしうることについては拒むことはできないであらう。對立的觀念の間に無数の變化があるといふけれども、無数の變化があるによつて區分し分類しえないとすれば、科學なるものは畢竟成立しない。現實な對象は概念とか法則とかといふような便利重法なものに固定することのできぬものである。歴史科學的現象が變化と個性と創造とにつぎつぎばかりでなく、自然科學的現象と雖も、一として繰り返へすものなく、嚴密にこれを概念に結晶することはできない (拙著「社會事業學原理」一篇二章、九章參照) 二の對立の代りに二百萬の中間階段が

あると言つて非難する位なら、始より科學研究をやめ、有りのまゝ、實在の變化と創造とに任ず方がよい。科學は人爲的に經濟的にこれ等の個性と變化と創造との間に理路を求め、それを定型や概念や法則に結晶固定するだけである。デ氏の區分は心理的な基本動機より出發して居り、變化に富むるから指導原理として採用することはできぬと言ひ、倫理といふが如き理念的なものは捕捉することができぬといふ。併し、大體デ氏の區分原理に従つて一の狀態と他の狀態とを比較することは可能である。個人主義と社會主義とはつきり區分しえないと言ふけれども嚴密に區分することのできないのが現實であり實在である。概念や法則は人間が取扱ふ便宜のために假託するまで、實際は純粹個人主義といふようなものや純粹社會主義といふようなものがない方が寧ろ本當である。實際は常に混つて居り、彼此相推移する。ここでは假りに一の狀態と見るものから他の狀態と見るものを區分するまでである。學に於て造り上げるものは、何れも現實には存在しないところの人爲的なものばかりである。然るに、實際は社會主義と個人主義とはそのようにはつきり區分することのできるものではないから、個人的原理と社會的原理とを對立させることは失當であるといふ。かくの如き非難は學の性質を無視するも

のである。いくら現實的區分と雖も、それが便利重法に造り上げるように、現實として實際として劃然分つが如く存在するものではない。

かくの如き根據によつて、私はデイル氏、フォン・ヴキーゼ氏、ブリフス氏などの反對非難あるに拘はらず、次の社會を觀測する指導原理として、デイチエル氏の區分を採用する。

六 次の社會と社會的原理

次の社會は如何なる社會であるか。それは現に世界文明諸國に現行の社會ではあるが、たゞ次の社會と呼ばないだけである。社會なるものは一定不變なものでなく、常に推移しつゝあり、一瞬の休みなく進動しつゝあるものであるから、嚴密には如何なる社會と雖も次の社會をもたないものはない。殊に、社會が急速進化しつゝある一時期、しばらく抑壓が加へられて社會が自然の推移進動をなす能はざる時期に於て、次の社會が鮮明に意識されるであらう。かゝる時期に於ける推移は危険で、一步を誤れば革命にいたり、社會の根本的機構は一朝にして突然變化される虞れがある。蓋し、社會の變化なるものは如何にしても阻止することはできな

い。絶対に社會の進動を阻止することはできない。それは人間業を以てしては如何ともなす能はざる性質のものである。然るに、いつの時代にも斷乎としてこれを阻止せんとするが如く無効なる反動を企てるものがある。

アダムス・ブルックス氏 (Adams Brooks) はその著 *The Theory of Revolution* に於て革命とは支配階級の統治を顛覆する意味であるとして居る。氏は革命は回避せらるべきものであるが、支配階級の暗愚にして頑迷なるため、その支へうべからざる支柱を無理に支へんとして革命が來り、その滅亡が齎される次第を述べて居る。氏は支配階級の構成は絶えず變化しつゝあるが、それは社會の進動が變化する餘儀なき結果であり、社會の變動に應じて支配階級が少しづつその構成を異にするので安全瓣となり、人類に平和を齎らすのであると言つて居る。然るに、この變化が急速で、これに適應することをえない状態を氏は革命であると考へて、

when this movement is so rapid that men cannot adopt themselves to it, we call the phenomenon a revolution と言つて居る。かゝる革命は避け得られるであらうが、いつでも、支配階級は頑強に抵抗して、時世の推移を知らないために、革命が來るので

あるとして、氏は *ruling class is seldom conscious of its own decay, and most of the worst catastrophes of history have been caused by an obstinate resistance to change when resistance was no longer possible* と言つてゐる。リップマン氏 (Lippmann) も同じやうなことをその著 *A Preface to Politics* に述べてゐる。氏はいふ「それが我々に與へる教訓はかやうである。階級的利害關係は公的生活を促進する動力である。この階級的動力が危険になるのは、それを避け、それを抑壓し、ついで、それを曝發せしむるにいたるときである。その攻撃には制限がないので、ついに一の階級が他の階級に取つて代るやうなことになる。この事は恰も抑壓されるヒステリイが曝發して精神生活一般を變化すると同様である。社會生活に於ては、抑壓されたる階級を斷乎として壓制しなければ、何の恐るゝところはないのである。然るに、國民生活に於て、支配階級が暗愚にも可能でないやうな抵抗を つゞけ、他の階級に暴虐を行ふので困る。これが社會に於て暴力によつて突然變化が行はれる所以であり、こゝに社會的協力が不可能になり、突然變化を以て社會變化を齎らすの餘儀なきこととなるのである。」

社会が進動するすれば、社会の推移は又餘儀なく行はれる。變化しないような社会はないから、社会が變化するすれば、安全に平和のうちに變化せしめるようにするのが最も望ましい。社会の變化をその儘放任すれば、徐々に小なる變化を積み重ねて、安全なる針路をとつて、社会はその必然的なる變化をなし遂ぐるであらう。實は、次の社会なるものは極めて平凡なありふれた社会現象なのである。次の社会のないような社会は未だ曾てなかつたし、また今後と雖もさうである。然らば、人類の生活に於ては、次の社会は尋常茶飯な出来事で、敢て珍とし異とするに足らぬ。次の社会のないような社会は想像して見ることもできない。アダムス氏は *Problem of Dynamics, on the correct solution of which the fortunes of a declining class depend* と言つて居り、衰頹せんとする階級の幸福の解決は *problem of dynamics* で「動的」なるところにあるとさとして居る。これがつねに支配階級には分らぬので、ついに、その悲惨な死の運命がやつてくるのである。動的な問題として社会變化の問題を考へるならば、社会はつねに動き移ると考へなくてははらぬであらう。然るに動き移る約束の社会を無理に無法に固定しようとするのが、いつも當時の暗愚な特權階級支配階級なのであ

る。社会の動き移るのは自然の理法で如何ともなす能はざること、恰も石が地球の中心を指して落下することの如何ともなす能はざると同一である。然るに、いつも支配階級は石は地上に落ちてはならぬといふような愚な變語をくり返す。社会は自然の理法によつて忌でも應でも移る、動く。これに對して、人力を以て如何ともなすことができるものではない。この如何ともなす能はざる自然反抗を企圖するものが暗愚な支配階級なのである。自然に反抗すれば、天罰觀面、鞭たれるだけである。これ、支配階級が社会の進動を隻手妨ぎ止めんとして、いつもその滅亡を早める所以である。支配階級の最も賢明なる方策は徐々少しつゝ社会變化に讓歩することである。これが最も賢明なる延命策となる。我國の資本家や金融家も愚物の仲間入りになす資格が十分と見え、先頃來、内務省の立案せし労働組合法に反對した。斷乎として反對した。聲を大にして反對した。無産者の悪感情を挑發し、その階級意識を尖鋭ならしむるような拙劣な反對をなした。内務省の社会局案と稱するものは少々進歩した稀に見る良案であつたが、階級的立場をとる資本家からも労働者からも一樣に反對をうけた。資本家は労働者を庇護し、その階級闘争を助成するが如き法案は不都合であり不埒であると言つて反對するし、労働

者は未だ喰ひ足りないと言つて反對する。これ、何づれも、階級的立場にあつて、國民一般の福利を標的とせざるものである。内務省の稀れなる良案にも拘はらず、資本家も、労働者も、階級的立場にあつて國民の福利を念とすることができなかつた。殊に、工業俱樂部あたりの實業家は最も頑迷なる宣言を發し、斷乎として、時世の進動に反抗せんとする氣勢を示した。將來、恐く、我國の實業家、資本家、金融業家も亦時代の變轉、社會の推移に應じて、巧みに保身術を振りまわすことができないであらう。

革命といふが如き著大なる變化によつて、社會の推移をなし遂ぐることは悲むべきであり、著者は革命に反對して漸進的變化 (reform) によつて、社會を改良せんとするの意を明かにし、これを拙著「階級闘争の研究」等七章「革命と進化」とに述べて居る。リツプマン氏も明かに改良論者であつて、革命論者ではない。海野は社會の改良に關する研究に没頭するが、海野はかたく社會の漸次的變化によつて推移することを最も安全也と考へてゐる。これより外、安全なる社會推移の方法なるものはない。いづれにしても、社會は變化し推移しなければならぬとすれば、最も安全なる方法、途によつて押し移るべきであらう。これが最も眞なる改良論

者の態度ではないか。

社會が推移し變化するとすれば、次の社會はいつでも必ず次に控へて居るわけで、次の社會なるものゝない社會、時代といふようなものはない。

ブリフス氏は一の社會を仔細に理解するには、その根源に溯つて考察を加へなければならず、従つて、根源として先行する社會にいたつて、その流れを酌まなければならぬと言つてゐる。先行する社會は *bekämpfen* せられる社會で、先行する社會をいけなひとして争ひつゞける。次の社會進化の入來を欲するのである。現代文明國に現はれし次の社會 (現社會ではあるが) は、先行する社會に弊惡が多いとして、それに *bekämpfen* し、よつて以て、現はれつゝあり、又、現はれんとする社會である。よつて、次の社會は先行社會の生存原理とは別なるそれに對立する原理によつて支配せられる社會と考へられるであらう。

前の時代には個人的原理が支配したから、それに對立する原理を基準とする社會が、次の社會であると考へられるが、これは少しも無理な推論であるとは思はれない。個人主義的經濟の弊害にこりて、今度は個人的基準によるよりも、社會的基準によらなければならぬとするに

たつたのである。これまで「個人」を原則として生活したことが誤りであつたとして、今後、「社会」を原則として生活しなければならぬと現代人は考へ始めたのである。この事は現代の資本的國家でも、社会主義者でも何の變りはなく、「社会」に依つて立つ見點が少々異ふだけである。個人ではなく、社会であるとする見地に於ては、資本主義的國家、國家社会主義、集産主義は何づれもその間に何の差別を認むることはできない。

次の社会は舊直に社会主義の社会であると斷定するには無理があるとしても、次の社会、現代社会を以て社会的原理による社会として設定することに何の無理も矛盾もあらうとは考へられぬ。前時代に於ては個人が最上の目的であり、価値であつて、社会は個人の生存を成し遂げる單なる手段だと見た。茲に現代特有な弊害が滋生して、救ふべからざるにいたつたとするるのであるから、これに代へて、社会を主體となし、それが最高の目的であり、最高の価値であるとなし、個人は單にそれに奉仕する道具であるとする思想を生むにいたつたのである。こゝに價值顛倒が行はれた。現代人の目的は *die abstrakte Einheit aller Individuen* としての抽象的形體である。この抽象的形體を禮拜するのが現代人特有のイデオロギイである。こゝに、

現代人の最高な價值観がある。

然らば、現代人の現に認め、また、次の社会と認めるものは社会主義であるといふような狭義なものではなく、それよりモット廣義で廣汎なる分野にわたる「社会的原理實現の社会」と見るべきであらう。よつて、著者は社会的原理を實現する諸々の形體の社会を次の社会であると見る。

参 考 文 籍

1. Dietzel, Individualismus, im Handwörterbuch der Staatswissenschaften.
2. Spengler, Preusentum und Sozialismus, 1920.
3. Pribram, Die Entstehung der individualistischen Sozialphilosophie, 1920.
4. Mises, Die Gemeinwirtschaft, 1922.
5. Plenge, Zur Vertiefung des Sozialismus, 1919.

6. Sombart, Grundlagen und Kritik des Sozialismus, 1919.
7. Kautsky, Materialistische Geschichtsauffassung, 1928.
8. Adams, The Theory of Revolution, 1913.
9. Lipmann, A Preface to Politics, 1914.

第三章 個人と社會

一 自由と平等

社會主義の如く社會を本位とする制度に於ては自由は失はれざるを得ない。社會主義社會は平等の實現を目的とするが、社會主義社會では自由は擧げて喪失する。社會主義は平等化を要旨となし、平等を目的とす。

社會を本位となし、社會的規範によつて成員の一舉一動を規律せんとする社會に自由の發達する餘地のないのは明かである。かゝる社會では自由は喪失せられる。ここでは極度に社會的規範を押しつけるから自由は逃避する。かくの如き社會は如何にしても不自由社會とならざるを得ない。社會主義は生存條件の平等の基礎の上に自由を捨て、平均的經濟生活の新秩序を實現しようと努むるものである。個人の自由は人間の最も大切な要求であり、個人の自由なくして理想的な人間生活ができないことを、總ての社會本位論者は忘れてゐる。ブレンタノ氏は

いふ、「個人の自由なる見地からは、それが實現に欠くべからざる基礎、獨立、十分にして確實なる所得、人倫の發達に必要なべき休養が與へられなければならぬ。然るに、國民經濟を國家經濟に變更し、國權を以て計畫的に生産を規律し、その上、國權によつて強制的に個人に財を分配するといふことであつたら、個人はその所得について當時の國權の命令に服従しなければならなくなる。かくの如き仕組を以てしては、たゞに勞働者が不自由なるのみならず、一般に國民は一舉一動國權の干渉をうけ、各人の材能を動かす場合には、その如何なる方面たるを論せず、國權の干渉をうけなければならぬ。かくの如き社會生活の新秩序は個人のすべての道徳的、宗教的、精神的自由を抑壓せずにはをかぬであらう。かくて現代文化の齎らせし最も貴重なる部分が喪失せられるであらう。これによつて、凡ゆる道徳的精神進歩が危くされることは明かである」社會主義經濟秩序の齎らす最大の害悪は平等化平均化を通じて現はるゝ人格とその自由なる發展との喪失であらう。この事は社會主義に限るにあらず、一切の社會を本位とする秩序の免れえざる社會的害悪である。社會を本尊となし偶像として安置するからには、規範は漸次多くなり、ついに規範の亂發となつてその中に生くる個人を窒息させなければをか

ぬ。規範なくして、共通な社會生活は期待することはできぬ。社會を本位となし、一定の社會生活を遂行せんとすれば、その社會の維持せんとする社會的構成をもちたて、それに反するような個人の行動を徹頭徹尾排除しなければならぬ。然らざれば、一定の共通な社會生活をなすことができぬ。こゝに、個人に對する強壓が加へられるが、社會の加へる強壓に比例して、個人のもつ自由はそれだけ減縮されて行く。人間に對し自由は恰も生命そのものと同じ價値をもつから、自由なき生命は畢竟生命なきと同一義とならう。不自由なる生命なればそれを享有するとするも、人間は決して有難く感せぬであらう。生存條件の平等の基準の下に自由を捨て去り削り去つた社會本位の經濟秩序は社會とその生存とを目的とするもので、個人には何の關係もないものである。よつて導き入れられる平等をも寧ろ有難迷惑と感ずるでもあらう。

凡て、規範的生活は不自由生活である。但し、人間生活には一定の限度の規範はなければならぬ。これ、人間が仲間生活をなすによつて蒙りし必然的な害悪であつて、仲間生活に對する犠牲である。個人として生存することのできない無力な劣弱な人間は餘儀なく若干の自由を犠牲にして、社會の規範に制限せられ干渉せらるゝにいたつたのである。それ故、ある限度の社

會的規範は人間の生存上必要として受け入れなければならぬが、それには一定の限度がある。一定の限度の規範をこゆれば、いくら仲間生活と雖も堪え得られなくなり、犠牲のあまり過大なるを感じ始め、こゝに仲間生活は効能減失に瀕する。かくの如き仲間生活の個人に對して有難くないのは明かで、個人はいつでも社會的規範と個人の自由とのつり合ひの取られた過不及なき状態を希望するであらう。人間の根本的要求—人間生活のこの鐵則は毫も違背し乃至破却することはできぬ。私は社會的規範と個人の自由との釣合のとれた過不及なき生存状態を人間生活の基本的欲求として表示する。

人間は自由を失つてはならぬ。如何なる場合にも、個人とその自由とを譲渡することはできぬ。人間に對し自由の喪失は死を意味する。縦へ、人間が生存してゐても、不自由なる生活は價值なきものと感ずるから、斯の如き無價値な生命を追求する値打がないと思ふであらう。然るに、人間の自由の欲求は一限度に於て減縮されなければならぬ。人間が仲間と提携して生存する條件を充たす必要上、餘儀なく或程度の自由を犠牲にしなければならぬ。但し必要以上仲間生活に於て自由を犠牲にしてはならぬ。茲に、社會的規範と個人の自由との釣合ひの取れ

た過不及なき生存状態なるものが現はれる。之正しく解される人間生活の基本的欲求である。

人間生活の基本的欲求は如何にしても維持されなくてはならぬ。この基本的欲求を許容せざるときは、各種の社會的擾亂が行はれ、時に革命が勃發して平和を不可能ならしめるであらう。

一時、人間はかゝる基本的欲求について明からなる意識をもたず 不知不識、その當時の暴壓に制せられて基本的欲求から遠かるとするも、これが基本的欲求なる限り、いつかは再び意識し始むべく、竟に基本的欲求を充足する社會を以て最も理想的なものであると考へるにいたるであらう。現時に於ては、社會主義を始めとして社會を過分に崇拜し尊信し、これを本尊として祭り上げるものにあつては、人間の基本的欲求を溷濁ならしめ、それに關する意識を不明ならしめる。一時、社會の奴隸となつて、個人がそれを甘受するとせんも、人間の基本的欲求は如何ともすべからず、竟に、眞の姿を現はし、當然、人間が仲間生活によつて個人の自由を保證する程よき生存形式に戻り來るであらう。

社會を本尊となし、その規範を繁多にし、これによつて計畫的に規律するにいたれば個人の自由は悉く喪失せられる。人間が仲間生活をなすのは、自由を一部減縮して、ヨリよき生活を

なさんが爲めであるが、見方によつては、人間は仲間生活によつて一層自由を増大せんとするのである。人間の仲間生活の目的は、これによつて、個人の自由を一層増大せんがためであると見ることが出来る。仲間生活の目的にして、かくの如きものであるなれば、人間は社會に入つて聊かたりとも自由を減縮させてはならないであらう。全體、社會などいふうるさいからくり人間が入り込んで、煩鎖な規律に制縛されなくてはならぬやうになつたのは、有難迷惑でもあるから、可能なれば、人間は孤獨な生活を選んだであらう。たゞ、それが能きないので、餘儀なく仲間生活を始めたのである。然らば仲間生活によつて人間がその自由を減縮するのは一定限度と範圍に限られて居り、それよりこえてはならぬことが分るであらう。

然るに、現時の要求する社會生活と社會規範とは度をこえたものであらう。殊に、社會主義的社會の如きは食ふにも飲むにも社會の規律によつて命令せられ、一舉一動、社會の束縛を受けなければならぬ。社會主義的社會では、各人の財の分配に關しても、その所得に關しても、勞働賃金に關しても、社會の命令を受け、それによつて定められなければならぬ。各人の天資をのべ、才能をはたらかせるにも社會に伺ひ奉つて、それを働かす許可を受けなければなら

ぬ。然らざれば、才能、天資を働かすことが絶対にできないであらう。但し、かゝる仕組に於て、才能、天資が働かえないのは自明である。天資と才能とは個人の好むがまゝ、望むがまゝに働かせて、創造させなければならぬ。命令されたる才能、命令された天資といふことは、それ自身矛盾したる觀念である。命令されるなれば才能も天資も徒らに社會的規範につめ込まれ、天資も才能も伸ばすことができなくなる。思ふことも、信ずることも、感ずることも、凡て社會から命令せられ、社會の造る規範にはめこまれる。斯て何處に道德的發達あらん、宗教的發達あらん、科學的發達あらん、藝術的發達あらん。社會本位社會では餘りに規範をやかましく言ひ過ぎるので道德的、宗教的、科學的、藝術的發達は抑壓されてしまふ。これ、道德的發達に必要なべき道德的自由がなく、宗教的發達に必要なべき宗教的自由がなく、科學的發達に必要なべき科學的自由がなく、藝術的發達に必要なべき自由がないからである。自由なき社會に於て、如何にして、道德、宗教、科學、藝術の發達を期待することができようか。

かくて、如何に平等のためとは言へ、自由の犠牲にすべからざる所以を知る。社會主義はあまりに平等に傾き過ぎ、成員の自由を度外視するが故に、その社會に於ては期待に反し、人間の

代りに奴隷を造り上げることとなる。社會主義社會では貧困と罪惡と奴隷とを廢止するプランをたてゝゐるが、豫期に反し、社會主義社會の産物は奴隷そのものである。自由なきところに人間あることなく、たゞ奴隷あるのみである。すべて、社會を本位とし、社會的規範をやかましく言ひたてる社會に於ては、不自由人としての奴隷が現はれざるをえぬ。

あまり、過大なる中央集權的組織では、いつでも獨立する人間の代りに奴隷を産出するであらう。中央に過大なる權力が集積されるれば、自づから各種の規範がうるさく濫發され、一舉一動、規範によつて規律することとなる。而して、規範に違背する場合には過大なる權力によつて個人を脅威するに十分であり、その極、がゝる組織體內には自由人なく、獨立する人間なるものあるなく、たゞ奴隷が唯一のものとなつて殘存するであらう。思想も、信仰も、藝術も、道徳も集團の許容するもののみ存在し、科學的發明發見、宗教的啓發、藝術的創造は枯死し窒息して、萎微沈滞の氣風國內に横溢するであらう。個人と社會との組み合わせに於て、素より、あまりに社會を強調することはできぬ。かゝる仕組では、個人は排除されて了ふのである。個人が生活し生存する形式として採用せし社會は個人を死滅せしむる役目をもつのではない。個人生

活の性質上、社會の役割は一定限度に止めなければならぬ。個人が生存する道具として手段として盛り立てた社會ではある。然らば、社會は個人を一層ヨリよく生活させ生存させなくてはならぬ。個人は社會に對しては主人公であり、社會はその従僕であるが、個人の生活には従僕としての社會、手段としての社會を欠くことはできぬ。こゝに於て、個人と社會とは目的と手段といふことで組み合はされ、社會は個人の生存をなし遂ぐるに適當なる手段として個人に統合されなければならぬ。個人と社會とは相背馳し相反噬すべき性質のものにはあらずして、兩者は人間の基本的欲求を體現するものとして過不及なく統合されなければならぬ。

二 個人と社會との持分

人間の生活は個人が基本であり。その自由が絶對的必要條件である。社會生活は單に手段たるに過ぎないから、個人の中心位置を動搖し、その自由を減縮してはならぬ。個人と社會との關係と持分とはかくの如き原則によつて定められるであらう。

ブレンタノ氏は個人とその獨立とを中心とする論旨を進め、自助方法として労働組合による

労働問題解決を説いて居る。氏はいふ、「獨逸の政治的自由黨殊に進歩黨は主として任意主義の下に、特殊の施設、制度、組織をつくり出さうとつとめる。殊に、この政黨はかやうな制度や組織の成立を促進させるため、國家が經濟手段を以て干渉することは徹頭徹尾有害無益であると言つて排斥する。かやうな制度や組織を創設し、且つ、これを盛り立て、行くため必要なべき資金を調達するには、労働は寧ろ自由の途に依るべきであり、且つ、上層階級が親切にやさしくその自由意志によつて援助しはければならぬ。但し、自由なる組織や制度の創設を促すため、國家の參加共働が全くいけないと言ふ意味ではない。それに反し、國家の立法は自由なる組織制度の設立を可能とする途を備へ、かつ、これに必要なべき法的基礎を供給する役目をつくす。その上、自助の土臺の上にできた制度や組織が將來存続可能たることを證明された暁には、國家はこれに對し法的承認を與へなければならぬ。更らに未成年者及女子労働者の保護、健康、身體、生命の保護作業によつて起つた死亡傷害に對する雇主の損害賠償、労働者階級の一般並に技術的教養の向上について國家は積極的施設を行はなければならぬ」ブ氏はこれによつて労働階級の幸福と解放とは自由によつて行はるべく、徒らに、國家に頼つてはな

らぬといふ意見を吐露する。

社會や國家があまりに過分なる持分と權力をもつ場合には、社會や國家繁榮の途たるべき個人の發達が萎微する虞れがある。社會や國家があまりに規範と法とを以て個人を制限しすぎれば個人、國民の自由なる活動と自由な創造を妨げ、ために、社會の發達國家の發展をも阻害するにいたる。社會や國家の發展、繁榮を遺憾ならしめんとせば、個人に最大限の自由を與へ、その活動と創造とを自由ならしめなければならぬ。かくの如き原則に基き、過大なる中央集權組織は國家の發展を妨げるものとして、地方分權主義を加味しなければならぬ理由を知るであらう。地方分權、自治體組織が發達するにいたれば、自由なる個人のはたらきと創造とが一層容易になる。但しなるべく、個人として獨立自助たるべき原則の下に、自治手段を以て個人、國民の發達を企圖すべきであらう。信仰の自由は既に國民に分讓されて居るが、なるべく、個人をして自由に信ずるをうるが如く寛大ならなければならぬ。自由なる良心を以て信仰しないようなものは如何に多數の信徒を擁するとも畢竟宗團としては冷骸に等しいであらう。よつて、なるべく、個人の信仰を自由ならしめ、あまり過大なる社會的規範を個人に押しつけぬ

よくなすべきである。學者、思想家の研究と思想の發表とに對しては最大限の自由を容認するようにする。労働者に對しては、なるべく自助手段によつてその境遇を改良し、労働條件を改善することゝなし、無闇に國家にたより、又、その他の助力にまたぬようにする。労働者の地位の改善については、國家がこれを雙肩に荷ふ方針を採るよりも、なるべく、労働者の自力にまつことゝし、従つて、労働組合を通じ自助によつて労働者の改善を行はしむるようになければならぬ。ブレンタノ氏の労働組合を以て労働問題解決の鍵關となす趣旨はもう一度復興させ、一般的注意を喚起しなくてはならぬ。但し、自助的解決方法の導入は國權を排する意味には少しもならぬ。ブ氏も言ふが如く、國家の共働は無益であり駄目であるといふのではなく、國家は法をもつて國民の自由なる組織制度の設立を容易にし順潮ならしめなくてはならず、更らに、法によつて、これを承認しなければならぬ。國家は國民の健康、身體、生命、作業に關し多々益々關與しなければならず、國家の社會政策的行動は年々益々煩多とならなければならぬ。併し、國家の活動が繁多となるといふことゝ、個人、國民の自由なる行動に干渉するといふことゝは決して同一義ではない。勿論、國家はやかましく規範を押し立てて、これに箝め

込むように、國民の一舉一動を制壓するに多忙なることができる。かゝる國家の行動はその繁多たるにいたり、益々干渉の性質を帯び來り、國民の自由なる活動を殺ぎ、従つて、國民の活動と創造とを萎微せしめ、國運の發展を阻害する結果となる。かような國家の活動はやうやく多きを加へて居るが、これ國家生活の外道に陥れるもので、決して正しき國家的職分をつくすものとは言はれない。國家の活動は國民をして獨立自助の民たらしめることに向けられ、それを助長するが如くなさなければならぬ。労働意志を喪失する失業者、徒食する外なき乞食の如き寄生者を造り出すことは國家の本務では無論ない。あまり他力に頼り過ぎ、他力に依らざれば手も足も伸ばせぬような無能力な國民を造り出すことは國家の最も忌むところであり、従つて、國家はその本然の職務に反してかくの如き政策を採るべきではなからう。然らば、事々に干渉し、事々に誘導し、事々に方案を授けるよりも、獨立自助、自づから立ち自づから進むことの能きぬやうな國民を造ることか肝要であらう。こゝに自助的國家政策の面影が現はれる。これまで、國家はあまり個人の生活と活動とに干渉し過ぎたきらいがある。國家の活動はその當然の範圍に限り、なるべく個人、國民の自由なる活動と創造とをなすことのできるような仕

組みとなさなければならぬ。個人の自由なる活動と創造とは決して國家とその國權を無用ならしむのではなく、却つてその義務と、その範圍とを増大するものである。この場合、たゞ、國權を用ゐる主義が異ふだけである。煩鎖なる社會的規範を事々に押しつけ、國民の生活を萎微させることに國權を用ゐる代りに、國民をして自助の民たらしむるが如く國權を用ゐることとなすべきである。個人の自由なる生活と活動とを基準とすれば、個人の自助を最大限に認めるやうな方針をたてなければならぬ。人間の生活は個人として個人が自力で生活するのがその本旨であるが、これができないため、餘儀なく仲間生活をなすにいたつたのであるから、仲間生活が餘りに過分なる勢力を揮ひ、逆に個人の生活と活動とを不如意となし、不自由となすが如き本末顛倒の方針を採つてはならぬ。

三 個人的自由と社會的規範

ついに、個人的自由と社會的規範とは統合しなければならぬとする見解に達した。兩者の統合は二つの主義によつてなされる。(一)個人的自由を基本とする社會構成によつて、(二)社

會的規範を基準とする社會構成によつて。

講壇社會主義者は社會を基準とする社會構成を主張する一派で、國家とその權力によつて階級的對立と、それによつて生ずる諸々の社會的害惡を除かんとし、自由主義的社會政策家は個人的自由を基準となし、社會を以て *Gesellschaft als eines mit selbständigem Leben und selbständigen Zwecken begabten Organismus* と見し、個人の自由を通じて問題の解決を圖らんとした。自由主義社會政策派にとつては、國權は個人的努力を促進する手段として用ゐられる。但し、自由主義政策家にあつては、個人主義的自由主義の如く絶対に個人の遊離獨立を主張するにあらず、個人の絶対に獨立し分立することは個人を要素化するものであるから、個人の上に社會を加へ、その機能を入れなければならぬとするのである。かくて、同一の目的をもち關心をもつ労働組合をもつて問題の解決を圖らんとする。労働組合は同一の目的と關心とをもつ労働者の集合であり、獨立する個人に社會的意義をいれたものである。自由主義社會に於ける自由競争の弊害は労働組合によつて遮斷されると見る。

人間は仲間をつくつて生きて行く方法を發見した。ここに、人間生存の一新紀元が開かれた

けれども、それによつて、階級と階級とが闘争するといふ社會的害悪が現はるゝにいたり、人類を全體として亡滅の淵に陥る虞れがある（拙著「階級闘争の研究」参照）人間は仲間によつての生存の外に生きる術をもたない。そこで、労働者も亦同一の目的と關心とによつて仲間生活をなし、他の集團に對し權益を維持し、その生存を助長せんとするのである。かくの如き集團的生存形式は必然的に闘争に導くから、竟に、人類は超集團的形式によつて生存しなければならなくなるであらうが、これ今後、人類世界に發達すべき新生存形式たるであらう。尤も、國際聯盟の如き國際的の聯合や平和運動はこれまで行はれたが、これまでのものは、いづれも集團的立場にあり、自國のみの權益を維持増進せんとするもので、かくの如き生存形式からは、現に見るが如く紛擾と闘争とが滋生するを免れぬ。

集團の自助的手段を通じて個人の利益を維持増進し、生活條件を改善する方法は無論有効である。個人は個人として生存するには餘りに無力であり無能であるから、何づれにしても、個人は集團に寄托して生存しなければならない。集團によつての自助的生存は、たゞに物質的生存條件を改善するに足るのみならず、それによつて、道德的向上を圖ることが出来る。労働

者にして徒らに他力にまたず、自助手段を通じて生活をなし、その條件を改善しうるならば、獨立自助の念を旺んにし、よつて以て、道德的向上をいたすであらう。

社會的規範を主たる生存形式とするのは社會を本位とするもので、Kollektivseinheitの見地によるものである。個人的自由を生存形式とするものは、個人的自由主義の如く、個人を孤立し要素化するが、これを組合、集團にまとめ、集團的自助主義を採るものは、個人的自由の立場にありながら、社會的意義をいれることができる。個人的自由の立場に社會的意義をいれるには、個人の自由なる結合たる組合、集團の如きものと、國家の如き他力によるものとの二がある。個人の生存が人間の社會に於ける基本的事實たる限り、個人的自由の立場は結局維持しなければならぬが、人間の生存形式は仲間生活であるから、竟に社會的意義をいれ、社會的規範を取り入れなければならぬ。そこで、個人の自由と社會的規範とを統合するには自助的集團によるか、國家によるかといふ方案に達するであらう。この場合、兩者に併せ依るべきであらう。但し、人間の人間たるところは、その獨立自助たる邊にある限り、國家の途を通ず場合にも、なるべく、國民の獨立自助の精神を挫折しないやにしなければならぬ。何づれにしても、

自助的集團による方法を以て主たる生存形式として設定することが最も穩當であらう。その上、國家はその政策として自助集團を監督し助長しなければならぬ。然らば、個人の自由を基準とする生存形式は個人十集團十國家によつて成し遂げられるであらう。恐く、人間の生存にはこの三を欠くことはできざるべく、三者の合成するところに人間の自由なる生活も、規律せられたる國民生活も現はれるであらう。

個人の自由なる生活は個人の放縱なる生活を意味するのではなく、個人はいつでも集團生活、國家生活を同時になさなければならぬのであつて、個人と社會とを併せ收むる見地に於て人間は生活しつゞけてゐる。絶對なる個人生活といふが如きものは人間社會には有りうべからざることである。人間は如何にかして、社會によつて、生活しなければならず、それが爲め、必ず一定の社會とその規範との統率に服しなければならぬ。社會や集團は個人とその自由とを減縮し制限するであらう。併し、これによつて、始めて無力な無能な人間の生存を可能ならしむるのであるから、かゝる規範生活は人間の甘受しなければならぬものである。

かゝる性質の社會生活に於ても、本來の意味は忘れ果てざるを要する。個人の生存は基本的

な事實である。人間生活は自由があつて始めて生甲斐のあるものとなる。個人とその自由とは斷じて脅かしてはならぬ。個人とその意志とが社會生活の要件となるのであるが、素より要素化したる個人主義は正しからざるものである。そこで、組織化されたる自助が人間生活に最も大なる意義を帯ぶるにいたる。仲間と提携し、それと共同に追求すところの *organisierte Selbsthilfe* が最も個人的自由の原則に合つた人間生活である。自由と言つても、それが組織化されたものであるから、いくら社會の強制を受け、社會的規範によつて制限せられざるを得ぬ。人間生活に於ては、社會的意義をいれぬが如き生活は絶對にあり得ないから、かくの如く組織化されたる生活が人間の合理生活であると思はなくてはならぬ。

自助的團結を通じて生活すれば、それによつて勞働條件を改善し、物質的生活條件を改善しうるのみならず、同時に、それによつて、自由と人格の自己決定をなすことができる。個人が固有な意識したる結合的動作によつて、自由と自己決定とをなすことは、人間らしき人間を造る上に最も望ましい方法と言はなければならぬ。かくの如き考へ方は、個人自由を基準として、社會的規範を加へたもので、人間の最上なる生存形式と考へられる。

四 個人・自助團體・國家

個人は自由であり、國家は強制であり、自助團體は組織である。一の端に自由なる個人があり、他の端に強制なる國家があり、その中間に組織である自助團體が来る。

アダムス・スミスは人間は各幸福を圖る知見と力とをもち、また、それによつて一般的幸福をもつくり出すことができると言つた。ブレンタノ氏は「自由放任は最早死んだし、自由競争は強者の經濟原理たるまで、弱者はこれによつて悲惨なる境遇に陥つた。中、下の才能所有者は自由競争によつて劣敗し、境遇がいよゝゝ悪くなつたので、英國は法律によつて自由競争を制限し、婦女子と兒童とを保護するにいたつた。下層階級の境遇改善に對する國家の役割は拒むことができぬ。國家は國權を以て國民の一般的欲求を充足した。ただ、法によつての保護よりも、労働者が團結をつくり、共同自助によつて保護をなす方が望ましい。組織なき場合には、弱者は劣敗して悲惨なる境遇に落ちて行く」と言つて、労働者によつての自助團體を主張して居るが、この中には、素より、國家の干渉と強制とによる改善をも認めてゐる。労働者はそ

の團結を通じて道徳的知識的政治的向上をなしとげた。組合の結成せられたるところでは、労働爭議も減少し、精神的物質的向上を見、全階級を一般に引上げる傾きがあつた。

自助的團體によつて物質的精神的道徳的政治的向上を促すのであるが、素より、國權によつて一層その向上を企圖しなければならぬ。個人は自由ならなければならぬ。併し、個人的自由は個人の力によつて得られざるもの、あまり個人の力を頼みすぎると今度は放任となり、自由競争となつて、中下の才能所有者は壓倒せられて悲惨なる境遇に沈淪して行く。自由なる人間としての個人は自助團體によつてか、抽象的社會の助力 *Gesellschaftshilfe* によつてか、國家の助力 *Staatshilfe* によるを要する。まづ、自由なる個人は自助團體の助けを受けなければならぬが、素より、自助は萬能ではなく、そのみによつて自由なる個人を保護することができない。よつて、更らに國權に依頼し、その助力をうけ保護をうけなければならぬ。一端に在る自由なる個人は中間の組織としての自助團體を通じて他端の強制として國家によつてその生存を保全する。自助團體によつて保護せられ福利を増進することは望ましいけれども、その足らざるところ、いたらざところは國權により法に依らなければならぬ。法は既に助けを要するにいた

つたものを助ける外はないが、自助的方法による保護は未だ助けを要せざるが如き保護にも及ぶことができ、積極的に助け保護することができる。その上、國家によつての保護は外的で形式的たねばならぬが、自助團體の保護は内的で内容にわたることが出来る。但し、國家はその固有の強制力を用ゐて、個人の恣意と利己とを制限し、一般民衆の福利を増進することができる。國家は文化の守護者として、文化的機關たるべきものであり、外的ではあるが、國民の福利を増進することができる。國家はその意志と力とをもつて、法的に個人に干渉して、國民の經濟生活を高め、國民の福利を増進することができる。

自助的團體のみを以てしては、積極的に個人の福祉を企圖することができない場合がある、通常、上層階級や富裕者や優者はその利益のみをはかり、舉げて下層階級や弱者貧者を顧みぬから、比較的劣勢なる當時の自助團體の實力を以てしては積極的に労働者の境遇を改善することができぬ。よつて、國家の強大なる權力に依頼して、下層階級と弱者の福利を圖る外はない。上層階級や強者がいつでも倫理的義務として下層階級や弱者の生活を改善する考へはないであらうから、これに對しては、國家は權力により法によつてこれを強制して所期の目的を達

しなればならなくなる。社會の改良は一朝一夕のことではなく、漸進的に徐々その目的を達しなればならぬが、これに對し、素より、なるべく自助團體を動かして、極力自力を以て改善を圖らなければならぬ。但し、比較的無力な自治團體のなし得るところには限度がある。そこで、強大で萬能の觀ある國家に依頼して、自助團體の及ばざるところを充足しなければならぬ。自由なる個人の活動と自助團體の活動と國家の活動とは一連をなし、互に補充し合はなければならぬ。自分を助ける氣のないような個人、國民に對しては國家の大と強さを以てするも何ともすることができない。よつて、先づ、個人、國民の自助精神を作興しなければならぬ。自分の團體の力によつて、自分を助ける氣のないような無力な腑甲斐のない國民は不幸之れより甚だしきはないから、個人の次ぎには自助團體の活動を促さなければならぬ。その上で、國家が出動して面倒を見てやる順序である。よつて、自由なる個人と組織たる集團と強制たる國家とは共に必要であり、相依り、相まつて、國民の福利を圖り、道德的精神的物質的向上を促さなければならぬ。個人と自助團體と國家とは相互關係し合ひ、交渉し合つて、國民の健康、道德、文化を増進しなくてはならぬ。

フレンタノ氏は Dabeı wird nicht Staatshilfe abgelehnt, deren Forderung wird aber auch kein exklusives Prinzip と言ひ、國家の助力を拒みはしなすが、そのみでは目的を達し得ないと言ひ、Zeigen sich bei der realistischen Untersuchung Nots-tände, welche beseitigt werden müssen, und nicht anders als durch Staatshilfe beseitigt werden können, so wird Staatshilfe verlangt; wo dies nicht der Fall ist, genügt Selbsthilfe とす流儀で、國家の權力によつて助力をなす意を明かにし、さうでない場合には、自助で澤山だといふ意見である。ヘルド氏もその著 Die Einkommensteues に於て國家の助を肯定し、有機的國家觀に立つて個人主義を拒否してゐる。ヘルド氏は人間の經濟活動はその他の動向と引き離して考ふることのできぬもので、人間の社會心は自然に現はれるものとして必ずその中に加はり來るから、利己心の一を以て經濟活動は説明することができないものでないといふ。かくて、國家は如何しても利己的な經濟活動のうちへも入り込むと考へるのである。

個人と自助團體と國家とは民衆、國民の物質的、道德的、精神的福祉をはかるには共に欠くべからざるものであるから、共働してその目的を達するようにする。個人と自由、自助團體の組織 (Organisation) 國家の強制は共に欠くべからざるものである。自由と強制と組織とが結合して人間の福祉を圖り、それを實現するのである。但し、その中、個人の自由は目的であり、組織と強制との一又二により、この二を手段として、個人の福祉の實現なる目的を達せんとするのである。

團體も國家も個人の生存を助長するを目的とする。團體、社會、全體はいつれも其中の成員、國民の生存を助長する手段たるまで、ある。最初、個人は個人として生存すべかりしもが、社會を造つたのは、それを通じて (即ちそれを手段として) 一層よき生存をなさんがためであつた。個人の希望するヨリよき生存の目的は社會、團體、國家によつてなし遂げられる。然らば、個人の生活を脅かし、個人の生存を不可能ならしむることが如き社會は個人本來の目的たる生存の助長に矛盾するものではなくてはならぬ。社會は個人の生存を助長することによつて始めてその出現の目的をよく達成するものと言はなくてはならぬ。こゝに、個人とその自由とが基本たる意味が鮮かになる。然らば、自由と組織と強制との三の中、自由が目的で組織

と強制とは目的を達成さすべき二の手段たるまである。この二の手段は兩々大切なもので、その一を欠くことはできないが、社會は個人の生存とその自由とを維持し増進する機能と任務とをもつものなることについては毫も疑ふ餘地がない。

組織によつて個人の生存と自由とは維持され増大されるが、組織の及ぶ能はざるところ、その無力にして個人の生存と自由とを維持増進すること能はざる場合には、強制が出場し、權力をもつて障害となるべきものを除去するであらう。かくて始めて、個人の生存は最終的に保全せられ、個人の自由は最終的に保證せられる。個人の生存を脅かすが如き國家は本來の性質に反し、個人の自由を減縮するが如き社會はその固有の任務を亡失する。

かくて、個人と社會との關係は最終的に決定せられる。個人が目的であつて、社會は手段たるべきものである。併し、目的としての個人はそれ自づから全からず、それ自づから存立することができないため、手段としての社會によつて生存をなし遂げ、その自由を増大しなければならぬ。然らば、個人と社會とは、(一) 無關係なるものにあらず、(二) 對立するものにあらず、(三) 個人と社會とは路傍の人の如く冷然回顧し合はず、無視する

ことのできるようなものでなく、必ず相回顧し相提携しなければならぬものである。個人と社會とは決して對立關係にあるものではない。無政府主義の謬妄は個人と社會とを對立するものと考へ、社會は個人の敵で、自由なる個人は社會を廢止しなければならぬとするところにある。この事の根本的の謬妄であることは既に明かにされた。個人は個人として絶対に生存することのできるものでなく、また、その自由も個人の手によつては保全しがたい。個人は必ず社會に入り込むで、そこに生存を全ふし、自由を獲得しなければならぬ。

個人と社會とは無關係なものでも、對立するものでもなく、兩者は竟に統合しなければならぬ性質のものである。個人と社會とは竟に有機的に統合せらるべきである。個人を目的とし、社會を手段として、個人の生存に都合の宜よいような形式によつて兩者は有機的に統合せられなければならない。こゝに、個人と社會との有機的統合説が現はれる。この個人と社會との有機的統合説は著者独自の學論たるであらう。

1. 海野幸徳「社會政策概論」
2. Brentano, Arbeitergilden der Gegenwart.
3. Gehrig, Die Begründung des Prinzip der Sozialreform.
4. Pesch, Lehrbuch der Nationalökonomie.
5. Schönberg, Literatur zur sozialen Frage.
6. Schüren, Die Kathedersozialen und die Manchestergeistes oder der Sozialismus und Kommunismus.
7. Held, Sozialismus, Sozialdemokratie und Sozialpolitik.
8. Held, Die Einkommensteuer.
9. Die Wirtschaftswissenschaft nach dem Krieg, II Bd., Festgabe für Lujo Brentano zum 80. Geburtstag.

第四章 個人本位の社會と 社會本位の社會

一 自 由

何故に自由が望ましいか。それは人間たるに必須條件であるから。自由なきところに人間はない。人間のあるところ必ず自由がある。人間は奴隸として、存在すべきものでも、他に寄生すべきものでも、他に寄生すべきものでもない。他に寄生すべきものでもない。他に寄生せず、他に寄生せず、それ自づから獨立するところに人間的價值ある人間が現はれる。個人主義の社會には自由が必ず要求せられる。前代より現代にかけて個人本位の社會が現はれ、資本主義も個人主義に育てられて今日あるにいたつたが、個人主義の原則は無論自由である。何故、自由が追ひ求められるかと言へば、それはそれ自づから最も望ましいからである。

人間は仲間生活に入つて生活する形式をとつたから大體、社會、國家の世話と保護にならずして進むことはできないが、「全體」、「社會」のうちへ入り込めば保護の代償として或る程度に於て個人の自由を犠牲に供しなければならぬ。それ故、個人主義の見地に於ては、全體、社會の容喙はその生存に必要なべき限度に於てある。生存に必要なべき限度は絶対的觀念ではなく、その時、その所によつて異ふから、それは相對的觀念でなければならぬ。但し、如何なる場合にも、社會の干渉が必要なるべき限度をこえると、そこに、社會的害惡が現はれ、ために、個人の自由は奪ひ去られる。社會主義は平等を目的として追ひ求め、過分に全體を強調するが故に、自由を失ふ。社會主義社會に於ける人間は最後の一人にいたるまで奴隷である。自由なきところ人間的價值ある人間あることなく、あるものは唯奴隷だけである。社會主義は集産主義によつて社會本位を極端に押し通すのであるが、これ、前代に於ける個人本位思想とその秩序の障害にのみ着目し、その眞の意義を忘失し、個人の自由が人間の要求であり、その最も大切なる要求であることを無視するからである。

個人主義の立場を極端に押し通せば、個人の自由のみを強調して、全體、社會を無視し、苦くは、これを無用視するが、これは個人のみを知つて、その仲間生活を忘れたものである。人間は個人として絶対に生存することを得ざる動物であるから、仲間と提携する限度と範圍とに於てその自由を制限するを要する。個人主義にも、ある限度の全體があり、社會がいるのはこれが爲めである。

個人を極度に押し擴め、自由を極端に押し進むれば、全體、社會、家族、國家、議會、法の統制は一切有害となり排除する外はなくなるが、これ即ち極端なる個人主義の立場である。極端に個人の自由を把持すれば、一切の強制、權力を有害視し、制壓によつて統制されることを否拒するにいたる。最初、英國に於ても、獨逸に於ても、佛蘭西に於ても、個人主義は文字通り極端なものでなかつたが、漸次、個人とその自由とは一切の強制を無用視するところまで進んだ。その後、極端なる個人主義は漸次緩和して、一部分自由を犠牲にして、全體、社會、國家の統制を容認するにいたつた。その中には社會主義に接近して行き、一見、社會主義なるが如き趣を呈するものさへあるにいたつた。

人間か仲間生活に入つて、その生存を進める意義はもう一度明かになりまさり、かくて、

國家の統制と干渉とを求めて社會政策を行ひ、鐵道を國有になし、土地改正を行ひ、獨占を制限するなど、個人の自由を減縮して只管全體の福祉を圖つた。かくて、個人に於ける眞の自由は求められ、仲間生活を通じて個人にては享有することを得ぬ自由をうる事ができるとする思想に達した。

個人主義の旗幟の下に自由は二の方法によつて求められた。一には絶対に全體、社會、國家の干渉と制限とを排除することによつて、二にはある限度に於て全體、社會、國家の干渉と制限とをいゝることによつて。人間がロビンソンクルーソー的生存形式を採るなれば全體も社會も國家もいらなけれども、人間は原始以來、仲間生活に入り、同類と提携して生存する形式をとつた。極端な純粹な個人と自由とがそれ自づから立つを得ず、つねに、全體の規律をいれ、社會に率ゐられ、國家に命令せられる必要の生ずるはこれが爲めである。

但し個人主義のをもむくところ、時に個人の絶對自由を主張するあり、仲間によつての自由を無視してロビンソンクルーソー的自由が獨りその勢力を逞ふせんとす。かくの如き自由なるものは仲間生活にあり得べからざるは明かであるから、純粹個人主義は人間の社會生活と矛盾

して劣敗に終るべき性質のものである。

二 經濟的自由

經濟的個人主義は個人主義的原則の開展であるからそれは自づから經濟的自由をその基準とする。經濟的個人主義は極端に經濟上の自由を主張するが、個人主義一般に於けるが如く、經濟上の自由には一定の限度があるから、全體、社會、國家の統制、制限を残りなく排去することができぬ。但し、極端なる經濟的個人主義は全體、社會、國家のすべての干渉すべての制限を排除せんとする。個人主義を極端に押し進むれば全體、社會、國家の干渉と制限とを排除しなければならぬ。よつて、經濟に於ても個人本位で進む限り、經濟的自由を極端に擴張し、それに制限を加へる全體、國家、議會、法を排斥するにいたるは自明である。

經濟的個人主義のうちにも諸々の程度があり、極端に經濟的自由を主張するものと、殆んど社會主義に近きものとの間に諸々の階段がある。すなはち茲にも經濟的自由主義と經濟的社會主義とが混つて居るのである。經濟的自由も亦極端に主張することの能きない性質のものである。

るから、個人主義は經濟的個人主義の旗幟の下に諸々の形式と範圍とに於て、國家の干涉をいれて居る。現代の經濟發展は無規律なる無政府的なる經濟を *sekundäre* なものとなし、國家の統制をいれて全國民の見地から運営する主義をとり、その度が漸次高まり、竟に他の極端にもむき社會主義組織のうちへ移動して行つた。現代經濟生活の特徴は個人本位から社會本位に移りつゝあり、又、移つたことにある。個人の生活とその福利とは全體のために犠牲にされなければならぬ。人間の生活に於て、個人の生活よりも、集團の生活の方が貴いのであると考へられた。これは無論首尾顛倒であり、この種の經濟觀は價值顛倒の經濟であらねばならぬ。個人の生存が基本であるが、個人は個人として生存することができない爲めに、仲間生活に入つたまでである。人間が個人として無力ならざりせば、虎や獅子の如く孤獨生活に終始したであらうが、牙も爪もない人間にはそれができなかつた。茲に人間固有の仲間生活が導入せられた。

經濟的自由を極端に押し進めることの能きぬ理由はこゝにある。經濟的自由主義に終始せんとするも、人間の經濟生活が仲間と提携し連絡するものなる限り、純粹經濟的自由を標榜する

ことができず、ついに、社會と國家とによつて制限されたる經濟自由主義を採用するの餘儀なきにいたる。こゝに經濟的自由主義の立場を離れて、社會主義に接近するものさへあるにいたつた所以である。全體として、極端なる經濟的自由は維持されず、いづれも或限度、或範圍の全體的規律と統制とを加へて居る。こゝに又極端なる事態が現はれ易いのである。經濟上、個人の自由などは追求すべきでなく、追求する價值もないと考へられる。こゝに社會主義の立場が導入せられる。

個人主義は自由主義、社會主義は不自由主義である。經濟的個人主義は自由主義、經濟的社會主義は不自由主義である。

現代社會は個人の自由を失つて社會なる偶像を安置し勝ちである。人間はその生活に於て社會を無視し度外することができぬ。さりとして、社會を本尊として禮拜するときは忽ち價值顛倒の過誤に陥る。然る場合には、個人が生存する手段として採用した道具が今度は人間に馬乗りになつて人間を酷使する光景である。この價值顛倒の社會觀を把持するものが社會主義と、その經濟なのである。

經濟的個人主義は個人主義一般の如く經濟の自由を基本とする。個人主義が極端なる形ちで現はるれば、個人の經濟的自由のみを見て、その他を一切無視度外するから、國家とそれによつて造つた法的組織とを排除するのである。併し、國家は全體を力によつてまとめる機關であるから、法的作用を欠くことのできぬ限り、國家とその法的組織とは、必ず經濟的個人主義のうちにも花を開き實をつけるであらう。經濟的自由主義と相いれる全體的統制は國家が一定限度、時に、最少限度の統制と干渉とを行ふものである。たとへば國家の干渉と統制とはたゞ個人の自由、營業の自由、競争の自由、契約の自由を確保し、これを侵すものを制壓し財産所有の自由を侵すものを罰することに限るが如きそれである。英國は大體個人主義的立場にあり、國民の自由に最大の保證を與へると共に、極度に國家の國民に加へる干渉と制限とを排除して居る。

三 個人主義社會と財産所有の自由

經濟的個人主義は財産所有の自由を主張する。ミセス氏は自由主義を限定して自由主義とは

生産手段に關し財産分有を支持するものとして居る。ミ氏は財産分有、財産を私有する個人主義を支持して *Nur ganz bekennen sich zu den Grundsätzen des Liberalismus und erblicken in der auf dem Sondereigentum an den Produktionsmitteln beruhenden Wirtschaftsordnung die allein möglich Form der gesellschaftlichen Wirtschaft* と言つて居る。個人が財産を私有することは經濟的個人主義社會の特質をなす。恰も、社會主義社會に於て生産手段を共有にするように、經濟的個人主義社會では財産を分有し、それを私有にするのである。自由主義社會に於ては私有財産制は神聖で不可侵であるとせられる。ミセス氏はいふ、「社會は人間の造つたものである。それは神の造つたものでもなければわけの分らぬ自然の造つたものでもない。……社會なるものが善いものであるか悪いものであるかは色々に判斷を下すことができる。併し、死に對して生を、苦痛に對して幸福を困窮に對して福祉を求むるなれば、社會は肯定しなければならぬ。社會とその進歩とを望むものは全く無條件で生産手段に於ける私有を肯定しなければならぬ」かくの如く個人主義立場からは財産の私有が主張せられ肯定せられる。

自由主義的社會では私有財産は自由に追求せらるべく、財産を分有することは全く自由でなければならぬとせられる。自由主義は社會主義に對して私有財産の肯定と、その神聖なること、その不可侵なることを支持し主張し擴張する。

四 經 濟 主 義

經濟的個人主義は經濟主義 (Ökonomismus) である。自由主義と經濟主義とは表裏關係にあり、自由主義は必ず經濟主義たらなければならぬが、經濟主義は又自由主義と相關係する。經濟的個人主義にあつては、自由の途を通じて經濟的に最高なる生産に達せんとする。個人が自由であり、經濟上自由であるを要するのは、それによつて經濟主義たる目的を達せんが爲めである。

自由主義が幕を開けたところでは經濟主義が入來し、多産が標榜せられる。なるべく多く生産し經濟的能卒と効果とを齎らすのが經濟的自由主義の本領である。自由主義は労働をヨリ多く加へてヨリ多く生産することを本領となし、飽くなき營利の衝動が幕を開く。營利心の一度び入り來るや最小の費用を以て最大の結果を擧ぐべしとする經濟的原則を樹立し、生産と營利と貪慾とが自由主義特有なものとして現はれ出た。

自由主義は經濟主義であるが、經濟主義の分配の原則は任意的のもので、社會的基準によるものではなく、一に労働を基準として分配が行はれる。労働の結果は労働の供給者に與へられるといふ原則は自由主義經濟のものである。收得の大小は任意にきめられるのも、權利をもつて強制せられるのもなく、一に労働によつて決められるのである。労働の原則 Arbeitssprinzip が自由主義經濟のものである。それは能力によつて分配せられ、それより以上でもなくそれより以下でもなく分配せられる。

自由主義的經濟、個人主義的經濟は能力主義 Operatismus であり經濟主義であるから、最高の經濟的結果最高の生産を目標とするにいたり、經濟偏重主義となつて社會公共の福祉に關心せざるにいたる。社會主義の目的は經濟や生産でなく、社會的福祉である。社會主義固有の姿は經濟よりも、社會的契機 (Soziale Moment) が主位を占め、よき住居、よき食物、よき教育、よき労働條件といふような非經濟的な要件を充足し人間のヨリ高き幸福に主力が向けられ



る。個人主義的經濟はこれに反し、經濟であり、營利であり、貪慾が主位を占める。個人主義的經濟にあつては最高の生産をなし、飽くなき營利と貪慾とを事とするのが固有の姿であり、その本領である。個人主義は能力主義であるから、能力の優れたるものはヨリ以上の分配を受け、能力の劣れるものはヨリ以下の分配を受ける。この事は終始同一なるが故に、能力あるものは益々富み、能力なきものは益々貧しくなる。こゝに優勝劣敗の世界が開展せられる。能力あるもの、才能あるもの、枝倆のあるものに對してはそれに相當する幸運がまつ。個人主義の世界は優勝劣敗の世界であるのはこれがためである。

個人主義的資本主義の世界に於ても、社會的契機が全く欠けて居るわけではないが、生存競争が激烈で一分の間隙もないから止むをえず、私利維れ征し、人類の幸福に參與しえないのである。同類の福祉などに向いて居る間に、他の競争者が間隙をねらつて打倒するので、餘儀なく民衆の福利に關心することができないのである。個人主義經濟や資本主義經濟に全く社會的契機が欠けて居るのでも、非經濟的要素が全くないわけではないが、たゞ十分非經濟的要素を取り入れて、社會的契機を十分はたらかせる餘裕がないのである。個人主義、自由主義、資本

主義が經濟に終始し、營利と貪慾とに終らざるべからざるは、その本質としてでなく、寧ろ、それに附隨する事情によつて餘儀なくされた結果であると觀るべきであらう。

併し全體として經濟的自由主義、資本主義は經濟偏重であり、經濟主義なるに對し、社會主義は民衆の福祉を以て經濟より先きなりとなし、ヨリ多くの人間的福利の實現に向ふ。

五 經濟的協力

經濟的自由主義は個人を單位とするから、經濟的な無政府状態に陥る危険がある。個人主義經濟の無政府状態が多分に時代をして混亂に陥れ、紛々擾々、優勝劣敗の修羅の巷を開展しつつある。併し、經濟的自由主義に於ても經濟的孤立に終らずして、經濟的協力へと向ひつゝあることは見免すことはできない。

素より、原始社會に於ては經濟的な協力は行はれなかつた。これ、原始社會には分業といふ程のものがなかつたからである。然るに經濟的活動に分業が導入せらるるや、經濟活動は孤立にてなし遂ぐる能はず、彼此協調し協力しなければならなくなつた。個人主義經濟に於ても分

業によつて自他呼應して結合し、協力ともなり、協調ともなつた。分業は益々細より微に入るが故に、そこには全人といふようなものはなく、人間はすべて部分化して了つた。今日、靴一足製造するにも三百數十人の分業を要するとすれば、人間は他と獨立しては靴一足だに満足に造ることができなくなつたのである。茲に靴一足造るにも、多數の人間の協調協力を要することとなり、國民經濟、世界經濟の分化は多々益々分業を要し、それに基き、協力なくしては一日も存立する能はざる形勢を馴致した。かくて、獨立する人間なく、又、獨立することも絶對に不可能になつた。然らば、分業を基礎とする現時の個人主義的經濟にあつても、個人を個人として保存し、それ自身孤立するのが最もよい状態だなど言ふことができなくなつた。經濟的自由主義にあつては、無制限にして何の妨害の加へられざる經濟の運行は自然なる統制秩序 *Ausgleichssystem* で、自然がそのをもむく儘に放任すれば最上の状態を生ずるが如く、經濟に於ても無制限なる競争によつて自づから統制され、最上の状態を生ずると考へてゐたのである。カルテル、トラストの如き獨占と雖も、それ自づから競争の弊害を除去せんとする經濟體内の統制作用に外ならぬ。かくて、經濟的個人主義のうちにも統制作用が入り込む。經濟的自

由はそれ自づから進歩を促進する。すなはち、個人主義をその儘放任すれば、自づから經濟的進歩となつて現はれるのである。經濟的な自由競争によつて自づから進歩を促進するのであるから、これに干渉し、それを防遏するが如きは思はざるの思案であると考へられる。かくて、經濟的自由主義は經濟上の自由競争をもつて進歩の原動力と見る。

六 個人本位主義と社會本位主義の價值

現代社會經濟の發展によつて示されることは、個人本位主義は大體社會本位主義に變轉し移動するといふことである。この史的發展は大體正しいけれども、一の極端から他の極端に飛躍しつゝあるが、ついに、二の極端の統合によつて中正の状態が生ずることを見免してはならない。個人と社會とは兩々相豫想するから、各その一を欠くことができぬ。個人と社會とが統合（一定の形式によつて、後に述べる）するところに於てのみ正しき人間の生存形式が現はれるのである。

この見解に基き現代の社會經濟の史的發展の示現する方針は正しく、他は誤つて居ることが

分る。個人本位の見地は純粹な絶對なものとしては保持することができぬ。絶對に仲間、社会から遊離するが如き個人とてはない。如何に個人の自由が望ましいとするも絶對に他の個人から遊離するが如きことはできぬ。それは人間の仲間生活の形式の上から絶對に許容せられぬ。個人が絶對の自由を主張するなれば人間生活を止め、全く遊離し獨存する個人の状態に止らなければならぬ。この事の間人生活上全く不可能なるは明白である。

個人主義を絶對に支持し主張するのは人間生活の意味を没却するもので、根本的の過誤に陥つて居る。だから、個人の絶對自由を支持し主張する資本主義や無政府主義は絶對な過誤に陥つて居る。無政府主義は絶對に獨立し絶對に自由なる個人を支持し主張するのであるが、仲間生活によつて生存して來た人間にはかゝる生活方法は全く不可能である。絶對個人主義などは不可能である。無政府主義なるものは人間の生存形式たる仲間生活を無視し、度外するが故に、それは虎や獅子の生存形式としては可能であつても、群居動物たる人間の生存形式としては全く不可能である。個人的自由主義も資本主義も個人の自由を支持し主張する邊からは無政府主義と接近して居る。無論、無政府主義と社会主義とは兩極端である。無政府主義は極端

な個人本位主義であるが、社会主義は極端な社会本位主義である。この二のものは誤りであるとするれば、無政府主義も、社会本位主義も誤りであり、資本主義も極端に個人の自由を主張する邊からは無政府主義と聲息相通ずるものとなつて誤りであり、素より純粹社会本位主義たる社会主義も誤りである。個人の自由思想から言へば、個人主義と無政府主義とは同一方向のものである。兩者共に極端に個人の自由のみを認める。全く社会を眼中にをかね如き個人主義は誤つて居る。個人主義にして存立せんには社会を眼中にをき、個人と社会とを統合しなければならぬ。無政府主義は自由主義の一形式で、それはたゞに經濟的制限を残りなく排除するのみならず、それと共に、政治的法的制限をも全く排除せんとする。無政府主義は國家も議會も法的秩序も無視度外し、その極、家族までも無視度外せんとする。かくの如き絶對個人とその自由のみを支持し主張する無政府主義の誤りであることについては人間の仲間生活上一見明瞭である。

純粹個人主義は維持することができぬ。これに對し、純粹社会主義も亦維持することができぬ。絶對なる個人も絶對なる社会も共に過りである。社会主義は社会を本位とするものであ

る。この意義に於て、ハンス、ゲルゼン教授のアドラ博士に對する論争は誤つて居る。但しアドラ氏が社會主義を以て眞の個人主義だとなし、社會主義と個人主義とが穴勝負しないといふ論法も誤つて居り、兩々共に個人主義と社會主義との眞髓を穿たざる憾みがある。

ケルゼン教授が社會主義を以て個人主義をいれるとなし、それを一種の無政府主義だとするのは無論誤つて居る。無政府主義は國家を廢止して無階級の社會を造り出すとするのであり、社會主義も亦さうであるから、社會主義は畢竟無政府主義であるとケルゼン氏は考へる。マルキシズムには無政府的意義があるからにはそれは個人主義でなければならぬといふのである。併し、マルキシズムに於ける個人とその自由とは、ケルゼン教授の考ふるが如き個人としてそれ自づから存し、それ自づから自由であるが如きものではない。マルキシズムに謂ふ個人とその自由とは社會化されたるもの *Vergesellschaftung des Individuum* の見地によるものである。社會主義に於ける個人は社會に入り込み社會によつて個性を得た個人で、それはロビンソンクルーソー的の個人ではない。だから、いづれにしても、それは社會化されたる個人である。社會主義にいふ個人は無政府主義にいふ純粹な絶對な個人ではなく、社會化されたる個人である。ケ教授は絶對個人と社會的個人とを混同して居る。

素より、個人主義には二の種類がある。一はロビンソンクルーソー的個人に基くもの、二は社會によつて固有の個性を付與せられたるものである。兩者共に社會に對して個人の先優を主張する。前者は社會に何の關係も交渉もないが、後者に於ける個人は社會内に於て他の個人に接觸し交感し交通する個人で、それによつて出来上つた社會個人である。個人は個人として存在し、それによつて個性をもつことができるが、また、社會に入り込み、他の同類の影響の下に個性を得ることもできる。無政府主義の個人と個性とは前の場合であるが、社會主義の個人と個性とは後の場合である。然らば、社會主義が個人主義をいれるとしても、ハンス、ケルゼン氏のいふが如く無政府主義にいふ個人と個性とをいれるのではなく、それと類を異にする社會的個人と社會によつての個性とをいれるのでなければならぬ。社會主義も無政府主義も國家を撤廢し、強壓を除き、權威を廢止し、個人の自由を支持し主張するとしても、兩者が別の根據に立つ限り、ケルゼン氏の如く社會主義と無政府主義とを混同することはできぬ。

個人を個人として見るものは個人を要素化するものであるが、それを他の同類と交感する個

人と見れば社會と一體たるべきものである。前の場合には、個人が絶対に遊離するが、衆個人が結合をなすことによつて過不及なき生活状態をつくり出すとすれば、それによつても個人は現れ、社會によつて個性が造られると考へられる。個人が他の個人に反應し、それによつて制限せられても社會個人は又社會的自由を得るが故に、そこにも同じく自由があると見做される。社會個人の自由は他の個人と分離獨立することに依る自由にあらずして、社會に入り込むことによつて得られたる個人の自由である。すなはち、社會個人の自由は個人的自由にあらずして、社會的自由である。個人的自由は絶対に無制限な無規律な自由を意味するが、社會的自由は社會によつて制限をうけ、社會的規律に合一することによつて得られ、又、與へらるゝ自由を意味する。無政府主義者は個人的自由のみが眞の自由であると言ひ、社會主義者は社會的自由のみが眞の自由であると主張する。社會主義にいふ自由とは社會的概念であつて、社會によつて付與されたるものを意味する。意志の自由といふことも亦社會的に解釋することができると思ひ、社會主義者は普遍的見地によつて得られたる社會的な意志の自由のみが眞の自由意志であると解す。

マルキシズムに於て個人の自由とその解放とが強調されるとしてもそれを以て無政府主義と見るのは早計である。社會主義はすべて streng rational gebundener Wirtschaft の上に成立するから、その中に排置されたる個人は矢張り合理的に統制せられることとなり、この場合無法則無拘束無制限なる自由はないわけである。ゲルゼン教授が言ふやうな無政府的意義はマルキシズムの中にも入り込むことのできない筈で、無政府主義と社會主義とは個人の自由と解放とに對しても全く別の見地に立つて居る。マルキシズムでは社會體内に許容される社會的自由を意味するが、無政府主義では單に個人的自由に終始するのみ。個人に立脚する無政府主義と社會に立脚する社會主義とを同一視するのは、個人と社會とを同一視するような矛盾を犯すもので滑稽であるを感ずる。

社會を本位として基準とする社會主義の自由と解放とは、個人を本位として基準とする無政府主義のものは全く別の見地に立つて居る。社會主義の解放は個人の解放にあらずして、社會の解放若くは社會を全體としての解放である。社會主義にあつては個人の解放の如きは遙かに後景に退いて居る。社會主義の興味と關心とは、どこまでも社會にあつて個人にはない。

社會主義にいふ解放は個人的解放にあらずして、社會的解放である。言はゞ、一部の人間の解放にあらずして、全人類の解放を意味する。この事は社會主義が社會本位で社會を基準にする當然の歸結である。マルキシズムにあつても、これに従つて、その解放は個人的解放の概念にはいらずして、歴史的社會的範疇に屬しやう。それ故、それは個人の解放のために戦ふよりも、寧ろ社會の解放のために戦ふ。それは個人的觀念ではなく、歴史的社會的觀念であり、社會的過程に終始する。それ故、社會主義にあつては、個人の自由と解放とは人間一般と相通ずる人間的意義によるもので、個人のためでも、一部の人間の爲めでもない。マルクスの解放と言つて居るのは、個人的解放にあらずして、社會それ自づからを解放する義である。

これによつて社會主義の特質はあくまで社會を基準として求めらるべきものなるを知る。自由と言つても、社會主義では個人を個人としての自由ではなく、社會に入り込み、そこに社會的自由を求めることであり、解放と言つても、個人の解放であるよりも、社會の解放なるを知る。

個人主義と言つても、ロビンソンクルソー的な要素化的個人は社會主義には何の關りはな

い。社會主義にいふ個人は社會によつて、成立するもの。すなはち、個人主義から Parson ができるが、社會主義からは *Personlichkeit* ができる。今や、この事は十分明かになつたと信ずる。

こゝに於て、三の吟味をしなければならぬ問題が生ずる。第一、ケルゼン教授の如く、個人を個人としての見地から絶対個人主義を主張するものを社會主義であるとする見解、第二、アドラ博士の如く個人は社會に入り込んで個性をうるとする見解、第三、絶対個人主義は可能なるかの三の問題がそれである。

ケルゼン氏の如く、社會主義を個人の見地から見るとは誤りである。社會主義は個人とは何の關係もなく、それは一に社會を本位となし社會を基準とする。但し、アドラ氏の如く個人が社會に入り込むことに於て、始めて自由を得、解放されると考へるのは根本的の謬妄であらう。なる程、個人は社會に入つて始めて個性を得るのであるけれども、この個性たるや社會的概念であつて、個人を個人としての人間的見地とは何の關係もないものである。個人は仲間生活をなし、始めて生存する形式をとつて居るから、個人の個人たるどころ即ち個性も亦仲間

生活に入つてから出來上るものである。これについては何の疑ひもなからう。個人のもつ個性なるものは仲間と共に造つたもので、獨力で開拓したもので、開發したものでない。かやうな種類の個人の自由は社會の規範にはまり込み、それによつて一舉一動命令されたる自由である。これについても何の疑ふ餘地はない。社會は規範を造るからには、そこでは、規範によつてのみ自由がありうるわけで、社會は規範に詰めこむべく一舉一動命令を發しつゞける。この規範は相對的に或は時に絶對的に硬化するのである。社會の規範は多くの場合固定的で流動的でない。

社會の規範が固定的である場合と流動的である場合とは二の異つた結果が生ずる。普通、社會によつて個性ができ、自由が得られるといふ場合、この二の異つた見方を混用してゐる。社會は個性をりくるになくはならぬ素材を供給する。人間は社會遺傳によつて代々特異の文化を傳達されて、その時代としての色調をうけ、國民としての特質を得、家族としての特異の相を受取る。これによつて、個性、家族的傳統、國民精神が造られ、これによつて、夫々時代國民、家族にふさはしい個性が造り出される。個人はかゝる社會遺傳を通じ社會的遺産を受取

つて個性を開發する。これより以外仲間生活をなす人間としての性情あるなく、個人は如何に回避せんとするも社會によつて形成せられ付與せられた個性を持つ外はない。社會に於ける個性とは畢竟かくの如きものである。

上にいふところのものは社會が素材供給者として見られたる場合である。社會は一定の素材を供給す。社會は一定の社會文化を遺産として供給する。これをその儘受取つて個性ができる。この間に何の無理も強制もないのである。個人が如何に社會の刺戟に反應しようとも、個人のもてる原形質が如何なる様式によつて素材を取り入れようとも、それは自がまゝ行はれるので、少しの無理はない。社會に反應することは個人の遺傳、素質によつて異ふ。同一の環境同一の文化と雖もこれに反應することは素質を異にすることによつて異ふ。萬人同様に同一文化に反應することはできぬ。獨逸の音楽に反應したベートーヴェン、英國傳來の進化思想に反應したダルウキンは獨特なもので、何人も二度とこれを繰り返へすを期待することはできぬ。ベートーヴェンもダルウキンも等しく時代の子といふにふさはしいであらう。ベートーヴェンやダルウキンと時を同ふして生れ出でた無數の大衆はこの二の超人の如く社會の供給する素材

を取り入れることができなかつた。社會は素材を供給することに於ては萬人に至極公平である。絶対に公平であるとさへ言へる。英國傳來の進化思想はダルウキンと同様に同時代のすべての國民に傳達され、獨逸傳來の音楽はベートーヴェンと同様な全獨逸人に傳達された。社會は至公至平、その素材を一樣に萬人に開放し、萬人の取るがままに任す。されど、萬人のこれに反應する態様は千萬無量で、詳しくは、個々人によつて異つて居る。二人として同一に同一な社會環境に反應せず、又、全く同一に反應することができない。これ、原形質を異にし、生物的遺傳を異にするからである。個人が如何様にこれに反應しやうとも、素材を供給する任務を帶ぶる社會としては何の不都合もないのである。社會が供給する素材を取つて如何にこれを組み立てようとも個人の自由であり、絶対自由であると考へられるであらう。社會は素材を供給するだけで、その組立て方は一つに個人の創造にまかせてある。なるほど、社會は一定の組立方を個人に指示するが、この組み立て方までが、素材の一に數へられるのである。この場合かく／＼の組み立てにしなければならぬと言つて社會は強制しない。素材としての社會は組立方を強制したり命令したりしないのである。私はこの場合、「素材としての社會」と「規範と

としての社會」とを區別する。素材としての社會は流動的で、何の拘束を加へざるもの、規範としての社會は固定的で、一舉一動社會が命令し拘束を加へるものである。この二の社會についてはアドラ氏は知り及ばず、兩者を同一なものとして取扱つて居る。併し、この二の社會は根本的に異ふことを見免してはならぬ。

社會は素材として、社會的遺傳を通じて一定の社會財産を個人に傳達する。これによつて、個性が何の無理もなく出來上る。素質と、その上、組み立方まで素材として使用を許すが故にそこに何の無理もないのである。個人が好むがまゝに銘々素材を使用することによつて特定の個性をつくり出す。そこに變化があり、偶然があり、創造があり、従つて、個性もできる。この場合、社會の供給する素材とその組立方とに基いて、個人は創造するのであるから、大體、社會的概念として終始し、個人は何づれも孤獨な個人として性情を開發せず、社會的個人として成立するであらう。素材としての社會にあつては遺傳と自然及社會環境の合成によつて個々人が各千萬無量の個性を造り出すがそこに何の強制も命令もなく、従つて、聊かも無理が行はれない。

併し、我々の見聞する社會なるものは斯くの如きものであらうか。社會によつて個性がつくられるといふけれども、それは個人の自由なる社會への反應によつて造られるものだと思像することができようか。若し、かくの如き無法な想像をなすものがあるならば、現實社會に盲目なるか、又は無理にさう解釋するのである。社會は通常素材を供給するだけでは甘んじない。社會は通常素材の組み立て方までも素材として用ゐることを肯じやうとはしない。こゝに、規範的社會なるものが現はれる。

規範的社會は固定的社會である。通常社會は規範的である。社會は思想を規範的なものとして押したて一定の規範をつくり、これを成員に採用すべく命令し、聽かなければ強制し、最も頑固な輩には彈壓を下して、これを排除する。社會は一定の信仰を強要する。當時の社會環境を素材として自由に創造することは個人に許されない。こゝに、規範的信仰が生ずる。社會は一定の藝術を強要する。社會の命令する藝術を採らないものに對しては、造つたとて、見ても買つてもくれぬ。こゝに、規範的藝術が現はれる。社會は特定の政治思想を強要する。社會の欲し命するが如き政治的形式に應合しないものは牢獄を以て威喝する。こゝに、規範的政治な

るものが現はれる。かく見來れば、社會は素材としてあるのではなく、規範としてあることが分るであらう。

社會は一舉一動個人に命令を發する性質をもつ。英國の如き比較的自由なる社會では多少個人の自由をも容認するが、大體、その壓制的なる形貌はいつくでも同じである。たいていの社會は個人の舉一動を監視し、それを制壓する。そこで、食ひ方も新規な方法によつてはならず、書き方も發明してはならず、思つたり感じたりすることも新らしがりであつてはならず、政治も亦命令されたる型を固守しなければならぬ。かくて、いつくに社會によつて創造せられたる個人あらん。社會は強制して個人をつくるが、創造せられたる個人をつくらない。流動的社會では素材を用ゐる任意に創造をゆるすから、かくの如き社會には「創造せられたる個人」を生むけれども、固定的社會は規範を以て一貫するから、かくの如き社會には「強制せられたる個人」の外何ものをも生じない。

社會によつて個性をつくるといふ論者はこの二の社會を區分せず、従つて、その論理は常に曖昧なるもの不徹底なものとなつてゐる。社會が個性をつくるといふよりも、社會が個性を型

にはめて強制するのである。社会は非常に煩鎖なうるさい規範を盛り立て、一舉一動と雖もその型にはめ込ませやうとする。然るに、社会の型なるものは、主としてその當時の特権階級の支持するものであるから、特権者の勝手にその都合のよいとするところのものを規範として強制することとなる。

かくて、社会によつて個性は創造されず、(それは素材としての社会の職能であり、任務であるところの)社会の型に強制されて万人一樣なる乾固なる木乃伊が出来上る。これが社会によつて個性をつくる仕組みをもつ社会では個人と個性とに大なる危機を齎らす所以となる。従つて社会を極端なる制壓的なものとして造り上げる社会主義社会の個人と個性とに對してもつ危険は無上であると言はなければならぬ。

社会主義社会は中央集権的社会で、中央より一舉一動に對し命令を發して万人に強壓を加へその規範を隅から隅まで徹底させる。如何に素材としての社会に止まらんとするも、社会はその性質上強制的となるを免れず、繁煩な規範を連發して個人に束縛を加へ勝ちである。その束縛たるや一舉一動に及ぶべき詳密なるもので、個人は食ふにも、語るにも、戀するにも、社

会の命令を受取るのである。社会主義社会に於ては、その社会の規範たるべき經濟や政治に違反するものは逆賊と見做してこれを懲罰する。苟も社会主義社会の指令に違反するものに對しては彈壓が加へられ投獄の憂目を見る。未だ會て純然たる素材としての社会なるものゝ存在せしことなきを以て見れば、社会主義社会も亦決して素材としての社会たりえざるは明々白々である。殊に、社会主義社会は最も暴壓を加ふべき性質をもつて居る。恐く、如何に社会主義者が曲辯するも、社会主義社会程壓制を逞ふする社会は蓋しないであらう。

社会に入つて個性が創造されるといふことはどこまでも偽りである。實に、社会は個人を社会個人となして社会化し、よつて以て個人をつくるけれども、その個性たるや、個人の素質が環境に反應して出来上るが如き創造的任意的なものではなく、規範としての社会が各種の考へべき規範をつくりこれにはめ込む底の強制的個性として現はれ出づるもの。規範を立て、強制しないような社会は未だ會て存せずそのやうなものは今後も恐く永久に存しないであらう。然らば、社会主義社会と雖も社会を本尊となし、それを規範となし、それに違背してはならぬといふ詭をつくる限り、そこにも任意的な社会的個人なるものありうべからず、たゞ強制的な

社會個人が存するのみであらう。私は素材としての社會がつくり出す個人を「任意的社會個人」と言ひ、規範としての社會がつくり出す個人を「強制的社會個人」と呼ぶ。

個人は社會に入つて始めて個性をうると言つても、強制的社會個人の如きものは決して有難いものではない。社會を本尊となし、これを不可侵なる偶像となすに於ては、その形ちの如何にもあれ、等しく強壓を維れ事とする強制組織ならざるをえぬ。社會主義は社會を本尊となし、社會的本尊を跪拜するものであるによつて、この社會程社會に違背すまじと言つて制壓を加へる社會はあるまい。然らば、社會主義社會に於ては眞の個性なるものは開發しえず（素材としての社會の生むところの）似而非なる強制的社會個人が現はれるのみ。アドラア氏などは社會に入つて個性が創造されると言つて嬉んで居るが、かくの如く個人と個性とは似而非なもので慙笑に堪えざるものである。然らば、社會主義社會に眞の個人と個性とを求むることは絶對に不可能であるといふ斷定に達する外はなからう。

如何なる社會に於ても、眞の個人と個性とはいる。實は眞の個人と個性とを追ひ求めるために、これまで、種々の社會が交代したのであるし、今後も亦相も變らぬ人類の熱情がそこに集

中するのであらう。眞の個人と個性とは餘り規範をやかましく言ひたてる社會に於て出來上るものではない。それかと言つて、規範なき社會に於ても眞の個人も個性も出來上らぬ。但し、少しも規範のない無拘束の社會の存立は相像することもできぬ。人間の仲間生活はある程度の規範と強制とによつてのみ可能となるから。然らば、眞の個人と個性とは過分な規範によつても出來上らぬし、無拘束無規範によつても出來上らぬを知る。眞の個人と個性とは過不及なき自由と規範との産物たるを思はしめる。

こゝに、個人と社會とが併せいる理由がある。社會なるものは規範を濫發し勝ちで、個人を拘束し過ぎる。個人はこれに對し放縱で放埒に流れ易い。暴壓も困るし、また、放縱も困る。この兩端を避け、二の害悪を除くために、個人と社會とは提携し統合しなければならぬ。すべての社會本位主義は、社會主義を一例とするが如く、眞の個人と個性とを開發する仕組ではないし、極端なる個人主義自由主義は放縱となり放埒となつて眞の個人眞の個性を開發することができない。然らば、眞の個人と個性とを造くるには個人と社會とがいり、両者が提携し統合しなければならぬ理由を知る。

人間が個人生活を犠牲として仲間生活を始めたのは、それによつて多少拘束せられ制壓せられても、その代償として受取る利益の方が大なりとする義によつたものである。個人が社會に入り込めば拘束せられ、ある程度の損害をうけるは分り切つてゐる。併し、それでも、仲間生活によつてうる利便は個人生活に於けるものと比較することのできぬ程大である。こゝに個人は仲間生活によつてうる壓制を忍んでも集合生活に入つたのである。

純粹個人主義は維持することができぬ。いくら自由が望ましいとしても、ロビンソンクルーソー的の個人は存立する餘地がない。個人の生存は必ず社會に入り込むことによつてなされる。個人本位の社會に於ても必ず一定度の社會はいる。併し、社會が個人に對し暴壓を揮つて、その生存を脅威するのは本末を顛倒したもので、個人の生存の手段として設けられた道具が却つて主人を酷使し壓制し出すやうなものである。

この意味に於て、個人は主、社會は従であり、個人本位主義が基本たり、社會本位主義は副次たることが分り、この意義に基き兩者提携し統合して、二の機能を併合し、個人とその個性とを開發するが如き仕組を採らなければならぬ。

参 考 文 籍

1. 海野幸徳「社會政策概論」
2. Adle, Die Staatsauffassung des Marxismus, 1922.
3. Kelsen, Sozialismus und Staat, 1923.
4. Kumpmann, Kapitalismus und Sozialismus, 1929.
5. Mises. Die Gemeinwirtschaft. 1922.
6. Cunow, Die marxische Geschichts-Gesellschaft- und Staattheorie, 1920.
7. Lenz, Staat und Marxismus, 1919.
8. Mises, Nation, Staat und Wirtschaft. 1919.
9. Hammacher, Ethik und Sozialismus, 1919.
10. Pohle, Kapitalismus und Sozialismus, 1920.

第五章 資本主義

一 資本主義と個人主義

資本主義と個人主義とは同身一體と見るべではないが、個人主義によつて資本主義が促進せられたので、資本主義の起因の一を個人主義に求むることは無論妥當である。自由主義的個人主義の原則の行はれる社會はすべて資本主義社會であり、資本主義と個人主義とは同身一體であると言ふものがあるが、(ミセス氏の如き)資本主義と個人主義とは同身一體ではない。たゞ個人主義を用ゐて、資本主義が大なる發展を遂げたといふだけのことである。クンブマン氏は資本主義と個人主義とを異る範疇に屬するとして對立せしめ、資本主義は現實的歴史の觀念であり、經濟的仕方 (Wirtschaftsweise) であるけれども、個人主義は理念的倫理的觀念で、經濟的秩序であると言ひ、In Wahrheit liegen die beiden Begriff auf zwei verschiedenen Ebenen, es wurde dargetan, das der Kapitalismus einen praktisch-

historischen, der Individualismus einen ideologischen Charakter hat, der erste ist eine Wirtschaftsweise, der letzere eine Wirtschaftsordnung と言つてゐる。この場合、ク氏の經濟的仕方と言つてゐるのは Unter Wirtschaftsweise sei verstanden der Art der Wirtschaftens, wie sie sich naturatisch d. h. aus den eigenen Antrieben der Wirtschaft selbst heraus entwickelt, ohne das aktuelle Eingreifen der öffentlichen Gewalt のことであり、經濟的秩序と言つてゐるのは die Wirtschaftsordnung als das überzeitliche und überaumliche Gedanken- und Wunschbild des wirtschaftlichen Sein Sollens のことである。

社會主義と資本主義とを對立關係にある如く言ふのは誤解であつて (ゾンバルト氏及ブリーフス氏の如く) 社會主義に對立するものは資本主義ではなく個人主義である。社會主義は社會を本位とするもの、個人主義は個人を本位とするもので、社會と個人とが對立するといふ意味に於て、社會主義と個人主義とが對立するのである。資本主義の中には社會的資本主義もあるが、これは無論社會主義と對立するものではなく、寧ろそれと提携するものである。よつて、

資本主義が社會主義に對立する部分は（全體としては資本主義は社會主義に對立しないから）個人主義によつて形ちづくられたる資本主義だけである。

個人主義によつて形ちづくられたる資本主義はそれと類似するもの、それと、兄弟の關係にあるが、それでも兩者は同身一體ではない。個人主義と資本主義とは英國を本國として略同時に勃興成立したが、資本主義は當時獨り立ちができなかつた。當時の強大なる國權に對して資本主義は如何にも無力であり、特權や獨占や組合などが頑張つて居て、自由なる企業の妨げとなつて居た。これ等の障害を排除するにあらざれば、自由なる企業も營利も行ふことができな。従つて、資本主義の横縦の活動には先づ如上の各種障害を除去しなければならなかつた。この役目に服し、それ等の障害を排除して、資本主義をして自由自在の活動をなさしめたものが實に個人主義であつた。かくて、資本主義は個人主義と兄弟たるにいたつたけれども、本來兩者は同身一體のものにあらざるは明かである。資本主義と個人主義とが聲息相通し提携して以來の資本主義の活躍は實に素晴らしいもので、忽ち歐洲諸國を席卷するにいたつた。

中世の唯名哲學による個人説にあつては個人が唯一の存在であつて、社會はたゞ唯名たるの

み。社會は單に個人の寄り集りたるべきで、何の存在も、存在價值も持たぬものと見られ、社會的原子説が蔓つて居た。自然科学研究の餘波は哲學のうちにも浸入し來り、唯名論者たるホッブスはガリレイの原子説によつて國家を理解し、個人を原子に分解し、全體を器械的に見且つ取扱つた。これがその後開發した唯物史觀の基礎ともなつた。文藝復興期には個人主義が確立して、人生のすべての側面を變化し形成した。ヘルヴェチウスは人間を以て必然的に利己主義者だとし、人間はすべて同格同權なるものとした。ルーソーはホッブスやロツクから出發して、社會契約説をたて、自由原理と平等原理とを押し立てた。英國の道德哲學は自然と倫理との境を撤廢して、倫理も亦自然とその法則とによつて物理的に器械的に説明せらるべきものであるとなし、人間の自然的動向によつて倫理を説明し、自然法則が一切を支配するといふ思潮を流布した。かくて、自由主義、個人主義は自由契約によつて器械的に社會をつくることろの人間を首尾一貫支配するにいたつたのである。こゝに、自由主義、個人主義の兄弟分たる資本主義活躍の途が用意され、愈その縦横の怪歩を運ぶ時期が到來したのである。資本主義こゝにいたつて入來す。

資本主義に次いで現はれ來りし社會主義は資本主義に對立するものではないが、個人主義には明かに對立する。ハルムス氏は個人主義と資本主義とを略同身一體と見るが如き口吻で *betracht sie aber als kausal mit notwendigkeit verbunden* としふ流儀であるが、精密には資本主義の兄弟分たる個人主義が社會主義と對立する。そこで、個人を對象とする經濟組織と社會を對象とする經濟組織との二ができるわけである。この意をポレー教授は「すべての考へべき限りの經濟秩序は二の基本的形體に還元することができる。個人的經濟秩序と社會的經濟秩序と」言つてゐる。ポ教授は資本主義は私經濟的並に個人主義的經濟秩序を前提とし、それなくしては考へられぬものと言ひ、資本主義たるには必ず個人主義たらなければならぬといふ口吻である。但し、これは少しく言ひ過ぎ思ひ過ぎで、兩者は同身一體たるのではなく、兄弟分たるだけである。

併し、資本主義に途を備へ、縦横濶歩するを得せしめしものは言ふまでもなく個人主義である。現時の歐洲諸國及東洋諸國のあるもの、經濟組織は資本主義的であつて、同時に個人主義的である。個人主義は個人を本位とするものである。個人を本位とするものなる限り個人主義

といふべく、その本質はどこまでも個人本位である（これに對し社會主義は社會を本位とする）これに應じ、個人主義的經濟とは個人を本位とする經濟であり、個人責任の經濟秩序の謂ひである。個人が自由の責任を以て經濟を運營するものが個人主義經濟であり、國家は個人の責任を負擔せず、たゞ個人の經濟活動を助長し保護するだけである。個人主義經濟組織では國家が自づから經濟を運營するのでもなければ、これを集中的強制的組織として中央より指揮命令するのでもない。個人主義的社會では、一に個人の經濟的活動を圓滑になし順潮にするのが國家の任務となる。そこで、國家の經濟上の任務は個人の經濟活動に障害となるものを除去するといふ消極的なものとなるわけで、國家がその力を用ゐて積極的な經濟活動を行ふようなことはしない。經濟は單に私事であつて、國家の關與する公事ではなく、従つて、勞働の如く國家はこれに對し積極的に何の關與も統制も加へない。個人は勝手に自己の責任によつて經濟活動をなし、勞働をなすので、それに控制を加ふるものは國權ではなく、現に見るが如くたゞ經濟状態あるのみ。個人は勝手に商賈をなし營利を圖る主義であるが故に、その損得は毫も國家の關心することではなく、得をすれば個人の得、損をすれば個人の損で、國家には何の影響もな

但し、個人主義の單位となるものは個人ではなく寧ろ家族であるとボーレイ氏は言つてゐる。個人主義は血縁をもつて結ばれたる家族を以てこの單位とするのであつて、個人責任を以て個人の得はそのもの限り、個人の損はその限りとするけれども、實は個人の損得は家族の損得となり、又、それと同一視することができる。ボーレイ氏は經濟は利己心で行はれて居るとするも、それは個人的利己ではなく、家族的利己であるとなし、*Wer der Egoismus als den psychischen Motor unserer Wirtschaftslebens hinstellt, der muss jedenfalls immer dessen sich bewusst bleiben : nicht der Individualismus, sondern der Familienegoismus* と言つてゐる。

個人主義的法的秩序は(一)私有財産、(二)經濟活動の自由によつて成立する。ミセス氏は個人主義、自由主義を以て *Sondereigentum an den Produktionsmitteln* であるとなし、個人主義的社會は必ず私有財産に立脚する社會でなければならぬとする。恰も社會主義社會が私有財産の廢止を前提とするが如く、個人主義社會は私有財産の分立を前提とする。私有財産

を所有することの自由が個人主義的特質のうちへ入り込む。それ故、私有財産を制限することが既に社會主義に向ふと解釋して差向へあるまい。個人主義經濟秩序にあつては私有財産は神聖であつて不可侵なのであり、私有財産の所有、生産手段の私有に向つては何の制限を加へてならないのである。個人主義社會では個人が勝手に生産と、勝手に交換するのであるが、國家はそれに對し、私有財産制を擁護するのであつて、それによつて、個人主義的經濟活動を旺んならしめるのである。個人主義經濟にあつては私有財産の保持はたゞに個人に對し必要なばかりでなく、社會一般國民一般に對しても必要である。現時の經濟組織を維持するには私有財産制を保持しなければならず、然らざれば、分業と交易との上に成立する現代經濟生活を不可能ならしむるのである。

次に、個人主義經濟に於て必要な條件は經濟活動の自由である。個人主義經濟は自由なる經濟活動によつて始めて可能となる。個人主義的經濟國家にあつても、諸々の口實と方面から個人の自由なる經濟活動を制限することは事實であるが、それでも、國家が事々に個人の經濟的活動に干渉しそれを制限しては個人主義的經濟は成立せぬは明白である。個人主義經濟と經

濟的自由とは必ず隨伴する。

個人主義經濟には社會的國家的生活を享受する自由と消費する自由とが含れる。社會的國家的生活の享受は平時充足されて居り、戦争、革命によつて始めて杜絶せられるのであるから、國民は通常これが享受を重大なものと思つて居らぬ。但し、一朝これが失はれて、社會的國家的生活をなすことができず、また、不安を感じるにいたれば、忽ち該自由享受が重大な關心事となつて現はれてくる。それに、個人主義經濟では收得を以て如何なるものを購ふとも、如何なる消費をなさうとも全く自由で、國家はこれに干與せぬ。ただ、國家が一朝危機に際し戦時ともなれば歐洲大戦當時の如く國家が國民の消費に干渉し日用品消費の制限及節約を行ふようなことはある。併し、これは異常の場合で、個人主義經濟にある限り、國民は自己の所得をどう使ふと、如何なるものに向つて消費しよう、全く干渉主義を採つてゐる。個人を本位とする社會は個人の恣意によつて進み、社會を本位とする社會は中央より指揮命令する社會である。個人を本位とする社會では大體個人の望むが如く個人の欲するが如く生活をなすことを原則とするから、生活に於ても、思想に於ても、信仰に於ても干渉するようなことはない。また

事々に干渉することのできるような中央集權的組織をもつことは、個人本位の社會ではなるべく避けるであらうから、各側面各範圍の干渉や制限は行はれぬことゝならう。現代の個人主義的國家に於ても、諸々の口實をもつて國民生活に干渉し、思想に干渉し、藝術、科學に干渉するが、これは矢張り中央集權的組織が過分な領分を占むる當然の結果で、個人主義組織をよく體現せざるのいたすところである。本來、個人主義的社會は個人の生存と生活とを中心とするから、社會、國家からの干渉をできるだけ減縮し、個人の自由を能きるだけ増大するであらう。かくの如き仕組の社會では（たとへば英國の如き）個人の安寧秩序を保全し、外敵の侵害を防禦する程度以上のことを國家はなさぬであらう。然るに、個人主義的國家でありながら、中央に過大な權力が蓄積さるゝやうになれば、自然、中央より事々に命令し強制することに興味をもつもの又は階級が現はれてくる。如何なる民主主義國家と雖も、ミヒエルの言ふが如く、その實、寡頭主義若くはそれに近き専制政治となるから、政權を掌握せし少數政治家がその好むがまゝに寡頭政治を行ひ、よつて以て専制を事とするにいたる。こゝに中央より命令するものと、命令することに興味を感じるものとが現はれ、個人の自由、國民の自由を事々に制

限する。中央に過大な権力を貯ふるにいたれば、事々に法を濫用し、警察軍隊の實力を用ゐて國民を壓制し、名目は如何に民主的であつても、實質としては專制政治と毫も異りはない。專制政治は多く專制をなす少數政治家の私利とその黨派の私利に向つてなされ、毫も國民幸福に向けるやうなことはない。社会主義社会が專制となり暴壓となる性質をもつのはこれが爲めである。社会主義では、生産消費も社会に統制せられ、中央より指揮命令を發する。生産手段を公有になし、これを個人の自由使用に放任しないのが、生産社会主義であるが、茶碗も本も骨董物も花園も個人から取り上げてこれを公有にするのが消費社会主義である。消費社会主義は民衆の消費に向つて國權を以て中央より指揮命令を發し、それに干渉しそれを制限する。かくて、社会主義社会に於ては生産についても消費についても個人の自由は剝奪され、一舉一動中央の干渉を受ける。中央に過大な権力をもつ社会主義社会では無論全體が有害だと認める思想と信仰と道德とに絶對に干渉して極端なる干渉壓を加へるであらう。かくて、いづくに自由あらん、人間あらん。有るものはたゞ中央より是認せられし土瓶や茶碗の如き器物であり、人間の代りに物がそれに置き換へられる。全體をあまりに強調する社会はその如何なるも

のと雖も、それに占據しそれから利益を受取る少數專制政治家の犠牲となつて、民衆、國民は土塊の如く見做され取扱はれる。勿論生殺與奪の權は少數專制政治家の掌中にあるからその利益に反抗して一般國民の福利を圖るが如き人物と行動とに對しては反逆を以てこれを懲罰し懲罰するであらう。

社会、全體には一定の構造がある。この構造を利用する少數專制政治家はそれをそのままになしを以て自己とその黨派に最も便とするであらうから、この場合、社会、全體の構造は極度に維持せられ、これを動かさんとする國民に對しては如何なる方法と手段とを以てするも懲罰するであらう。社会主義社会はこの種の暴壓社会である。社会主義社会には社会、全體を本位とする一定の構造が固定する。社会主義社会は中央に過大な権力を貯蓄して私有財産を撤廢し生産手段を公有に移すのであるが、かゝる制度に背反するものは極端なる強壓をもつてそれを懲罰するであらう。然らざれば、社会主義社会といふが如き一定の構造をもつ社会は一日と雖も存立することができぬ。社会主義社会は固定する構造をもち、これを固執するであらうから、この社会体内では思想も道德も信仰も一切自由ではあり得ない。いづれも嚴重な拘束を

うけ、社會の許容し命令する以外の思想も信仰も道德も持つことはできない。

現代の個人主義的國家に於ても素より個人の自由は制限されて居る。若し、個人主義、自由主義の標榜が名實共に實にせられたならば、思想も道德も信仰も經濟も個人に對し國民に對し最大の自由が與へられるであらうが、個人本位の社會は未だその純眞の姿で現はれたことは會てない。従つて、個人本位の社會でありながら、自由主義の國家でありながら、現に見るが如く個人の生存とその自由は極めて制限せられたものとなつて居る。若し、社會、國家が全體をまとめ維持するに足る機能をつくしながら、個人の自由を最大なものとなすなれば、茲に、人類界の最大最高の自由問題が解決の緒に就くであらう。

自由主義的個人主義的社會では生産と勞働との自由が確保せられる。個人主義的見地に於ては如何なる職業に従事しやうが、如何なる場所、如何なる工場で働かうが、全く自由とされてゐる。なほ、働くも怠けるも個人の自由で、國家は勞働については凡て個人の意志に放任する。如何なる企業をなすとも是又個人の自由とせられる。消費の自由と、勞働の自由と、企業の自由とは相關々係にある。如何なるものを消費しやうとも自由なれば、如何なる企業をなさ

うとも、如何なる勞働をなさうとも、自由でなければならぬ。消費はたゞ、物價によつて抑制せられるだけで個人の自由に放任されてゐるが、個人が得んとして集中する貨物に對しては任意企業を加減してこれに適合しなければならぬし、勞働も亦需要に従つて任意供給されなければならぬ。それ故、消費の自由と勞働の自由とは相關々係にあるとしなくてはならぬ。

資本主義と個人主義とは兄弟分であるけれども、同身一體ではない。但し、個人主義が如上の形態と内容を以て進んだところに資本主義も進み、資本主義は個人主義の掩護の下に羽翼を張り、今日あるといふことができる。資本主義は個人主義と同一でないけれども個人主義の土壤に成長し發達したものと見做すことができる。

二 合理的經營精神

ゾンバルト氏が資本主義の本質と見るものゝうちには營利主義と經濟的合理主義とが含まれる。ゾ氏の資本主義の本質説は心理主義で、生ける人間がその努力と意志と目的措定とによつて社會的現象を支配するのであり、殊に指導的人間が社會現象を左右すると見る。而して、技

術や、人口運動や、法的秩序の如きものは單に副次的役割をなすに過ぎないと考へるのである。資本主義は心理を以て社會を統制し支配する人間のつくるところで、二つの心理即ち營利に向けられたる意志 (Erwerb gerichtete Willensverfassung) と經濟的合理主義 (Ökonomischen Rationalismus) が資本主義の起因であると見る。資本家的精神と稱するものは營利心と合理主義との合成したものである。

資本主義の目的となるところは營利であり、殊に貨幣の増殖と、其飽くなき獲得及増大である。企業家的氣質と、その飽くなき貪慾とは、貨幣のあくなき獲得と増加とに向けられる。よつて、資本主義は營利心、營利的原則、經濟的權利となつて現はれ、これによつて現代社會に大なる變北を齎らし、現代社會を特徴づけるところの營利經濟組織となつて開展した。こゝに資本主義の眞髓をつくる資本主義的企業が現はれるが、ゾ氏はこれについて Kapitalische

Unternehmung nenne ich aber diejenige Wirtschaftsform, deren Zweck es ist durch eine Summe von Vertragsabschlüssen über gerdwerte Leistungen und Gegenleistungen ein Sachvermögen zu verwerten, d. h. mit einer

Aufschfrage (Profit) den Eigentümer zu reproduzieren と言つてゐる。資本主義は企業の形ちに於て利潤をうることに集中し、その方法たるや、一に合理的なるを期す。資本主義經濟は客觀化され、物の見地より行はれて、生ける人間には何の關係もなきものとなり、抽象そのものとなつて、無限大の活動を期しうるものとなつた。具象を克服して抽象化し、そのために無制限の活動を可能ならしめた。營利心は最初素より具象的な人間の精神であつたが、それが客觀化され抽象化されてしまつた。この抽象化される資本的企業そのものは、それを留意し造つた人間から離れ、企業を獨立なものとなし、それ自づから獨存する經濟生活の運載者として、固有な生命をもつて永續する存在物となつた。こゝに企業はありのまま具象的な自然存在たることから人爲的構成物たる抽象的存在に轉化した。かくて營利心が羽根を生へし、無限大の活躍をなす力を用意した。營利心、企業が主觀的な人間精神に内在し、それと、聯絡をとる間は、その活動は人格に制掣せられて思ふ存分羽翼を張ることができぬが、企業が主觀から解放せらるれば抽象物となり遊離し、無限の働きをなすことができるようになる。非資本的企業は需要によつて生産され、消費のために生産されたが、資本的企業は營利のために生産す

るので、人間の需要や消費とは何の關係なきものとなる。

ゾンバルト氏は經濟制度とは二の經濟的原理を體現するもので、それによつて明かに區別され對立する二の經濟制度が現はれるとなす。二の經濟原理とは需要經濟 (Bedarfsdeckungswirtschaft) と營利經濟 (Erwerbswirtschaft) とである。こゝでゾ氏が經濟制度と言つて居るところのものは (1) von einem bestimmten Geiste beherrscht; (2) eine bestimmte Ordnung und Organisation hat und (3) eine bestimmte Technik anwendet といふことである。一定の精神に基く資本主義經濟はその精神の邊よりは具象的經濟現象を呈露し、よつて以て、具象的な歴史現象によつてそれを特徴づける。

資本主義經濟と稱するものの中には、幾つかの要素、即ち、心理的要素と、經濟的技術的要素と、經濟政策的要素とが混入して居り、其心理的要素なるものは、(一)營利的原則、(二)經濟的合理主義とであるが、こゝに、心理的規範的要素 (psychologischennormative Elemente) と稱すものは、(一)營利的原則、(二)自由競争の原則 (Konkurrenzprinzip) (三)經濟的合理主義の三を併せ含む。その外、經濟的技術的要素が加はるが、これは、諸々の人口的集

團の交互關係、市場によつて交互關係にいたるべき生産手段の所有者、企業家、労働者、現代の産業的革命を齎らせし器械である。經濟政策的制度なるものは私的交通經濟組織である。但し、この中、ゾ氏の資本主義の本質を形ちづくるものとして、重きをなすものは心理的要素である。心理的要素のうち重要なのは無論營利的精神と經濟的合理主義とである。

資本主義經濟は營利を目的とする外何ものでもなく、營利なきところ資本主義も亦ないと考へられる。資本主義は無制限にして飽くことを知らざる貪慾の表現であると見られる、こゝに、貨幣獲得を主たる活動とする特殊なる時期が出現した。

次に、資本主義の特質を形ちづくるものは合理主義であつて、合理主義は資本主義固有の方法となつてゐる。合理主義によつて、算盤的經濟 (Rechenhaften Wirtschaft) がつくられるが、マツクス・ウエーバア氏に據れば、算盤經濟はカルビン主義の産物であるといふ。ウ氏のいふが如くカルビン主義は算盤經濟をつくるに與つて力あつたであらうが、それと共に、その他の要素も亦これに加はる。Tostock氏は合理主義はカルビン主義をその一要素とするも、それよりも絶對人道主義と人間の獨立自尊とに關する一般的精神進化の方が餘計にそれに影響を

與へたとして K. Esckweiler 氏を引いて Die absolute Autonomie entweist die menschliche Wirtschaft zu einer Funktion des unendlichen Prozesses....der unendliche reine Betrieb ist der actus purus des technisch ökonomischen Wesens und das ens perfectissimum des Maschine ist das reibungslose Funktionen. Der industrielle Mensch ist nichts als Funktionär der ökonomischen Rationalität, die alles und absolut ist と言つてゐる。その上、現代の國家や經濟の指導者達は計算に習練し、意識的に計算の技術を縦横に進めたから、資本主義經濟に都合のよい事情をつくり、それを發達せしむる途を用意した。計算の習練は營利の手段として用ゐられたが、計算そのもの發達が合理主義に負ふところ多いところから合理主義は又營利主義に加擔し、それを取り進める役割りをつくした。

資本主義の發達は自然科学の發達と氣脈を通ずるものがある。科學精神として正確に客觀的に對象を分析することが流行し、そこに一切を量に還元する自然科学の方法が設定された。素より、實在は數學的に取扱ひうるが如き貧弱なものではない。歴史的存在たる科學現象を數學

的に取扱ひ、それを悉く正密科學に還没せしめようといふ企ては歴史の本性に通ぜざる無謀なる企畫である。存在は質によつてある。實在としては一も繰り返へすものなく、同一なるものがない。よつて、豐潤無比の色彩をもつ實在の質を帳消しにして、これを量に換算するなどいふことは絶対にできるものではない。但し、現代科學的精神なるものは、一切を量に還元することに力め、そこに始めて正密科學と稱するものが出來上るように思ひ做すのである。量が一切を征服したといふのが現代の特徴である。藝術にどれ程の價值があるかについては、沒趣味なる經濟活動、産業活動、算盤活動をなし居る現代人にはよく分らない。たゞ、藝術の價値は金に換算され翻譯されて金額に相當する價値を付することによつてのみ了解される。人間の價値も亦その收入に換算されてわづかに評價をなし得るのみで、現代人は質的見方に關しては低能であり、唯量的見方に鋭敏なるのみ。資本主義を發達せしめたものも世相一般と相通ずる數學的精神の表現である。

かくて、資本主義を成立せしめたものは計算的精神であり、合理的主義であり、科學的精神であるが、特に現代文明一般が量的世界を開展するにいたつて、茲に資本主義が偉大なる發展

をなす土壤が用意されたのである。

三 世間的 精神

中世紀の末葉より教會は科學と藝術の淵源たり淵叢たる位置を失つた。教會の支持した天動説は天文學者の發見によつて覆され、それに代つて地動説が確立した。教會が如何に近代に勃興せし科學の鋒先を抑へんとしても、教會の迷信は腐木をくたくが如く破碎された。最早、教會は科學の前に何の權威もなく叩頭するを餘儀なくされた。こゝに、教會は科學と藝術とに對する支配權を喪失した。積極的知識の要求は根據のない徒らなる想像や要求によつて打ち立てられたる諸々の氣休めの迷信を破折しつくし、科學と宗教とは一と先づ袖を分たざるべからざるにいたつた。但し、その後、科學と宗教との分界は一層明確となるにいたり、知識によつて開拓される領野と、信仰によつて體驗される分野とは異ふことが分り、科學と宗教とは兩立するをうるにいたつた。こゝに於て、實在を把握する方法は二となつた。知識と信仰と。

中世に於て、宗教が後退して教會が權威を失墜すると共に、現世觀が擡頭して來た。文藝復

興期には希臘の現世的な享樂主義が開拓され、未來の天國を憧憬して、そこに悅樂を欣求する代りに、現世を享樂するようになつた。マキアベリイによつて要求せられたのは教權を脱して國家の自由と政治的權力とを打たてることであつたが、この場合、提説は漸次人民の間に普及し、それに伴ふて教會の勢力はちよまり、民衆に對してその固有の威容と威嚴とを失つた。これに代つて、俗權が漸次に教權を驅逐し、ために、教會の俗界に對する發言權を遞減して行つた。カルビン説が資本主義の前に横はる障害を除去しその途を開いたのは、それによつて舊教を世俗化し、迷信を排除して、世界を合理化したからである。マックス・ウェバア氏やトレルチ氏の研究によつて、カルビン説や新教の倫理によつて宗教の世俗化した次第が明かになつたが、それ等の契機を通じて、宗教の彼岸遙かに逍遙せし超世間的思想は世間化されて現世的となつた。これが資本主義の發達すべき土壤を用意したのである。

その上、自然神論 (Deismus) が宗教の迷信や超自然的思惟を追放した。これによつて、超自然的思惟は自然的思惟に組み改められた。超自然的信仰や彼岸の超越界は自然法則の支配する世界に置き換へられ、天啓など超自然的思惟は去つて、それに代つて器械的自然主義や唯物

論が旺んになつた。かくて、益々、教會は俗界より驅逐せられ、尙ほ、宗教そのものゝ土臺をも動搖するにいたり、自然の法則が横行濶歩するにいたつた。殊に、この間、自然科学の發達あり、發明發見相次いで起り、基督教の限りなくつけ纏はれて居た迷信は一つ／＼破碎され、教會は見るも哀れに打ちこわされた。十九世紀の末葉に公にされしヘツケル氏の「宇宙の謎」や「自然創造史」はその消息を物語る斷片たるまで、科學は宗教の教理と信仰とを蔑視し、超自然的思惟は見るも無殘に打ちのめされた。それまでは反科學的人間中心説やアニミズムの蔓る餘地があつたが、科學が大步入來してからは、宗教の氣休め的な迷信は遠慮なく破壊せられた。自然科学の宗教破壊も行くところまで行つてその界限に達し、宗教固有の領域はその儘残つたが、それまで宗教をめぐつて存せし諸々の迷信は一掃されて了つた、自然科学は一切を量に還元した。超自然力の代りに自然力の支配が明示せられ、世界は物理的化學的法則の支配するところとなり、純粹因果的科學が入來して益々世界を量化し、それを因果法則の下に持ち來した。そこに正密科學としての自然科学と、その方法とが一切を支配するが如くに思はれた。

超自然的世界は自然世界の支配の下に委ねられ、それが一般民衆に普及し、その行動を支配

するにいたり、一切は自然化の方向にをむき、相次いで物質化して、物質萬能の世界を開展した。超自然的世界が自然的世界たるにいたり、物質が人心を支配するようになり、これに従つて經濟が人間活動の王座を占むるにいたつて、マルクスの所謂唯物史觀の世界が開展された。こゝに、三度び資本主義の繁昌する豊饒なる土壤が用意せられた。

四 社會的經濟的要因

マックス、ウエーバア氏は猶太人と資本主義との關係を論じて居るが、猶太人の商業的活動と、その貯蓄と金貸とによつて資本主義の成立が助長せられたのは言をまたないであらう。今日、資本主義が世界を風靡し支配すると言ふが、然らば、資本主義の權化たりその先達たる猶太人が事實世界を支配するといふも過言ではないであらう。猶太人は一手に全權を握つて、世界の商權を支配するとすれば、それによつて、資本主義が促進されたと考へるに何の無理もないであらう。商業は資本主義を促進するに與つて力あつた。商業が資本主義を促進したとすれば商業と資本主義とは同身一體であつて、商業の本質は資本主義の本質とも思はれるであら

ろ。たゞ、かくの如き言表はあまりに事理を誇張するものではあるが、これによつて商業と資本主義とが聲息相通ずると見ることができらるであらう。商業によつて集積されたる貨幣は資本的企業に用ゐられ、これによつて又資本主義が促進せられたであらう。

ブレンタノ氏に據れば、十字軍によつて資本主義が促進されたことは少々でない云ふが、十字軍によつて、各地の來往と交通とが瀕繁となり、その結果として資本主義の前進が容易になつたと見ることができらるであらう。陸地の發見、殖民地より齎らさるゝ貨物、それによつて、一般に消費が民衆の間に普及し消費が民主化したことなどは確かに資本主義の前進を促したであらう。されど、資本主義に著明な影響を與へたものはマアカンチル主義國家の貨幣政策及工業政策であらう。マアカンチル主義國家は政策として貨幣の流通を盛ならしめたので、流通經濟が發達し、國民をして商業的氣分に充溢せしめた。次に資本主義を膨張せしめしものは軍隊組織であり、巨大なる兵器を供給する必要上資本主義の前進を都合よくした。歐洲大戰は軍需品供給商の操るところであるなど、言はれたが、文明國を通じ夥しき軍需の需要は資本主義の勃興に與つて力ありしは明かである。併し自然科学の勃興とその發達とがなかつたなれば、資本

主義はその羽翼を延ばすことができなかつたであらう。如何に殖民地の發見があり、大なる人口を放出して、巨大なる物資を供給しなければならぬとするも、工業の發達なく、製造工業に要する技術の發達がそれに伴はなかつたなれば、大規模生産は不可能であり、家内工業以上に進出することはできず、従つて、工場生産も不可能であらう。かくの如き状態に於て、資本主義の發展あるは期待しがたいから、資本主義をしてその羽翼を張る手段となり、その従僕となつて、主人に忠勤を勵んだものは自然科学とその應用とであるといふことになる。それに、自然科学の發達は再び交通機關の發達整備ともなり、ついに世界的經濟活動の舞臺を用意した。但し、資本主義をして世界に活躍せしめんには尙ほ金融制度の完備を要する。ゾルバント氏はこの點に重きを置き、企業的大生産即ち工業主義の發達には先づ現代的技術と金融經濟とを要したのであると言つてゐる。

五 資本主義と文化

資本主義は西洋文明の所産と見ることができよう。その社會的原因、その經濟的原因を總和

するところの西洋文化の *Gesamtenwicklung* として固有な資本主義が発現したと見ることが出来るであらう、それ故、資本主義が現今見るが如き社會的害悪を滋生したからとて、これに對し直ちにその後退を命ずることはできない。資本主義は人爲故造せしものでなく、社會的進動が自づから生産せしものであるから、その善悪如何に拘はらずこれを認識し受納する外はない。資本主義だけを嫌忌して、これを排除せんとしても、それは全文化の一要素をなすまで、全文化を打壊しなければ資本主義もその姿を收めない。然るに、社會的進動の結果現はれたる全文化に退却を命ずるなどいふようなことはできるわけのものではなく、その中の一要素として現はれ來りし資本主義が如何に好ましくないとしても、これに對して一指を染め得るのではない。資本主義の發生、發展、今後の運命に關しては全文化に開聯して眺め且つ考へなくてはならぬ。

十八世紀にいたり、資本主義が出現したのは、經濟生活に於てそれを促進するが如き事情が発生したからであり、それに伴つて、前代未聞の怪物たる營利主義の權化としての利己的資本家たる一團が現はれたのである。資本家は大胆で無謀で無道德で、たゞ計算をふりまわすに巧

妙なる器械である。かやうな非人格的集團が十八世紀以來、歐洲の天地の牛耳をとるにいたつたのである。資本家はたゞ金の奴隸であり計算狂たるまでである。この怪物は十八世紀以來の科學的技術的發展と社會的進化とに隨伴して現はれてきた。尤も、學者により研究家によつて科學的技術的契機と社會的契機との何づれかに重きを置くが、科學的技術的契機に重きを置くものは自然科學と技術との發達によつて資本主義が現はれたと見る。たとへば、デイーチエル氏は技術に重きを置き。 *die Ursache des gewaligen wirtschaftlichen Fortschritt der Moderne die Revolution der Technik war……die Bedingung fur die Revolution der Technik die Revolution der Gesellschaft bildete* と言つて居る。いづれにしても、資本主義は科學的技術的發展と社會的進化の所産である。こゝに資本主義の開展すべき理想的な土壤が用意せられた。技術は資本主義生産を可能となし、合理的營利主義者をして其活動を無制限ならしめ、その貪慾と惡辣とを以つて經濟的征服を斷行し天下を蹂躪せしむるにいたつた。それに、生産に要する勞働力の供給者としてのプロレタリアートを自由に供給される地位にをかされた。資本的生産には勞働の資源が用意されなければならず、従つて、平時に於て勞働の遊軍

を豫備しないような資本的生産は考へ得べくもない。生産に不用な労働力は一時的排除して、それを要する時期まで保存しなければならぬ。生産多忙となるや、かゝる労働は再び吸収せられる。こゝに資本的生産に労働の豫備隊の必要なる理由がある。然らば、資本主義の成立には夥しき労働の遊軍——最も好景氣時四%より最不況時の四五%程度の——を前提とするから、資本的生産には先づ労働供給の資源が豫備されなければならぬ。それに對しても、十八世紀以來都合のよい事情が現はれた。個人主義の面影は男女の關係にまで波及した。これまでの不自由社會は去つて、男女は個人主義の信條をふりまわして思ふがまゝ自由に交驩することができた。結婚は個人の自由なる權利と考へられた。そこに、男女の自由なる結婚があり、子供を欲求する情が発生し、人口は遽かに増加するにいたつた。それに資本的生産の結果としてのプロレタリアートの貧困化も亦人口を増加する手傳となつた。資本主義の發展につれ、プロレタリアートの境遇は急に悪くなり、悲惨なる状態を現出したので、全く絶望状態となり、家政を維持整頓する念を失ひ、遠慮なく多産に傾いて行つた。そこに、資本的生産に要する労働力は用意せられ、技術の發達と相まつて、資本的生産を可能となし、資本主義の前進を促した。

かくて、資本主義は西洋文化の總括的進化の結果として入來し成立せし所以を知る。

六 資本主義の本質

資本主義は如何に限定すべきや、その概念は如何。この問題に解答を與へ、その本質を結晶沈澱せしむることは決して容易ではな^ス。イヨストック氏は *Der langjährige Streit um den Begriff Kapitalismus, seine wissenschaftliche Anerkennung oder Ablehnung, ist heute endgültig entschieden* と言ひ、資本主義の概念は決定せられたやうに考へて居るが、事實、資本主義の概念限定も百種以上あり、學者によつて異なるのでイヨストック氏の如く簡單に形付けるわけには行かな^ス。Passow 氏によれば *Vielmehr 100 mehr oder weniger abweichende Begriffe zu unterscheiden* と^スふ流儀で、いづくにも諸家の一致せし資本主義の定義なるものはない。そして、何が資本主義であるかは銘々勝手に考へてをけば宜いわけで、資本の定義の百五十種以上に比し決して資本主義の限定も容易ではない。なほ資本主義の限定にはシェーラー氏 (Scheler) の^スふが如く、經濟の外、倫理、宗教、藝術にもわたらな

ければならぬとすれば、愈以て資本主義を限定することは困難になる。シエーラ氏は資本主義の限定には経済が中心であるけれども、それは経済以外、現代生活の全局面に及んで居り、ein ganzes Lebens- und Kultursystem を含むのであるから、経済的な見地によつて限定するを以て足れりとせず、更らに、生活全體に及ばなければならぬとする。

資本主義の研究に半生を費やせしゾンバルト氏は最も明かに資本主義の本質を露出したと言はれようが、氏の概念限定は心理主義である。すなはち資本主義に内在する精神の開展するところに資本主義が現はれ、その眞髓が作り出されるとなす。ゾ氏の資本主義精神と云ふところのものは營利に向けられたる意志と経済的合理主義の合體するものである。これによつて、ゾ氏の概念限定が心理的契機に重きを置いて決定せられを知る。就中、營利心がその中心をなす。資本主義経済の中心は營利にあり、貨弊の獲得にあり、限りなき營利を追求するにある。それが資本主義の資本主義たるところであるとゾ氏は考へてゐる。但し、十八世紀以來、遽かに資本主義精神が導入せられたと解するには幾多の困難があり、資本主義は單に Gewinn, Geldgewin, Gewinnstreben, Erwerbprinzip, Unternehmungsgarung と云ふやうな心理的契

機で十分説明しがたいやうに思はれる。ゾ氏によれば、營利心と合理主義とは營利的動向にまとめられて、無制限なる活動をなすのであるが、然らば、營利心の根本は動向 (Trieb) であると言はなければならぬ。營利心は動向であるとすれば、それは生物學的に遺傳するもので、社會遺産として傳達するものではないと見なければならぬ。もし、ゾ氏の如く營利を原形質に巢くふものとするれば、突然それが十八世紀にいたり出現したとするは理解しがたきことである。ゾ氏は人間が経済を造つたので、反對に経済が人間を造つたのでないと考へる。これに従つて、ゾ氏は營利心が資本主義の原因となり、それを造つたのであるが、當時の社會經濟事情とその發展とが資本主義をつくつたのではないとする。これに對し、クンプマン氏は何處から近時急に高まり來りし營利心なるものが突然現はれて來たか、その反對に營利心は環境の促進によつて前よりは旺んなる活動をなすと考へ得ないかと言つて、根本的動向 (Utrieb) としての營利心を排斥し、これを社會の經濟事情の發展による現實的説明 (die realistische Kapitalismusdefinition) に歸入せしめた。マックス・ウェーバー氏は現代が前代より多大の營利心をもつなどとするのは、子供だましたと言ひ *das unsere rationalistische und kapital-*

stische Gegenwart einen stärkeren Erwerbstrieb besitzt als andere Epochen, ist eine kindliche Vorstellung」と言つてゐる。本能としては營利心が突然十三世紀頃より出現して、それが現に見るが如き程度に發達したとするのは聊か失當であり又滑稽でもあらう。但し、ゾ氏の心理的解釋は無雜作に斥くべきではない。人間の行動を制しその活動を形ちづくるものは本能である。よつて、營利心といふ人間のもつて生れた根本的動向が特殊な經濟生活を發展するに參加したとするは決して不適當ではない。營利心は原始以來存せし人間の根本的動向であつて、現代人がそれに支配せられたように、原始人も亦それによつて動かされたのである。如何なる人種、如何なる時代の人間と雖も貪慾ならざるはなく、營利心のないようなものはない。貪慾、營利心によつて總ての時代の人間、すべての人種が支配されたとするに何の不都合もない。従つて、ゾ氏の營利心を以て人間の生物學的に遺傳する形質に根據を置くとする説はウエーバー氏の罵倒するが如く決して子供だましなものではない。たゞ、一切の本能、動向がそれであるやうに、營利心も亦環境、特に社會環境によつて變形せられたとしてそれを訂正すれば足りる。然らば、外界の事情が營利を極度に煽動するが如き近代現代に於て、それが無制

限なものとして開發し、然らざる時期に於て屏息したと考へてをけば宜い。營利心は貨幣經濟の開發に伴ふて現はれて來たものである。營利心は無制限なる資本主義精神の出現以前にあつたとしても、貨幣經濟やその他營利心の開發に都合のよい事情が發生して急にこれに拍車を加へて發展せしめたと考へてよい。従つて、これによつて、心理的原因としての本能的營利心を打破するには足りない。たゞ、向きに叙説せしが如く、近代にいたり、西洋文化の進動が資本主義を可能となし、この發展に都合のよいものとなつた爲め、根本的動向としての營利心が横行濶歩するにいたつたまである。營利心が原因であるか、近代文化が原因であるかといふよくな詮穿は無益であり無効であらう。遺傳と環境とのどちらが原因であり、どちらが結果であるといふ詮穿と同じく、それは無効であり又滑稽である。それ故、クンプマン氏の如く Das objektiver Gewinnstreben…… Folge nicht Ursach der neuen Wirtschaftsweise と云ふような言ひ方も決して正確ではないであらう。それよりも、營利心と文化とは互に原因と結果となりつゝ兩々交互關係によつて發達して來たといふ方が妥當であらう。貪慾なる人間は資本主義時代にいたつて突然現はれ來つたのではなく、いつの時代にも必要以上の物質、財寶を

集積し、營利のための營利といふが如き無意味な蓄財をなす怪物は存在したであらう。營利心がいつの時代にも存在して居たといふことが却つて資本主義をして可能ならしめし所以である。何となれば、無より有は生ぜずで、營利心のないのに、如何に外界の事情が可となつても、十八世紀以來資本主義が旺盛となつて現はれる道理はない。人間が貪慾でなく、必要以上貯蓄せぬ生物なれば、資本主義的文化が如何に旺んなればとて、無制限に貪慾に拍車を加へるが如き營利心は發現しなかつたであらう。ウエーバア氏、ペロー氏、ブレンタノ氏、ベツケラス氏、エツケルト氏、クンブマン氏等の反對にも拘はらず、私はゾンバルト氏の心理的原理に尙ほも大なる價值を認める。營利といふ現象は動向としての營利心とそれを促進開展する文化の合成するところであると私は思ふ。たゞ、ゾンバルト氏は根本的動向のみを挙げ、反對者はたゞ文化のみを挙げて、兩々片手落ちのところに失當なる立論が行はれるのである。

この場合、外的條件の發生あり、これによつて資本主義經濟がその他の時代には發生せずして、近代にいたつて發現したと見ればよいであらう。パソウ氏の如く心理作用を全く除外して、たゞ、外的作用のみによつて資本主義が發生したとするのは正しくない。パソウ氏の如

く das ganz andere Vorbedingungen gegeben sind, das ganz andere Möglichkeiten des Erwerbs vorliegen, das dadurch den menschlichen Streben eine andere Richtung eine andere Betätigungsmöglichkeit eröffnet wird, das dann in und mit dieser anderen Betätigung der Mensch sich wandet das neue äusere Verhältnisse neue wirtschaftliche Möglichkeiten, auch neue Zwecksetzungen wachrufen と言つて、資本主義發生を主として外的影響に歸することは誤りではないが、たゞ氏がこれを内的原因から分離して、外的條件のみが資本主義發現の原因であると見るところに謬想が生ずる。外的原因と内的原因とについては、分量的に一が他に勝れて居てもそれによつて直ちに分量の勝れて居る方が眞の原因であると思ふわけには行かない。それ故、ボーレ氏の如く營利心は資本主義の小さな原因、外的形勢が大なる原因とするが如き説明は事物の性質を正視せざるものである。人間に於ける遺傳と環境との關係は分量的には、いつでも環境の方が大なる原因となつて居り、遺傳の方が小なる原因となつて居るが、質的見地に於てはそれに反す。如何に外的影響が大なるにせよ、原形質に於て劣れる低能、白痴に對し、教育を以てこれを能才、天才につくり變へる

ことはできない。質的見地に於ては寧ろ形質の方が大なる原因であり、環境の方が小なる原因である。資本主義に於て、營利心と文化との關係を論ずるものは、一層、生物學進化學に於ける素質と環境との學理的考察に熟しなければならぬ。心理的契機はすべての時代、すべての人種に共通で均等なるが故に、營利心、權力欲、企業心が資本主義を造るにあらず、具象的な社會的技術的形勢が資本主義を發生したのであらう。但し、これはたゞ量的見地によるもので、質的には寧ろその反對が正しいであらう。要之、心理的なる營利心と社會經濟的な文化との合

成するところに近代現代特有な資本主義が發現したとするのが最も穩當な説明であらう。最早、資本主義を一義的に決定しようと叫んだイヨストック氏は資本主義の本質をかくの如く限定してゐる。

1. Es wird gewirtschaft zum Zwecke des Erwerbs durch Austausch.
2. Die Produktion vollzieht sich nur durch des vertragsmäßig geregelte Zusammenwirken zweier Gruppen, deren eine im Besitz santhlicher erforderlichen geldwerten Güter ist während die andere lediglich ihre

persönliche Arbeitskraft besitzt und einschließt.

3. Die grundsätzliche Möglichkeit, das jede dieser beiden Gruppen als organisatorischer Wilde die andere in Dienst nimmt und dann die Wirtschaft nach eigenen Gesetz und Interesse ablaufen lässt, ist faktisch zugunsten der Kapitalbesitzer entschieden.

イヨストック氏は資本主義に謂ふ資本を以て生産資本 (Produktionskapital) にあらずして、營利資本 (Erwerbskapital) のことであると見る。資本の限定も亦多義で、一義的に決定することは困難である。イヨストック氏の鋭く限定したる資本とは營利資本のことである。この場合、イヨストック氏は資本を營利資本のことだとして、第一項に要約するが如き限定をなしたが、氏は營利資本に關係さして始めて資本的 kapitalistisch といふことが言はれ、資本主義は收得 (Gewinn) を目的となし、たゞ、これによつてのみ運営せられるものであると言つて居る。氏は技術の如き外的方法によらず經濟の内的特質としての思惟を以て表示すべきであるとする。かくて、イヨストック氏は資本主義の特質は營利によつて形ちづくられると見る。營

利を目的とするもの即ち營利資本である。資本主義にいふ資本とは營利資本のことであつて、生産資本のことではないとする。生産資本の下には生産するところの生産手段と直接消費するにあらざる生産物にして、再び生産をなすに役立つものを含める。但し、資本とは *dieser zweite, von Erwerbkapital abgeleitete Begriff der einzig richtige ist* で、イヨストック氏は資本主義にいふ資本とは營利資本のことだとする。生産資本は原始社會より現代の器械文明時代のもまでを含むので、現代資本主義の特質をなすものではない。その上、資本主義の何であるやを限定するには、資本と労働との機能的關係をも取り入れなければならぬとして、イヨストック氏は第二、三項に要約するが如くに解釋す。かくて、氏の資本主義の限定は終るのである。

營利資本を以て資本主義にいふ資本であるとするものはイヨストック氏の外にバツソウ、ゾンバルト、マツクス・ウエー氏などである。

併し、資本主義にいふ資本は不相變生産資本を指すと解すべきであらう。生産に参加する資本、生産資本、生産する資本は生産に於て自然と労働との外に分立するとするを避くることは

できない。生産資本としての資本は近世の成立で、ゾンバルト氏が言つたように、「資本は資本主義に入つてから出現せしものである」といふのに調子を合せることができる。器械の形ちに於ける資本は近代の出現で、これによつても、生産資本は如何なる時代にも存するとする意味を制限して、それは近世の産物であるといふことにしなければならぬ。これについてクンブマン氏は *S. 4* ' kennzeichnend in höchsten Grade ist die Kapitalverwendung -

Kapital = Produktionskapital — aber erst für die Wirtschaftsweise der Jungsten

Zeit. Da gewinnt das Kapital (Machinen) so sehr an Bedeutung, wird es in

so weiten Umfang zum beherrschenden Produktionsfactor, das es durchaus

berechtigt ist, gerade diese Produktionsweise als kapitalistisch und diese neueste

Zeit, und nur, sie als Zeitalter des Kapitalismus zu bezeichnen. かくて、資本主義

にいふ資本を以て生産資本のことであるとすれば、普通「自然經濟」「労働經濟」に對して「資本經濟」が用ゐられ、自然と労働と資本とが生産要素として見られることとなる。

そこで、現實な姿で示現せらるゝ資本主義は生産資本のまわりに、器械によつて運営せら

れ、大規模經營となつて現はれ、分業によつて支配せらるゝものであるといふことになる。

現代資本主義が生産資本のまわりに回轉するものなることは既に明かになつた。個人主義時代が進展し、その上、人口が増加して、内外共に資本主義の發展に都合のよい状態が生じた。向きに述べしが如く、資本主義の出現は西洋の特殊な文化の過程による。その間、自然科学の研究は盛となり、發明發見相つぎ、自然法則を適用することが可能となり、科學によつて人間は自然を制禦し統制することができるようになつた。こゝに、自然科学の産み子として技術が出現した。そして、技術を生産に適用するにいたつて、俄然、資本主義の進展に都合のよい事情を生じた。自然科学の發達によつて器械の發明となり、人力、動物力を驅逐して、器械がそれに代り、大規模生産を可能とした。器械文明の名稱が近代現代に當てはめられるが、突然器械文明が天から降つて來たわけではない。それも亦前代から徐々として發達し來り、器械文明の特徴を表はすようになつたゞけである。この場合、突然なる變革によつて器械が導入せられたのではなく、不相變、徐々微小なる變化を積み重ねて器械が現はれ、器械文明が入來したものである。工具から器械へ漸進的に移動したまで、突然、工具が器械となつたわけでない。

よつて、兩者を截然と區別する見方は失當であらう。器械の發達と前後して分業が成立した。器械の過程が漸次簡單な部分的のものとなり、それを受持つ労働者は部分を擔當する器械人よ化し、最早これまでの如く全一としての人間たることはできず部分人器械人としての人間となつた。かくて、資本主義の特徴は益々明かに具備せらるゝにいたつた。

資本主義は益々合理化して行つた。技術と器械と分業とは前後して現はれ來り、資本主義の特徴となつたが、技術をつくつた自然科学は又資本主義の特質たるべき合理主義を促した。自然科学に於ては無論因果關係によつて科學的合理主義を造り出したが、科學的合理主義の基礎に立つて現はれし資本主義經濟は又合理主義的のものとなり、茲に科學的合理主義に對して經濟的合理主義なるものが現はれて來た。自然科学の方法を用ゐて經濟を運營することによつて、現代資本主義に特有なる合理主義を打開したのである。これによつて、生ける自然 *Lebendigen Natur* としての前代の經濟は人爲故造のものとなり、遽かに急進する能力を獲得した。次に技術、器械、分業、合理主義は相合して大規模の産業へと向つた。こゝに於て、大規模經營 (*Grosbetrieb*) が出現した。かくして、資本主義が特徴づけらるゝにいたつた。小規模

な手工業や家内工業を驅逐して大規模なる産業が現はれ、大規模經營をなす商業、工業、銀行業が現はれ、これが海陸を併合し、世界を股にかけて横行濶歩し、世界を一手に領有するにいたつた。こゝに、資本主義は大規模經營として、市場生産として、大量生産として、器械主義として、大企業として、工業主義としての特徴をもつにいたり、益々その特質と形態とを整へしを見る。かゝる資本主義化はゴツトル氏に従へば一七五〇—一八五〇年の一時期に行はれたものである。

これによつて、現實的、乃至、經濟的歴史的に見て資本主義が漸次その特質を結晶し沈澱し來りしを知る。それは科學の發達によつて合理化し、技術の出現となり、器械の出現となり、分業と大經營との出現となつた。資本主義は自然と労働と資本との組み合わせに於て、自然經濟及労働經濟から益々資本を加重し濃厚にして、資本經濟に轉化し、資本主義たるの特質を鮮明にするにいたつた。

現實的な資本主義限定は現實的な發達によつて資本主義の本質をつくさんとするものであるが、クンプマン氏は現實的限定は現實經濟的發展の過程を分析解釋するにあたり、幾分マルキ

シズムに似て居り、*Darstellung stimmt also mit der marxischen Betrachtungen in vielen*

uberein であるが、それと共に兩者の間には顯著なる差異があるとして、それを三に要約し

て居る。第一、マルキシズムは現實的解釋によらずして、唯物的解釋による。マルキシズムは人間の全歴史生活を解釋するに物質的生活の生産方法 (*Die Produktionsweise*) のみにより、技術による進化に一切を還元し、それから上層構造たる宗教、哲學、科學や法的乃至政治的機構が形ちつくられるとなす。これに對し、現實的解釋にいたつては唯物一元論は資本主義に適用すべからず、資本主義の發達は唯物史觀的に解釋すべからずとする。資本主義の成立には唯物的的制約が行はれるのみならず、理念的要素が参加し、ゾンバルト氏の營利心といふが如き心理的要素も加はるので、その成立には物質的乃至理念的なる幾多の要素が参加するものと解釋する。第二、マルクスにあつては、たゞ經濟的方法 (*Wirtschaftsweise*) が用ゐられて居るだけであるが、それが經濟制度 (*Wirtschaftssystem*) にも用ゐられて混同されてゐる。但し經濟的方法と經濟制度と經濟秩序 (*Wirtschaftsordnung*) とは異つて居る。この三者は彼此關係して居り、獨立ではない。經濟政策 (經濟秩序) は上部機構の一部で、全く經濟方法に

制約せられてゐる。これはマルクスの言ふところの如くであるが、但し、経済秩序そのものは分離獨立することができ、その概念に於てもその事實に於てもさうである。第三、マルキシズムは倫理的解釋によつて價値をいれて居る。マルクスによれば資本は事實であるよりも、それを通じて人類間の社会的關係を豫想し設定する。餘剩價値は單なる經濟現象にあらず、労働者を掠奪する手段だと見る。それ故、マルキシズムにあつては資本主義は單に記述されるだけでなく、同時に判斷される。資本家の増加と共にたえず利權が收奪され獨占され、壓制、奴隸、困窮の増大するといふように價值的解釋が加へられる。これに對し、現實的解釋は單に資本主義を經濟現象と見て、事實によつて取扱ふだけで、無價値なる判斷である。

要之、現實的限定としては資本主義が實現の姿で現はれるまに／＼に解釋を施す。資本主義は生産資本によつて進展し、器械の出現となり、分業となり、大經營となつて現はれる。人口の増加によつて労働力の供給が可能となり、生産の資源を具備するにいたる。自然科学の發達あつて neue Technik としての技術が現はれ、これと共に器械と分業とが現はれる。分業と共に労働は簡易化され、婦女子の労働をも可能とした。更らに器械の導入によつて、人間と人間

力とが排除せられた。但し、資本主義は技術によつて進展せしのみならず、それは又、濟經的合理主義といふが如き經濟的理性によつても前進した。それと共に、分業と新器械とは大經營を可能となした。資本主義時代は又工業時代であり、工場を中心とする時期であり、大企業の時期である。更らに、資本主義によつて大量生産となり、市場生産となり、器械化となつた。

かくの如く、資本主義は現實的に發展したが、その運命は既に行き詰つたと言はれるに反し、未だ餘裕綽々たるものがあり、更らに、今後も發展を繼續するものと思はれる。通常、資本主義は倫理的判斷によつて害惡の方面のみを觀られるが、資本主義の人類に與へたる鴻益も亦無視することはできない。

参考文献

1. Passow, Kapitalismus, 1927.
2. Weber, M., Gesammelte Aufsätze zur Sozial- und Wirtschaftsgeschichte, 1924.

3. Troeltsch, Gesammelte Schriften, 1922.
4. Briefs, Das gewerbliche Proletariat. Grundr. d. Sozialök., 1:25.
5. Sombart, Die Quintessenz des Kapitalismus.
6. Scheler, Versuch zu einer Soziologie des Wissens, 1924.
7. Brentano, Die Anfänge des modernen Kapitalismus, 1916.
8. Sombart, Moderne Kapitalismus, 2 Aufl.
9. Sombart, Der Bourgeois, 1913.
10. Strieders, zur Genesis des moderne Kapitalismus, 1925.
11. Strieders, Studien zur Gechichte kapitalistischer Organisation. 1926.
12. Kampmann, Kapitalismus und Sozialismus, 1929.
13. Jostock, Der Ausgang des Kapitalismus, 1928.
11. Pohle, Kapitalismus und Sozialismus 1923.

15. Sieveking, Grundzuge der neueren Wirtschaftsgeschichte von 17 Jahrhundert bis zur Gegenwart, 1921.
16. Oppenheimer, Grosgrundigentum und Soziale Frage.
17. Weber, Wirtschaftsgeschichte.
18. Diehl, Bemerkungen über Begriff und Wesen des Kapitalismus, Jhb. f. Gesetzgeb., Verw. u. Volksw., 44 Jahrg., 1920.
19. Sombart, Die Ordnung des Wirtschaftslebens.
20. Sombart, Prinzipielle Eigenart des modernen Kapitalismus, Grundrds der Sozialökonomik, IV. Abt., I Teil, 1925.
21. Mayer, T., Wesen und Entstehung des Kapitalismus, Zeitschrift f. Volkswirtschaft und Sozialpolitik, neue Folge, I Bd.
22. Pieper, Kapitalismus und Sozialismus als seeliches Problem, 1925.

第六章 次の社會と社會主義

一 社會主義と資本主義との相反

次の社會は個別的原理による社會より社會的原理による社會に向ふであらう。資本主義社會に相反するものとして社會主義社會が現出するのではない。何が次の社會であるかは、何が現今人心を離れ、憎惡の的となつて居る社會であるかによつて決められるであらう。なぜなれば、一と先づ次の社會は人心を離れ憎惡せられる社會と相反關係にある社會に向ふと解せられるからである。然るに、資本主義社會は社會主義社會と相反關係にあるのではない。資本主義的社會が現代人から離反され憎惡されるといふようなことはない。現代人の離反し憎惡するものは、もつと抽象的なものである。それは資本主義社會といふよふな具體的なものではなからう。

資本主義に對するものが社會主義であると考へるのは事物の眞髓に徹せざる皮相な見解である。社會主義に對立するものはその本質に従つて個人主義殊に個人主義的經濟秩序 (individualistische Wirtschaftsordnung) である。言はゞ、社會主義の「社會」と個人主義の「個人」とが相反關係にある。社會主義は個人主義による個人的社會秩序や個人的經濟秩序が害惡の泉源だとして、「個人」に置き換へるに「社會」を以てし、「全體」を以てせんとするのである。資本主義社會が人心をつながず、現代人より嫌忌せられ憎惡せられるとすれば、それは資本主義たるからであるよりも、寧ろ、個人主義の一種であるからと見られるからである。それで、資本主義から人心が離反したといふよりも、個人主義から人心が離反したのである。この意味に於て、社會主義と相反關係にあり、その敵であると見られるものを資本主義であるとするのは誤解である。それよりも、社會主義は個人主義一般を敵視し、それと戦を挑むものであると言つた方が正しい。個人主義の個人的見地そのものが害惡の泉源であることせられるから、社會主義者は社會主義にいふ社會的見地に置き換へなければならぬと考へるのである。

資本主義と社會主義とが對を造り、相反關係にあるのではない。それよりも、個人的原理 (Individualprinzip) と社會的原理 (Sozialprinzip) とが對をつくり相反關係にある。個人主

義と社會的主義（著者は社會主義の外、一切「社會」「全體」を基準にするものを前著「社會政策概論」（赤爐閣發行）に於て、「社會的主義」として表示した）とが對をなし相反關係にある。個人的原理は個人主義となつて現はれ、個人を基準にする。恰もズパン氏（Spann）が全體主義としての普遍主義（Universalismus）に對して個人主義（Individualismus）として表示して使用するものは個人を基點となし基準としたものである。個人主義は個人を目的となし、社會を手段と解す。著者も亦個人的原理をとり、新個人主義の立場にあるが故に、社會を個人の生存する便利重法なる手段と解す。個人がどこまでも生存の目的であつて、社會は個人の生きる方便たり手段たるのに過ぎない。社會主義者を始めとする凡ゆる社會的主義者は現代の害悪は個人本位であつて、社會本位でないところからくると言ふけれども、既に社會本位の現代的實驗は見事にその豫想を裏切つてゐる。現代に於ては社會的原理による社會は既に事實の上に成立して居る。現代の諸國家が餘りに中央集權的で過大なる權力を擁し、國民の一舉一動を監視し、支配し、命令し、このからくりを一時掌握する當時の政治家が國民の總意に反してその恣意を押しつけ得るのは「社會」なる偶像の跋扈しすぎるためではないか。社會主義はこの社

會なる偶像を過分に安置して、個人を社會の要素と化し、その器械體内の齒車として極端に個人の自由を奪ひ去らんとするものである。社會主義の目的は奴隸と貧困と罪惡との廢止にあり、奴隸、貧困、罪惡のない社會を建設せんとするのであるといふが社會主義は社會の偶像を過分に安置することによつて、個人から自由を奪ひ去り、不自由社會をつくり上げ、全人類を奴隸化せんとするのである（拙著「社會政策概論」四章を通讀せられたし）現代人はいづれも過分なる信用を「社會の偶像」に拂つて居る。社會主義は社會の偶像を過分に信用して居るが、この意味では、如何なる政體をとるにせよ、現代諸國家も亦社會的主義の一類であり、社會主義と同じ範類に入るべきものである。現代資本主義的國家は社會主義を正面の敵として戦つて居るが、實は資本主義國家そのものが既に社會的主義の一類として存在してゐる。社會を偶像とし本尊とすることに於ては資本主義國家も社會主義社會も全く同一である。たゞ、資本主義と社會主義とはその目標を異にするだけである。

過大なる中央集權的國家は現代流行の社會の偶像を安置禮拜して、少數の政治家たる奸雄（demagogue）の恣意によつて、民意を僭して獨裁政治を行つてゐる。少數の政治家たる奸雄

にとつて、その野心と専恣と横暴とをはたらかせるのに、これ程便利重實なからくりはない。中央集權的な民主政治と雖も、決して、別異なものでも、民意を尊重するものでもない。如何なる政治組織が現はれようとも、それ等のからくりにあつては少数者の支配たるに異りはない。ミヒエル氏の政黨の研究によつて指し示せしが如く、民主政治と雖も少數の奸雄の政治で、少數者はいつでも人民の名によつて専制政治を斷行し、少數のみの福利を圖りつゝけてゐる。この意味では、民主政體も亦少數者の傀儡となつて、その野心を遂行させる道具に過ぎない。海野の學說では一切は個人の生存に還元される。社會は個人をして一層よく生存せしむるからくりの外ならない。社會は個人がそれに依托して生存せんとする一種の生存形式に過ぎない。個人の生存が主で集團の生存は従であるけれども、一見集團生活が人類社會の基準たるが如く見え、人類が集團的規律によつて進退する所以のものは、人類は仲間生活以外によつて個人の生存をヨリよくなし遂げ得ないからである。人間の生活に於ては個人とその生存とが最も大切であつて、表裏共に個人的原理を主としなければならぬ。けれども、仲間生活としての外個人のヨリよく生きる途がないとして個人は假りに表面集團本位の生活をなすのである。但し

裏面に於て、その本質としての個人生活が常に躍動するを見免すことはできない。實は個人生活をなし遂ぐるために集團生活をなすのであるから、仔細に點檢するに於ては、表裏共に人間生活は個人的原理による生活に還元せられる。飽くまで個人は目的であり、社會は手段である。

この意味の開展は少數者の専横にも現はれてゐる。少數者と雖も人間たる限り、個人生活に終始し自分の生きる外餘念がない。少數者も亦廣き世界を自分限りのものと考へ、自分にこれを利用し、これを獨占しようとする意思をもつことに於ては何の異りもない。少數の奸雄は政治組織を道具に使ひ、それによつてヨリよく生きんことを念ずる人間なのである。素より、少數奸雄も亦利己主義者であり、功利主義者である。人間は偉さうなことを言ひ偉さうに振舞ひ、鹿爪らしい哲學觀倫理觀を開展するけれども、その實生活はあくまで利己主義に居り、功利主義に終始する。よく社會の實相を觀、その真相を靜觀する餘裕と能力とのあるものは、人間は如何にも利己主義者であり功利主義者であることを知るであらう。減俸騒ぎの最中、國內無数の官吏中、その位置の上下に關らず、一人として眞に國利民福の見地にあるものあるにあ

らず、ただ十圓二十圓差引かれるのが忌に、大規模な全国的な官吏労働争議を起した。この間、一人の理窟を云ふものなく、國事を談ずるものがない。これは幾十萬の官吏に現はれたる事實であるが、國民中比較的教養の高いこの階級に於ける出來事は素より一般國民に當て符めることができる。こゝに於て、日本人は全體として利己主義乃至功利主義者だといふことができ、更らに、これを文明諸國民に押し及ぼして、すべての文明人は利己主義者だと言ふことができよう。これによつて、人類を全體として利己主義者たり功利主義者たりと斷言して何の故障も何の差問もあらうとは思はれぬ。かくの如き利己的動物に對し、平常鹿爪らしい論理や道徳を振りまわし、所謂閑談をやつて居るが、泥を吐かすれば、何づれも、露骨な利己主義的動物たり、功利主義的俗物たるに毫厘の間違ひもあらうとは思はれぬ。平常試みる假面による修身齊家の哲學論や倫理談は現實社會には何の關係もない理想談たるまでである。

過分なる中央集權的組織が一種危険なる壓制組織となり易いのはこの理による。過大なる中央集權制度には最大の權力が集積されるが、この過大なる權力は人民の福利に用ゐられずして、それをあやつる奸雄の福利實現の道具に供せられる。言はば、少數の奸雄は中央に集めし

強大なる權力を用ゐ、自己の野心を遂行せんとするのである。過大なる中央集權制度が極端なる壓制を伴ひ易いのはこれが爲めである。權利をもつものは、これを濫用する傾きを生ずる。如何に善心なる政治家と雖も、權力を掌握すれば、それを自己とその福利のために使用するを免れぬ。政治家が特に横著なためでも、利己的なためでもない。人間なる動物は凡てかくの如き本能に支配せられて居り、自己のみ生きんとして、地球をすべて自分に厭搾し歸納せんとする衝動をもつてゐる。かゝる動向を所有する人間なる生物が支配階級なり特權者となれば、少數奸雄として、その掌中に中央集權による絶大なる權力を收めて我儘勝手を敢てするに何の不思議はない。特權者は國民のためよりも、自己のために權力を使用するにいたるべきは餘りに明白で、疑ふ餘地とは存しない。然らば、海野の集團的説に照らし、いよ／＼ミヒエルス氏の如何なる政治組織に於ても、少數者の専制政治となるに變りなしといふ斷定は益々その根據を固むるものと思はざるをえぬ。

この論理に照らし、一切の社會的偶像を押し立つる組織乃至制度は専制に傾き、壓制にいたるは明かである。社會主義社會は全體主義をとる社會的主義の一種であり、社會的偶像を安置

する代表的なものである。社會主義社會に於ては個人の自由は認められない。社會主義社會では豫期に反し、奴隷を産出して制壓を擅にする。中央集權的な社會は現代文明諸國家のもので、社會主義國家のもので大同小異で、「全體」、「集團」なる偶像を安置し、これに基いて、個人を制壓し、その自由を減縮する仕組たるを示す。然らば、現代資本主義國家と社會主義國家とは何の矛盾もなく、同一範類に入るべきものと考へられる。従つて、資本主義の對をなし、それと相反關係にあるものを社會主義と見做すわけには行かない。

次の社會を社會主義社會と考へるのは早計である。それよりも、過去の社會が如何なる生存の原則によつて居たかを見、その對をなすものが、次の社會であると見る方が正しいであらう。この意味では、次の社會と言つても、現に成立する社會で、現代國家、現代社會は既に多分に社會的原理 (Sozialprinzip) を入れてゐる。尤も、純粹に個人的原理によるとか、社會的原理によるとかと言ふやうなことは絶えてない。個人的原理と言つても、社會的原理と言つても、學の便誼による分類で、従つて、そのような嚴密な分界はない。現實な社會は彼此推移するを常則とするから、多くの場合、二のものが混つて居る。現代の諸國家を資本主義的國家

だとしても、それは専ら個人的原理によるものではなく、多分に社會的原理によつて居る。全體としては、現代の人類生活は「全體」、「集團」によつて立つて居り、全體を規律し規正することが大切な任務となつてゐる。こゝに權力の集中があり、抽象現はれ、社會といふが如き抽象的觀念的構成物に個人が奉仕して、社會を目的として生活する形式が現はれ、目的としての個人は遙かに後景に敗退するにいたるを見る。

ブリフス氏 (Brieffs) は次の社會の原則をたてゝゐる。氏によれば、次の社會は前の社會と正反對なる生活上の原則によつて入來する。如何なる時代の社會と雖も、確定不動といふようなものなく、従つて、變化しない社會ありとは考へることができない。然らば、「次の社會」などと事珍らしく言ふには及ばぬ。如何なる時代にも、それが可變的である限り、次の社會なるものは有りうる筈であり、又、如何なる時代にもあつたのである。然るに、この次ぎ／＼に現はれる社會は大體前の社會と對をなす觀念より出發すると考へられる。ブリフス氏は「如何なる社會組織と雖も、根源よりそれを理解しなければ了解することができぬ。社會的構造に於ける如何なる制度でも、その根源は時間的にそれに先行し、つねに精神的な眼を舊制度に向け

たので、それが常則となつてゐる」と言ひつゝ。 (Kein gesellschaftliches System verständlich ist wenn es nicht aus seiner Wurzel verstanden wird, und die Wurzel liegt für jedes System in der gesellschaftlichen Verfassung, die zeitlich vorangeht und bekämpft wird. Indem jedes neue System sein geistiges Auge immer gegen ein altes gerichtet halt, steht es unter dem Gesetz des allen) ブリーフス氏の原則に照らして見ても次の社会が社会主義社会であるといふことにはならないだらう。社会主義も亦次の社会の一種であり、一範疇であらうが、それよりも、個人主義的社会の代りに社会的原理による社会が現はれると解する方が正しいであらう。なぜなれば、前代については別に縷説した)これに代つて、現代人は社会を本位とする社会的原理による社会が現はれなければならぬと考へるであらう。これに従つて、前代の個人主義は諸々の形ちと程度とに於て bekämpfen されて居る。資本主義国家に於ても、個人の絶対自由放任といふようなことは容認されず、それは過去の夢となつて居り、現代国家は個人に干渉し、時に分を越えて

個人に干渉して、社会の規律に従はしめ、国家の強制に従はしめる。現代では各種の社会立法が急激に増加し、殆んど個人の自由を奪ひ去つて、一舉一動、全體の統率の下にもち來らんとするが如き形勢を馴致した。これ取りも直さず社会的原理による變化で、次の社会の斷片たり變形たるべきものである。だから次の社会を以て社会主義社会であると言ふことはできないが社会主義社会も社会的原理を體現するものとして次の社会の一形式たるであらうとは言はれらる。現代諸国家も社会本位主義たるに異りはなく次の社会の一種である。

前代の觀念と對をなす新觀念が現はれ、それが舊觀念舊制度を bekämpfen するのであるから、かく戰はれたる觀念に對をなし、正反對な觀念を原則とする社会はいつの時代にも次の社会たるべきであるといつて先づ考定することができやう。ブリーフス氏の對立的制度 (Gegensystem) を以て社会主義と認むるものはある。たとへば、ゾンバルト氏はその一人であるが、氏は社会主義の概念は資本主義社会と對をなすとする見地からのみ得られるもので、資本主義の對をなすものは社会主義であると言ひつゝ (allein eine richtige Erfassung und Ableitung des Sozialismusbegriffes möglich, wenn sie aus dem wesentlichen der

Kapitalistischen Gesellschaft und der sie beherrschenden Gegensätze heraus vorge-nommen wird) 氏に従つて、資本主義社會の對をつくれれば、それは社會主義社會であると云ひうるであらう。然らば、プリフス氏の對立的觀念によつて、次の社會を定むれば、ゾンバルト氏の次の社會と稱するものは社會主義社會のことだと言ふことにもならう。但し、資本主義制度の對の制度 (Gegensystem) なるものは社會主義ではなく、社會的原理による制度又は組織であると解すべきである。然らば、資本主義制度の對の制度は社會主義であるといふよりも、モット廣義な社會的原理を體現する總ての社會制度、すべての社會組織といふことにならう。然るに、社會的原理に對をなすものは個人的原理であるから、社會的原理に依據する單なる一例であるところの社會主義は資本主義と對をつくるといふよりも、一層適切には、個人主義と對をつくると言つた方が正しいであらう。前代の個人主義的經濟制度が害惡の根源であると見し現代人はそれと戦ひ bekämpfen して、その對をなす社會即ち社會的原理による社會を採用せんとしたのである。茲に於て、社會主義の對は資本主義よりも個人主義であるといふ斷言に達する。資本主義に對しても社會主義は個人的に形成せられたる資本主義的經濟制度を排

斥するのであるから、その排斥する標的は、この場合に於ても、個人的なものである。言はゞ資本主義に於ては、その個人的資本主義の邊を特に重視して社會主義の對をなすと考へるのである。

社會主義の對をなすものは個人主義であり個人主義的經濟一般である。Gegensystem として、次の社會が定められるものとすれば、個人主義の對をなす社會的主義社會 (社會主義社會にあらず) 若くは社會的原理を體現する社會が次の社會であるといふことになり、現代資本的國家も亦社會的原理を採用する邊よりはそれも亦社會的主義社會の一類として、次の社會として現はれたものと觀測することができるであらう。

二 個人主義と資本主義

向きに、社會主義と對をつくつて相反するものは資本主義ではなく、寧ろ、個人的原理を體現するものであるといふ斷定に達したが、この斷定は首尾にわたり、一貫して考察を加へなければならぬ。

デイチエル氏 (Dietzel) は一切の經濟制度を二の基本的規範 (Grundnormen) に分つことができ、それ以上分つことのできぬ原理に達することができるとした。デ氏のそれ以上分つことのできぬ二の基本的規範と稱するものは個人的原理と社會的原理とである。社會的原理はすべての個人の抽象的統一體としての「社會的全體」(Soziale Ganze) を最高の目的とするものであり、個人は社會體に奉仕する限りに於て意味あること、恰も四肢が全身に奉仕することによつて存在價值ありとせらるゝと同一義であると解する。個人的原理は個人を最高の目的とし、家庭、階級、組合、國家といふが如き大小の社會形體を以てすべて個人の目的に對し單に手段たるべきものと見做す。

資本主義は個人主義たる範圍内では社會主義と對をつくる。社會主義は「社會」「全體」を主義とする制度の名稱であり、これに對し、個人主義は個人を基本とする制度の名稱である。社會主義社會は個人主義社會の如く單純であり得ない。個人主義社會は最初それが個人の自由なる群集であつたとすれば、自然に集つたものが一團をつくつて生活したと解することができるが、社會主義社會に於てはかくの如き結合なき自由状態を考へることができない。社會主

義社會は個人主義の自然主義に對して人爲的構成物たるを示し、複雑なる制度と組織とをつくて、全體的構造なるものを造り出す。この全體的構造は海野が「社會政策概論」四章に於て精細に分析闡明したように、個人の生活を全く窒息せしめ、個人といふが如き具體的存在を全體といふが如き抽象的存在に轉成する。そこには水を飲み、パンを食ひ、笑つたり、泣いたりする個人は亡び去り、抽象的な社會の一模型たる個人が存するだけである。その社會では思想も信仰も藝術も一切社會的規律に支配せられ、それによつて定められるから、個人のもつ思想も信仰も藝術も亡び去り、社會が與へ命令する思想と信仰と藝術のみが残る。戀も社會が強制するであらうし、趣味も社會が強要するであらうし、習慣も社會が定めるであらう。自由にして創造する趣味や習慣など、言つて、個人の好むがまゝ、個人の欲するがまゝ、個人が行ふまゝに放任すれば、社會主義社會に謂ふが如き社會的構成としての全體組織なるものを維持することができない。社會を目的となし、個人を手段化すれば、社會を唯一の本尊となし、その維持のためには絶對に個人を犠牲にしなければならぬ。社會主義社會では一定の經濟組織を強制的なものとして、強制組織なるものを造り出すが、その社會に住む個人をして銘々勝手な經濟的

行動をさしてをいて、社會主義的經濟組織なるものを成立せしめ、又それを維持しようとする考へることは絶対にできない。この如く、思想に於ても、信仰に於ても、社會主義を支持せず容認せざる如きものを銘々個人が勝手に鼓吹し勝手に宣傳して居ては、社會主義社會なるものを成立し維持することはできない。こゝにも、社會主義社會は個人の思想と信仰とを強制し命令して、不自由なものとするであらうと想像する理由がある。よつて、社會主義社會に於ては、社會の御用思想と御用信仰とがあるだけで自由に創造する思想なるものなく、良心を以てする信仰なるものはありえないであらう。恐く、社會主義社會の供給する藝術は最も貧弱なる無内容な興味索然たるものであらう。全體、平均といふような死物に禍ひさるゝものが社會主義的社會の藝術であらう。かゝる仕組に於て藝術を談するのが既に愚であり滑稽ではないか。かくして、強制的制度として社會が一定の模型を傳達するに劍をもつてする社會主義社會にあつては自由に創造する思想と信仰と藝術とを望むことが、それ自身矛盾であるとさへ考へられる。

若し、社會主義社會に於ても、多少なりとも、思想らしき思想、信仰らしき信仰、藝術らしき藝術をかちえんとせば、社會的強制とその *Gebundtheit* を多少ゆるめねばならぬ。人間は

個人として生存することはできないから、社會といふが如き人爲的構成物を拵へて生存することとなつたのであるが、この人爲的構成物が偶像となり、本來の目的を忘れるようになれば、人間がその生存の道具として拵へてをいた筈のものが、今度は遂に人間をこき使ひ、これを奴隸として鐵鎖につなぎ呻吟せしむるにいたる。社會主義は個人主義の害惡にこりすぎて、今度は自由なる生活を極度に打ちのめし、その代りに、他の極端に走つて、極端なる不自由世界を造くり出さんとする。こゝに、個人は呼吸するにも、食ふにも、戀するにも、進むにも、退くにも、社會や全體の指圖を受けなければならず。個人は全く社會の奴隸となつてしまふ。これ本末顛倒のいたすところで、道具が却つて主人に馬乗りとなつて打ちのめして居るやうなものである。かくの如き個人と、その生活とを破壊するが如き馬鹿氣な經濟組織を以て、人間を解放する唯一の途となすは如何であらう。マルクスの資本論を社會の聖書であるが如く考へる現代人の批判力は未だ高しと言ふことはできない。

社會主義社會が多少なりとも、思想、信仰、藝術を産出せんとせば、社會、全體の壓制や命令を緩和しなければならぬ。社會に入つて始めて人となり、社會に入つて始めて自由を得、又

創造するなどと説くのは思はざるも甚だしき愚想である。社會に入つて始めて個人性を開發し人間性を開展することは分り切つて居るが、今度は社會が一定の型を強いて押し賣りしようとするれば、平均的個人、平均的人間といふような怪物が出來上り、個性も人間も死し亡んでしまふ。社會は素材なるまである。社會の素材を使つて、個人性も人間性も開發するが、社會の持つどの素材をどれだけ取らうとも、それをどういふように組立てやうとも、それは個人の自由として放任しなければならぬ。かゝる場合に於ては、社會が個人性をつくり、人間性を開發すると言ひうるけれども、社會のもてる素材の取り方と、その組立て方とを一定の型として差圖すれば、個性も人間も亡んでしまふ。社會主義社會では思想、信仰、藝術に對し、一定の窮屈なる型をつくり、これを偶像として拜まさうとするから、かくの如き不自由社會に於ては、自由に創造される思想も信仰も藝術もないと見る外はなからう。社會のもつ素材のどれを取らうとも、それをどういふように組立てようとも個人の自由とすれば、なる程、社會に入つて始めて創造することもできよう。社會主義社會はこれに反す。それは平均的思想、平均的信仰、平均的藝術を押し立てるまで、一切の創造を殺し去る。

社會主義者にして、これに反對し來り、その論旨を有効ならしめんとすれば、その *Zwangweise* な強制組織を漸次讓歩して緩めねばならぬ。社會が一定の型にはめる思想や信仰や藝術を多少緩め、それをして能きだけ自由ならしめなければならぬ。個人が社會にはいつて生活するは避くることができないけれども、個人をして社會の提供する素材を自由に取捨せしめ、それを自由に組立てしめるようにしなければならぬ。そこに自由があり、そこに創造がある。萬人の思想を命令し、信仰を強要し、藝術を控制すれば、如何なる形ちに於ても創造は死し去り、社會の強要する平均が代つてその姿を現はすだけである。あまりに俗衆にこびる現時の思想、信仰、藝術は單に賣物になるだけで、自由なる創造をなすことはできない。こゝにも、民衆の指揮し命令する不自由な型がある。

但し、社會主義社會にして、餘りにその強制組織を緩めるに於ては、その強制經濟組織は不可能となるであらう。社會主義社會には個人主義社會とは別個の害悪が必然的に附着するであらう。社會主義社會のうちにも竟に革命が現はれ、現今資本主義に對し呪咀の聲を放つて居るように、同じことが社會主義社會に於ても繰り返へさるゝであらう。かくの如き論理は社會主

義者、マルクス主義者等には不可解でもあらう。それ等の人々は恰も戀人に魅せられ、それに陶醉して、その長所美點のみを見る半ば盲人たる觀がある。

社會主義は個人主義と相反關係にあり、それと對をつくる。個人主義には自由があり控制せらるゝところがないが、社會主義はこれに對し、正義、秩序、法則にはまり込む。正義や秩序や法則が社會主義社會では大切であるのは、それは自然的存在ではなく、人爲的存在であるからである。自由主義は自然的存在たることができ、自由であり、創造であり、無拘束でありうるけれども、社會主義社會は非常に複雑なる人爲的構成體たらなければならぬ。かくの如き社會に於て、自由と創造との榮えざるは自明であり、その社會では、たかゞ正義であり、秩序であり、法則でありうるに過ぎないであらう。

個人主義は他の個人によつて強制されざるを原則とし、個人が權利と義務との主體であり、全く自由であり、創造と變化と個性とを基準とするが、これに對し、社會主義は他の個人と共通であり、他の個人と共に社會なる抽象的構造を維持促進發展するから、他の個人に對して正義としてその分を守り、他の個人に對し秩序と法則とを守らなければならぬ。個人主義は自由

に居り、社會主義は強制即ち不自由に居る。かくて社會主義と相反關係にあつて對をつくるもの、個人主義なるを明知することができらるであらう。

三 社會主義と集産主義

次の社會（現に行はれて居り、資本主義社會に於ても行はれてゐるところの）は社會的原理による社會であらう。前の社會が個人主義的社會であるとすれば、その對をつくる社會の何であるやを知ることができる。従つて、この原則に照らし、次の社會の何であるやを略豫知することができよう。これまで、個人主義が餘りに跋扈し過ぎたので、社會的害惡の著大なるを見るや、現代社會はその如何なる組織を採るものと雖も、一樣に、社會的原理をとるにいたつた。現代文明諸國の中、社會的原理を採りせざるものなく、いづれも、社會を基準として民衆、國民の福利を進めつゝある。社會主義も亦社會的原理を採りせし一形式として現はれてきたまである。これについては、現代諸國家も社會主義も何の異るところなく、兩者共に個人主義の弊惡著大なるに驚き、これが對策として、社會的原理を採りしたものである。

社會主義は集産主義 (Kollektivismus) の形ちをとるが、これ即ち社會主義が反自由主義的で、全體社會たるが故である。強制的經濟秩序、全體主義、それによつての規範、それによつての干渉は、何づれも社會主義が個人主義の反對をなし、秩序と法則とを基準とすることを物語る。集産主義は全體主義である。集産主義とは全經濟的過程と、個々の經濟分枝若くは個々の經濟側面の社會的統制をいふ。社會主義は全經濟過程の社會的運營をなす集産主義である。社會主義にあつては Gesellschaft としての社會がすべての基準であつて、經濟は個人の關心事にあらず、社會の關心事であり、個人は社會のため犠牲となり、社會に併呑吸收されてしまふ。社會を基準とする社會主義社會の不自由社會であり、反自由主義社會たるはこの理による。

集産主義的な社會主義は經濟の社會的統制によつて、個人主義に於ける生産の無政府状態を合理的經濟 (Planwirtschaft) の下にをき、労働を組織化せんとするもので、すべての經濟範圍にわたり、生産と消費と貯藏と需要とを社會的に統制せんとする。この目的を達するには、意思を統一し、行動を統一しなければならぬから、社會主義社會が集産主義なる限り、統一的

社會的意思の造成と、行動の一致とを促さなければならぬのは分り切つてゐる。こゝに、社會主義社會の不自由社會たる面影を髣髴することができる。統一意志の造成 (einheitliche gesellschaftliche Willensbildung) は社會なり國家なりが強制的に統一的意意をつくり出すことで、かくの如き社會に於て個性と創造と自由とに基く思想と信仰と藝術との開展しないのは一見明白である。かくる社會では個人を犠牲として全體の調子を整へさへすれば足りるが之は個人の生きる道具として造つた社會が、僭上にも今度は個人に馬乗りになつて、それを酷使する形ちである。全體、組織、抽象といふが如き社會組織に於ては、組織的思惟 (Organisation-sidee) が重視されるのは分り切つたことで、ローレンツ、フォン、シタイン氏が社會主義を表示して、それは組織的思惟であるとなし、Alle Erscheinung, in denen wir die organisatorischen Ideen auf einer bestimmten bewussten Grundgedanken zurückgeführt oder auch nur diesen letzteren selbst angestrebt behaven と言つたのは、それがためである。そこで、物資の獲得に於ても個人の自由を許さず、個人が任意に交易するといふ方式より、社會がそれを統制する共同經濟組織に轉するのである。社會主義經濟は組織につき、組

織を中心となし、秩序を基準とするので、個人主義の如き無政府状態に似たる經濟を國家若くは社會の生活體のうちへ意識的に排列せんとする。こゝに、社會主義の全體主義たる面影が鮮かに現はれる。

社會的な經濟の組織、秩序は社會の干渉によつてのみ實現せられるから、社會主義社會は干渉に終始する社會となる。組織乃至秩序と干渉とは相隨伴する觀念である。組織をつくり、秩序によつて、一氣に經濟を運營せんとすれば、個人の好むと好まざるとに頓着なく、これを強制しなければならぬが、強制するには個人に干渉しなければならぬ。言はゞ、社會主義社會は個人に徹底的に干渉する社會で、現時に於ても過大なる権力が中央に集積せられる結果として干渉度に過ぎ、個人の生活は極めて不愉快なものになつて居るが、社會主義の社會では一層個人の生活が不愉快となると想像せられる。中央には或程度の権力が、或程度の秩序維持のために貯へられなければならぬが過大なる権力の集積は何づれにしても害惡の泉源であり、権力に接近するものを化して専制者たらしめ、それをして惡政を擅にせしむる處れがある。社會主義は合理主義 (Rationalismus) によつて合理的に意識的に秩序をつくり、組織を編んで、個人

を統制し、全體主義的な經濟制度を造り出さんとする。社會主義はかゝる社會的な經濟の統制によつてのみ自然を克服して生産を合理的に成し遂げ、勞働生産力を組織的に向上して、人間を全體として福祉の増進をなすことができるかと考へてゐる。

この種の經濟組織は無論個人的原理に對して社會的原理によるもので、次の社會として現はれ出づべき一形式であらう。現代諸國家は社會主義と共に一樣に社會的原理を採用し、次の社會としての面影を何づれも具備しつつある。

四 社會主義と社會的原理の具現

社會的主義は社會的原理を具現するものとしての諸々の形式をとつて居るが、それは一樣に個人主義に對して社會的原理を具現するものである。資本主義と雖も、個人的資本主義 (Individualkapitalismus) より社會的資本主義 (Sozialkapitalismus) に轉じつゝあり、次の社會の面影を止めて居るのであるから、社會主義に於ては社會的原理は一層明かに具現さるゝを見る。